

文部科学省特別経費

「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」(平成22年度—平成27年度)

平成23年度「学生海外派遣」プログラム報告集

学 生 海 外 調 査 研 究

国立大学法人 お茶の水女子大学
リーダーシップ養成教育研究センター

平成24年3月31日

平成 23 年度「学生海外派遣」プログラム報告集 目次

区分	報告書	英文要旨
タイトル・派遣者氏名	頁	頁
海外調査研究（16名）		
「Off-Off-Broadway 劇場の調査」李 洪伊	… 1	90
「The 10th International Semantic Web Conference に参加して」大西 可奈子	… 6	91
「誘い談話における構造分析—「交渉話段」における中日言語行動の比較を中心に—」黄明淑	… 12	92
「フィジーにおける理学療法支援の持続性に関する研究」小檜山 希	… 17	93
「父親の IT 利用と子育て参加・夫婦関係に関する研究発表と調査」佐々木 卓代	… 25	94
「Circus Amok（サーカス・アモク）のパフォーマンスの上演・受容の状況」佐藤 里野	… 31	95
「助詞の誤りに対するリキャストとメタ言語フィードバックの認識—刺激回想インタビューの分析を通して—」菅生（高橋） 早千江	… 36	96
「14 世紀イングランド宮廷に関する史料調査」常木 清夏	… 41	97
「中国唐代の獄官令に関する史料収集及び現地調査—京城及び陵墓の視点を中心として—」永井 瑞枝	… 46	98
「シャンゼリゼ・バレエ団に関する文献収集、映像確認」深澤 南土実	… 52	99
「唐代長安城に関する現地調査」古内 絵里子	… 57	100
「地域の科学教育貢献を目的とする米国大学アウトリーチ活動の調査—Cornell Cooperative Extension の実践活動—」堀田 のぞみ	… 62	101
「ロンドン大学学会 Spectres of World Literature と世界文学の現状」松浦 恵美	… 68	102
“A Research on Plagiarism Practices in English Writing” 姚 馨	… (英文) 73	(和文) 103
「グリーグ・アカデミー音楽療法研究センターにおける臨床研究—文化中心音楽療法を基盤として—」生野（山本） 里花	… 78	104
「遺伝性疾患の子どもの家族を対象としたスティグマに関する研究についての調査」渡辺 基子	… 84	105

学生海外調査研究	
Off-Off-Broadway 劇場の調査	
李 洪伊	
比較社会文化学専攻	
期間	2011年10月1日～2011年10月8日
場所	アメリカ・ニューヨーク
施設	47 th ストリート・シアター、ラ・ママ実験劇場など

内容報告

1. 研究の目的および意義

演劇評論家であるエリック・ベントリー(Eric Bentley)は、最も簡潔に演劇を定義すると、「AがBを演じて、それをCが見る¹」ものだと述べた。今までの演劇研究が主に俳優の演技、作品(テキスト)、そして観客を中心として行われたことを考えると、これは正確な定義だと言える。ただ、この定義には、演劇のもう一つの重要な要素が言及されていない。その要素とは、演劇が上演される空間、即ち、劇場である。勿論、どの演劇雑誌を見ても劇評には劇場に関する評価は殆どないが、俳優の演技、作品、観客すべてを決めるのは、劇場だと言っても過言ではない。なぜなら、俳優は、劇場と舞台の大きさによって発声やジェスチャーなどの演技方法を調節しなければならないからである。劇作家も舞台の大きさによって作品の登場人物の数を変えなければならない。つまり、劇場が作品の性格を左右することになるといっても間違いではない。それに観劇という行為は、観客が客席に座った時から始まるのではなく、観る演目を決め、劇場に向かうときから始まる。ニューヨークのマンハッタンで芝居を見るのと、東京のある住宅地の小劇場で芝居を見るのは、同じ作品を観たとしても、決して同じ観劇にはならない。演劇は「いま、ここ」の芸術であり、それはテキストと今、この社会との関係も意味するが、上演される舞台という現場と今、そこにいる観客個々の歴史、感情などとの関係をより深く意味していると思う。

本研究は、このような劇場の役割を念頭において、現在の小劇場演劇の役割を考察することを目標としている。特に、私は博士論文のテーマとして、1990年代から本格的に始まった日韓演劇交流を調査しながら、主に両国の小劇場演劇を比較研究している。今回のOff-Off-Broadwayの調査を計画したのは、現代の日韓演劇界に莫大な影響を与えているニューヨークの演劇を直接体験し、最終的にはそれを韓国の演劇タウン「大学路(テハンノ)」で今起きている変化の動きと照らし合わせながら分析するためである。大学路とは、ソウルのヘファドンという町の中に、100館以上の中・小劇場が集まっている地域を示す。若手作家、演出家、俳優のインキュベーターである同時に、新しい作品が毎日生まれる芸術の場でもある。大学路がこのような文化空間になったのは、1975年、ソウル大学の統合方針により大学路にあったキャンパスが移転していったからである。その後、1985年の都市計画により「大学路」という名前が付けられ、小劇場の数が増えてきたのだ。しかし、実験性と前衛性が求められた時代が終り、文化産業の中心地として注目された1990年代からは大衆的な作品が多く製作され始めた。そして最近、このような動きに反発した「Off-大学路」が登場したのである。この新しい動きはいつまでも商業性を無視することが出来るだろうか。常に実験性、前衛性、そしてオールタナティブ性が求められる小劇場に、今の時代にはどのような代案があるのだろうか。この問題に答えるために、本調査では現在のOff-Off-Broadwayから小劇場の事例を調べることにした。まずイースト地域には、Off-Off-Broadwayの象徴ともいえるラ・ママ・実験劇場があるが、1960年代の象徴でもある本劇場が今はどのように運営されているかを調査した。そして、ウェスト地域の小劇場では、ニューヨーク・ミュージカル・シアター・フェスティバル2011が開催されていて、全世界から応募された新作のパフォーマンスが上演されていた。

このようにマンハッタンの小劇場を調べた結果、これらの小劇場演劇界が新たな代案として「アジア」というキーワードを考慮していることがわかった。今まで社会・政治・ジェンダーなど、主流に対抗する非主流としてオールタナティブな演劇が存在したなら、これからは人種の非主流、即ち少数文

化が新たな代案として注目を集めていると推測出来たのである。これは西洋人によるアジアの曖昧なイメージの借用とは異なるのである。特に、西欧の演劇論を勉強しながらその理論を活用して研究を行い、日本と韓国の演劇現場で働いている立場から、より国際的な視点で Off-Off-Broadway の現在を検討し、さらに課題を見つけることを本研究の意義にしたい。

2. Off-Off-Broadway の現在

2.1 非主流としてのアジア

2005年4月、PS122劇場では、アジア系アメリカ俳優6人が2001年に旗揚げした集団「Mr.Miyagi Theatre Company」の「Sides: The Fear is Real・・・」が上演された。これは、2003年8月に Fringe NYC Festival で初演された作品であり、脚本、演技、演出、制作すべてを劇団員が担当した。初演の時もアジア系・アメリカ人のアメリカ生活をコミカルに描いたと好評を得た²が、後に Off-Broadway の The Culture Project で再演され、再び「アジア系アメリカ人による愉快的風刺だ」と評価される³こととなった。この作品に関して韓国新聞であるハンギョレ 21 は次のような指摘をしていた；「(この作品が)PS122劇場で上演されたときは、アジア系の観客が殆どだったのに比べ、カルチャー・プロジェクト・シアターで上演されたときには観客層が全く異なっていた。⁴」これは何を意味するのだろうか。記事では、このような観客層の変化に関して、アジア人の物語を非アジア人の観客に見てもらうことに成功したと肯定的に評価していた。作品自体は政治的な主張をしているわけではないが、それにも関わらず、アジア系アメリカ俳優が自らの生活を舞台に移すことで、この作品は人種の問題として観られるようになったのである。

昨年、フランス・パリの劇場を調べた時も同様だったが、今回の調査でも街の人種の分布と劇場の中の人種の分布には大きな差があった。それぞれ二週間と一週間という短期間の調査ではあったが、それにしてもこの差は明らかなものだった。劇場がどの地域にあるかは関係なく、劇場に入ると白人だけがいたのである。主流に対抗する「非主流」の実験的かつ前衛的かつオルタナティブな場所である小劇場が、実際には芸術を共感する余裕を持つ「特別な」人種のために存在しているのだ。これを考えると、むしろ PS122 劇場が「Sides: The Fear is Real・・・」という作品を通して「非主流」の観客を劇場に呼び集めたことの方がより大きな意味があると言える。

ここで非主流という用語を考えたい。Off-Off-Broadway が誕生したのは1960年頃 Café Cino と Café La Mama がオープンしてからであるが、これらは既存の劇場の代わりに単なるオルタナティブな「場所」の役割だけを果たしたのではない。この空間は、演劇が社会的・政治的・芸術的な面で既存の価値と規範に挑戦する機会を提供してくれた。それはその時代の背景とも関係がある。ベトナム戦争と反戦運動、女性解放運動および市民権運動など、従来の社会構造に反発する動きが活発な時代だったからである。即ち、Off-Off-Broadway という新しい動きは、芸術としての演劇だけではなく、あらゆる非主流を代表するオルタナティブなパフォーマンスの場として機能したのである。しかし、Broadway の商業性に対抗し生まれた Off-Broadway が Broadway と同じく商業的な性格を持つようになったように、Off-Off-Broadway も今は初期のオルタナティブな演劇としての役割を果たしていないのではないのか？実際に、チケットの情報とレビューを提供しているさまざまなウェブ・サイトを調べてみたら、Off-Off-Broadway と分類されている作品の中には、Off-Broadway と殆ど区分できない作品が多数含まれていた。Off-Off-Broadway がオルタナティブな演劇としてではなく、作品の商業性を一次に試してみる場として利用されていたのである。1960年代から挑戦され試された黒人演劇、フェミニズム演劇、クィア演劇などが、まだ実験と挑戦というジャンルとして言及されているなら、今日の社会から疎外されている新非主流はまた Off-Off-Off-Broadway を作らなければならないのだろうか。小劇場、または公演のために一時的に劇場になった空間を通してあらゆる様式と形式が試されている現場は目撃したが、世界のどの都市よりも多文化が存在するニューヨークで少数文化、異文化のレパートリーは演劇でも非主流にすぎなかった。もしその非主流の文化が単純に新鮮さだけではなく、新しい「代案」になる可能性があるなら、それが上演される場所は、Off-Off-Broadway であるだろう。

その意味で、マンハッタンのイースト 4 番ストリートにあるラ・ママ・実験劇場(La Mama Experimental Theatre Club)は注目すべきである。この劇場は、マンハッタンにある最も有名な実験劇場であり、すべての国と文化圏の演劇が集まる場所でもある。よく知られているように、ここはファッション・デザイナー出身の Ellen Stewart(1919~2011)が無名の劇作家と新人俳優のために稽古場を提供する目的で建てたものである。この劇場が今の位置に移ったのは1969年4月2日であり、2009年には299席の「Ellen Stewart Theatre」がオープンした。現在、ラ・ママ実験劇場には、四つの建物があり、The First Floor、Great Jones、Ellen Stewart Theatre、La Galleria と構成されている。その中、Great Jones は、俳優の稽古場と共に、3階に「カルチャー・ハブ(Culture Hub)」の本部がある。ここには大きなモニターとカメラが設置されていて全世界と繋がっている環境となっていた。カルチ

ャー・ハブとは、2008年に韓国のソウル芸術大学との国際プロジェクトとして企画され、講義などで活用されているシステムを示す。2009年には講義以外に、ソウル芸術大学との合作公演を作る時にも使われた。このプロジェクトは一時的なイベントとしてではなく、継続的な交流の実現させる重要な通路であり、これはアメリカと韓国の2カ国の交流に止まらず、より多くの国の芸術家たちを繋ぐ役割を果たしている。特に、「Think Tank」という場では、インターナショナル・プログラム・ディレクターである Billy Clark(アメリカ)を中心とし、イタリア、トルコ、マケドニア、クロアチア、セルビア、オーストリア、韓国、そして日本の芸術家たちが情報を交換している。

このようなラ・ママ実験劇場の活動は最近の特徴ではない。ここでは今まで約70国の作品が紹介されてきたと知られている。そして、その中には韓国の作品30~40作品が含まれている。ラ・ママ実験劇場で韓国の作品が上演され始めたのは1960年代からであり、代表作はカン・ウォルドの「頭の狩り」、ユ・ドッキョンの「秩序」、アン・ミンスの「ハミョム・テジャ」などがある。ユ・ドッキョンは今、韓国ソウル芸術大学の総長であり、2005年からラ・ママ実験劇場にインターン制度を作り、毎年韓国の大学生が実習教育を受けるようにしている。大学という教育機関との交流を通して実践中心のカリキュラムを作り、さらに2001年6月と2007年10月にはソウル芸術大学でStewartの記念講義が行われた。そして、今年の6月には1977年に同劇場で上演された「ハミョル/ハムレット(Hamyul / Hamlet)」が再演された。ユ・ドッキョンの娘であり、現ラ・ママ実験劇場の芸術監督であるユ・ミアの企画によって行われた本上演は、アン・ミンスの息子、アン・ビョングが演出を勤め、1977年初演の2世たちが手掛けた作品だと言える。いくつかの劇評からもわかるように、今回の「ハミョル・ハムレット」は韓国の伝統的な様式で完全に再解釈された「ハムレット」であり、アメリカでは珍しく韓国語で上演された公演であった。しかし本作品に参加したスタッフを見ると、韓国人だけではなく、アメリカ人と日本人などが含まれていて、国際的な作品だったとも言える。⁵

ラ・ママ実験劇場が今まで最高の実験劇場として評価されてきたのは、どの国のアーティストにも機会を与えながら、芸術的なレベルも維持したからである。実際に、ここは未来の大作家、大演出家、大スターが誕生するための、インキュベーターの役割を十分に果たしている。「ラ・ママ実験劇場で上演された作品」と言うだけで、期待されるようになるのだ。これは決して商業性を試してみるのとは目的が異なる。このような劇場に多くのアジア人のスタッフが勤めていることは大きい意味があると思う。インターンとして働く韓国人を含め、日本人、フィリピン人などが、自国の作品を分析し、翻訳の問題にも関与できる環境が出来ているのである。これは結果的に、ニューヨークのなかにはさまざまな演劇が存在することになり、さまざまな観客が育てることと繋がるだろう。演劇が「いま、ここ」の芸術である以上、観客は必修的な存在であり、その観客を育てることは短期間では不可能である。そして、この観客の問題は演劇が本来から持っている大衆性と関連している。

2.2 小劇場フェスティバルの機能

Tony Awards が終わった後の Broadway には多くの観光客が集まるが、今年の話作は受賞作だけではなく、莫大な制作費がかかったミュージカル「スパイダーマン」だった。そしてこの話題は劇評家たちにも影響を与えていた。すべての評論家が酷評をした「スパイダーマン」がチケットの売り上げの面では成功していることに対し、いったい劇評は何のために存在するかが問われていたのである。

劇場が集まっている Broadway では商業劇と実験劇が共存している。それは韓国の大学路も同じでテハンノ演劇と通称される中・小劇場の演劇には、観客から芸術性と商業性の両方が求められる。評論家が時間をかけて書いた劇評は権威を失い、今夜観劇する作品を決めるためにブログやツイッターなどのレビューを探す時代になったのである。これは急に訪れた危機ではない。エリック・ベントリーは、産業主義、資本主義、民衆主義の運動は前例のない現象を作ったと言い、現代と呼ばれる時代の演劇がいかにその前の時代と異なっているかについて述べた。特に、演劇の大衆性とは、近代以前まで文盲の庶民も楽しめる演劇の特殊な要素だと思われてきたが、今は商業性を高めるために計算されたプロットやスペクタクルなどの要素を示す言葉になっていることを指摘した。⁶ 実際に演劇を作る時には、この二つの大衆性を考慮しなければならない。ほかのどの芸術ジャンルよりも、観てくれる人、即ち観客が必要だからである。演劇作品の製作は、国公立劇場と私設劇場を問わず、ビジネスとしての企画と戦略によって行われている。今は文化政策の次元で上演がサポートされ、作られる場合も多い。問題は、この産業と政策の中でどのような大衆性を主に求めるかである。最近、韓国の大学路で流行のように小劇場のフェスティバルが増えているが、一貫したテーマを企画し、演劇作品の質を維持しながら、観客を確保する方法としてフェスティバルという方法が注目されているのである。

10月、マンハッタンにもこのようなフェスティバルが開催されていた。9月26日から10月16日までマンハッタンのウェスト地域の小劇場で行われたニューヨーク・ミュージカル・シアター・フェスティバル(New York Musical Theater Festival、以下 NYMF)がそれである。全10箇所の会場で25作の新作ミュージカルと10作の特別コンサート、6作のリーディング公演、5作の特別イベント、3

回のセミナーが行われた。名称はミュージカル・フェスティバルだが、すべてのジャンルとすべての国の劇団が参加できるフェスティバルである。特に NYMF は、アジアで唯一のミュージカル・フェスティバルである韓国のデグ・インターナショナル・ミュージカル・フェスティバル(Daegu International Musical Festival、以下 DIMF)の姉妹フェスティバルとして、アジアとの交流も行っている。ただ、DIMF の場合、参加作を小劇場の作品に制限していないため、フェスティバルの性格は多少異なっていて、大劇場の創作およびライセンス・ミュージカルと小劇場の創作ミュージカル、そして大学演劇学科の学生たちによるアマチュア作品までをサポートしている。それに海外一主にアメリカの作品を加え、豊かなプログラムにしているのである。このようなフェスティバルが可能な理由は、デグが、韓国の政府から舞台芸術産業の都市として指定された地域であり、映画産業の都市として指定されたプサンと共に、韓国の地域芸術を活性化するという目的を持っているからである。

これに比べ、NYMF は典型的な小劇場ミュージカルを中心とし、新人作家と作曲家、演出家に新作を上演する機会を与える役割を果たしている。このフェスティバルが行われる会場がすべてマンハッタンのウェスト地域の小劇場に集まっていることも特徴であり、フェスティバルの参加作は Off-Off-Broadway と分類され、割引チケットを扱うチケット・オフィスでは販売されないシステムであったが、Facebook とツイッターを利用したオン・ライン宣伝は活発に行われていた。今年で 8 回を迎えるこのフェスティバルは寄付金募集や授賞式、Gala show などを準備し、観客を積極的に参加させることで、アメリカの小劇場フェスティバルのなかで最も大きいイベントになったのである。それに NYMF には、アメリカに限らず、どの国からも参加ができる。今回、アジアから参加したアーティストは韓国の音楽家、クック・セジョンしかいなかったが、ジャンルは比較的に多様な構成となっていた。

このフェスティバルの最も重要な意義は、本格的なインキュベーターの役割をすることである。今年の参加作のなかで最初に全席売り切れを記録した「J.オースティンのプライドと偏見、ミュージカル」は中劇場の作品としても変更可能な面々が見られたが、基本的に新作は小劇場の小さい舞台を十分に活用した作品が多かった。ミュージカルというジャンル自体を再定義しようとする特徴も見られ、エンターテインメント・ショーとして構成される大劇場の作品では観られないさまざまな個性を持つ作品が紹介されたのである。厳しいショー・ビジネスの競争のなかで、このような新作が上演の機会を得ることは非常に難しいため、NYMF は新しい芸術家を誕生させる機能を持つと同時に、多様な作品を培養する役割も果たしていると言える。

このような企画のなかでミュージカルのグローバル化と翻訳の問題が論じられるのは有意義なことだと思う。それは、フェスティバルの期間中に開催されたセミナーであったが、特に最近ミュージカル・ブームである韓国演劇界が取り上げられていたことも印象深かった。韓国でミュージカルが初めて上演されたのは 1960 年代だが、上演の数が増えたのは 1990 年代になってからである。アメリカとユーロップのライセンス作品が多く上演されているが、その一方、ロングランする小劇場の創作劇も登場し続けていて、ストレート・プレーが殆どだった大学路小劇場でも、最近ではミュージカルの上演の数が増えている。韓国の戯曲の中で唯一、日本で一つの作品が単行本として出版されたのも、ミュージカル「地下鉄一号線⁷⁾」である。これらの創作ミュージカルは、現在の韓国人観客を感動させる物語を武器として、韓国の小劇場ミュージカルの独特なスタイル(様式)を作っている。即ち、NYMF から注目された韓国ミュージカルへの関心は、ただのマーケットとしてだけではなく、アメリカの芸術様式であるミュージカルがどれだけその形を変えられるかをめぐる関心でもあった。2009 年には NYMF が韓国の創作ミュージカル「My scary girl」を招請し、観客から好評を得たこともある。緻密に計算された大劇場の興行作の場合、ライセンス・ミュージカルとして翻訳されても、俳優の動きや動線までがすべて決まっている時もあるが、それに比べ、現場と観客との共感を重要視する小劇場の作品は翻訳の過程であらゆる創作が再び生まれることになる。特に、口語の翻訳は言葉以外のコミュニケーションの文化の翻訳にもならなくてはならない。つまり国際的なフェスティバルは、作品の多様さだけではなく、むしろ観客の多様さに気づく必要があるのである。

3. 今後の課題

本調査から見つけた課題を要約すると、以下の通りである。1. 現在の小劇場演劇を調べ、より具体的な小劇場論を整理する。2. 巨大な商業劇のマーケットの中で小劇場演劇がどのような代案を提示しているのかを把握する。3. 演劇作品が国境を越えることで、どのような代案が提示できるかを究明する。

産業化・大衆化が進んだ 1990 年代の大学路には、日本の「静かな演劇」と呼ばれる小劇場演劇の作品が紹介され始めた。その作品は、日本の物語としてだけではなく、新しい演劇としても注目を浴び、現在、韓国ではこの作品群が代表的な日本演劇として言及されている。今は日本作品の翻訳作、翻案

作と共に、日本からの来韓公演、日韓共同制作の合作公演など、両国の演劇交流が活発に行われている。勿論、この交流と共にお互いの演劇に対する学術的な交流も徐々に行われ始めている。問題は、日本も韓国も演劇研究において西洋理論に依存するしかなかった環境が続いていることである。本調査を通じては、日韓の現代演劇を語るために、日韓の現場と理論、そして西洋の現場と理論をすべて視野に入れて研究しなくてはならないことに気付くことができた。なお、本調査から得られた課題は、演劇評論誌である『シアター・アーツ』に投稿する予定であることを申し添える。

注

1. Eric Bentley, *The Life of the Drama*, New York: Athenium, 1983, p150.
2. nytheatre.com Kelly McAlister の劇評参照。 <http://www.nytheatre.com/showpage.aspx?s=2003177>
3. New York Times の Jason Zinoman の劇評参照。 <http://theater.nytimes.com/2005/08/26/theater/reviews/26fear.html>
4. ハンギョレ 21、ヤン・ジヒョン(2005年10月4日「アジア人がオーディションに参加したとき」)。 <http://news.naver.com/main/read.nhn?mode=LSD&mid=sec&sid1=103&oid=036&aid=0000009643>
5. nytheatre.com(nytheatre.com(<http://www.nytheatre.com/showpage.aspx?s=hamy12790>))の劇評 New York Times (<http://theater.nytimes.com/2011/06/29/theater/reviews/hamyulhamlet-korean-language--adaptation-at-la-mama.html>)の劇評参照。
6. Eric Bentley, *The Playwright as a thinker*, university of Minnesota press; Minneapolis London, 2010,p279 参照。
7. 1994年に大学路の小劇場ハクジョン(現ハクジョン・ブルー)で初演された「地下鉄一号線」は、韓国の歌手出身キム・ミンギの脚色・演出した作品である。原作はドイツの「Linie1」(Volker Ludwig 作、Birger Heymann 作曲)だが、韓国の現代史を繊細に描いた作品として高く評価されている。初演から毎年上演され2008年には4千回上演を記録したこの作品は、2001年金重明の翻訳により新幹社から出版された。

参考文献

- 高橋雄一郎・鈴木健編 (2011)『パフォーマンス研究のキーワード：批判的カルチュラル・スタディーズ』世界思想社。
Eric Bentley (1983) *The Life of Drama*, New York: Athenium.
Eric Bentley (2010) *The Playwrights as a thinker*, Minneapolis London.

い ほんい／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

日本および韓国の小劇場を対象に研究を続けている研究者として、第三の視点、すなわちアメリカのオルタナティブ演劇の実態を把握し、この研究を相対化する視点を獲得したことはたいへん有意義であり、今後に生かすことができる大きな成果であったと評価する。PS122 やラ・ママ実験劇場等現地の劇場を実際に検証し、歴史的な文脈の中で現在を検証したことも今後の研究に有効である。その際ニューヨークパブリックシアターについても検証してほしい。というのも、ラ・ママや PS122 と並び、マイノリティのアーティストを擁する、すでに「エスタブリッシュされたオルタナティブ演劇」という撞着語法的活動を展開するのがパブリックシアターだからである。とくに 90 年代以降、伝説的な芸術監督(『コーラス・ライン』や現在も続くセントラルパークでのシェイクスピア上演を成功させた)ジョーゼフ・パップ亡き後、どのような戦略をもってオルタナティブを展開していったかを検証するとよい。いっぽうアジア系アメリカ人による演劇の考察はオルタナティブという視点からはやや議論が大まかであり、さらなる検証を要する。翻訳についての考察は、文化研究的な視点が欲しい。

今後の課題としては、グローバル化する演劇市場に対し、オルタナティブの持つ可能性を検討するに際し、理論的な検証、すなわち、ネオ・リベラリズムによって促進される消費資本主義と不可分の文化についての理論的な考察が必要であろう。また、文化政策という視点をさらに探求し、各国の助成金や政策による金の流れと文化がどのように関係しているかを比較検討することも重要である。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・戸谷陽子)

学生海外調査研究	
The 10th International Semantic Web Conference に参加して	
	大西 可奈子
	理学専攻
期間	2011年10月21日～2011年10月29日
場所	ボン（ドイツ）
施設	Hotel Maritim

内容報告

1. はじめに

2011年度「国際的に活躍する女性リーダー育成」推進事業の支援を受け、2011年10月23日から27日までドイツのボンで開催された The 10th International Semantic Web Conference に参加してきたことについて報告いたします。残念ながら本会議およびワークショップで発表をすることはできませんでしたが、初めての ISWC2011 の参加は私にとって非常に大きな経験となりました。一つ目は、セマンティック Web 研究のトップの学会に参加することが、これからの研究意欲に結びつくことです。二つ目は、会議で発表される研究内容を知ることにより、現在行っている研究をより良いものすることができることです。

まず一つ目ですが、先ほど述べましたように、この会議は私が研究しているセマンティック Web 研究においてトップの国際会議です。私は今の研究分野にしたのが比較的最近であったこともあり、ISWC の存在は知っていたものの、参加することはできていませんでした。また ISWC は——ISWC に限らず、トップクラスの国際会議は——参加費も非常に高価で、かつ欧州で開催されることが多いため、気軽に参加できない会議でありました。ですので、今回、このように補助をいただくことができ参加できたことを本当に嬉しく思うと同時に感謝しております。

今回、会議が開催されたドイツは Semantic Web に関する研究が世界的にみても盛んな国です。そのためか、ISWC2011 には、今年も Massachusetts Institute of Technology の Alex Pentland 教授をはじめとする著名な先生方が基調講演に来られました。また、日本からは発表こそなかったものの、大阪大学の古崎先生、国立情報学研究所の武田先生等日本における著名な Semantic Web 研究の先生方の参加も見られ、お話をさせていただくこともできました。また、今回は先日発表されたばかりの、日本で行われる Semantic Web チャレンジの宣伝もされると聞いております。Semantic Web チャレンジは ISWC2011 のプログラムにもありますように、主に欧州においてすでに行われているチャレンジであります。内容は、ここでは具体的には述べませんが、例えば Semantic Web の技術のひとつである Linked Data の作成コンテスト等がその一つです。日本においては Semantic Web の研究はまだ遅れがちですが、日本でも Semantic Web チャレンジが行われるのだということアピールすることにより日本の Semantic Web 研究を世界にアピールするチャンスだと考えられます。

二つ目に関しては、通常関連研究を調査する場合、ひとつの学会に発表されている論文をすべて調査するというは行いませんし、またやろうと思っても困難な作業です。関連研究の調査は文字通り、自分の研究に深く関連する研究を調査します。しかしそうして研究を進めていくうちに、しばしば視野が狭くなりがちです。そのため、今回のような、ある分野で最先端の研究が発表される場で、それらの発表をすべて聴くということは、その研究分野の現在の流れを知るだけでなく、自分の研究を客観的に見直す非常に良い機会でもあります。

以上の二点が、今回の学会参加によって私が得た大きな経験です。

2. Consuming Linked Data 2011 について

ISWC2011 のプログラムにおいて、まず最も興味深く、かつ私が現在行っている研究と近い Consuming Linked Data 2011 ワークショップについて述べたいと思います。本ワークショップには私も論文を投稿させていただきましたが、力及ばずアクセプトされることができませんでした。従って、本ワークショップに参加することにより、私の研究の弱点や問題点を洗い出せることを期待し、参加

させていただきました。

COLD2011 ではフルリサーチが 16, システムが 3, ビジョンが 6 の発表がありました。

まず The University of Texas at Austin の Daniel P. Miranker 教授から, Removing the Potholes in the Road to the Semantic Web と題したセマンティック Web が広がっていくために除去しなければならない問題についての基調講演がありました。私が研究している Semantic Web は, 今後の Web となるのが前提となっていて行われている研究ですが, 実際のところ Semantic Web が広まるためには様々な障害があると言われていました。この講演でより具体的にその問題を理解することができたように思います。具体的には, より大きな Linked Data のデベロッパーコミュニティを形成すること, コンテンツ/アプリケーションの作成ツールが必要であること, かつ簡単で, 親しみやすいものであるということ, 等が教授によって挙げられました。これらの問題は様々な形で研究されており, 今後より良い解決をなされることが期待されています。

続いて, 研究発表について簡単に述べていきたいと思います。

Fouad Zablith, Mathieu D'Aquin, Stuart Brown, Liam Green-Hughes による Consuming Linked Data within a Large Educational Organization では, イギリスの大学において, 実際に Linked Data が活用されている例を 3 つのユースケースにより, 技術的なものを含めて紹介されました。イギリスは Semantic Web 研究だけでなく, こうした実際の利用が非常に盛んな国であり (BBC 等も利用しています) またこういった事例が出たのかと感慨深く思いました。

Elena Simperl, Barry Norton, Denny Vrandečić による Crowdsourcing Tasks within Linked Data Management では, Linked Data やリンクド・サービス・テクノロジーを改良することによって人間とコンピュータの知性が相互に存在できるようなフレームワークを提供するためのアイデア等が述べられました。これまでは確かに, Linked Data を一定のクオリティに保つにはどうしても人間の手によるものが必要でしたが, この研究が示すように, 今後は人間とコンピュータの知性が相互に存在するためのフレームワークが必要になってくるのではないかと感じました。

Xingjian Zhang, Jeff Heflin による Using Tag Clouds to Quickly Discover Patterns in Linked Data Sets では, RDF データのためのタグクラウド技術について述べられました。セマンティック Web においてはタグクラウド技術の研究が非常に盛んですが, まだ新しい研究がなされているということが非常に勉強になりました。本ワークショップにおいても, これだけでなく他にも数件タグクラウドに言及している研究がありました。

Magnus Stuhr, Dumitru Roman, David Norheim による LODWheel - JavaScript-based Visualization of RDF Data では, RDF データ可視化のためにこれまでに作られた JavaScript ライブラリの評価を行うと共に, JavaScript ベースの RDF データ可視化するための新しい技術 LODWheel を提案されました。グラフ上の可視化はカラーで直観的にわかりやすいと感じました。また, ノルウェーで行われている二つのプロジェクトも紹介されました。

Khadija Elbedweihy, Suvodeep Mazumdar, Amparo E. Cano, Stuart N. Wrigley, Fabio Ciravegna による Identifying Information Needs by Modelling Collective Query Patterns では, クエリログ分析, およびどのようにそのような分析を利用するかを形式化するためのアプローチが示されました。さらに SEMLEX という, 質問の分析によってユーザの情報ニーズの調査を促進するビジュアル化されたインタフェースも提案されました。また, DBpedia を利用したユースケースによる説明もありました。DBpedia は詳しくは述べませんが, 私も研究で使わせていただいております。DBpedia はこの研究以外にも多くの研究において利用されており, 私も今後も利用させてもらおうと思いました。

Daniel M. Herzig, Thanh Tran による One Query to Bind Them All では, 複数のデータセットにひとつのクエリを投げることにより全ての結果をもらうためのアプローチを 5 ステップで提案されました。また, 先の研究にも出てきた DBpedia 及び IMDb を使った実験も公開されました。私は IMDb (映画についての情報の RDF バージョン) のことを知らなかったもので, それを知れたことも収穫となりました。IMDb は今後, 研究で使わせてもらおうかもしれません。

Florian Schmedding による Incremental SPARQL Evaluation for Query Answering on Linked Data では, RDF データのための標準照会言語 SPARQL を Linked Data へ適応する時に生じるクエリ過不足問題に対して, SPARQL 代数の形式的分析によって解決を試みています。これは, 挿入と削除の数に依存する推測上最良である計算を選ぶオプティマイザのデザインのための増分の評価のコストを評価することができます。さらに, Linked Data から SPARQL データセットの構築も提案されました。本研究を知るまで, 私は研究を行う上で自然に SPARQL を Linked Data に利用していましたが, ここにも実は隠れた問題があったのだということに気づきました。SPARQL そのものの問題に研究として寄与する予定は今のところありませんが, このような問題もあったことを知れたという意味で非常に勉強になりました。

OlafGorlitz と Steffen Staab による **SPLENDID: SPARQL Endpoint Federation Exploiting VOID Descriptions** では、RDF データも従来のデータベース同様、利用者が意図しなくてもスムーズに利用できるようになる必要があるという考えに対し、Linked Data と従来のデータベースのアプローチには大きな差があるため、RDF に従来のデータベース技術を適応することは簡単ではないと問題提起がなされました。そこで、SPLENDID (voID descriptions から得られた統計データに基づいた SPARQL エンドポイントを連合させるための質問最適化戦略) が提供されました。

Andreas Schultz, Andrea Matteini, Robert Isele, Christian Bizer, Christian Becker による **LDIF - Linked Data Integration Framework** では、LDIF (Linked Data Integration Framework) フレームワークのアーキテクチャーについて記述され、ライフサイエンス・ユースケースのパフォーマンス評価も示されました。LDIF は、Web の異種混合データをデータの出所を保持したローカルの目的表現に翻訳するための、Linked Data アプリケーションにおいて利用できるフレームワークです。フレームワークそのものを利用するかどうかはわかりませんが、Linked Data アプリケーションを作成している私にとって、本研究のフレームワークの考え方そのものが非常に興味深いものでした。

Peter Haase, Michael Schmidt, Andreas Schwarte による **The Information Workbench as a Self-Service Platform for Linked Data Applications** では、Linked Data アプリケーションを作成するのにサポートするインフォメーション・ワークベンチが提案されました。Linked Data アプリケーションの発表があることを期待していたのですが、本研究や前述した LDIF のように Linked Data アプリケーションを構築するためのフレームワーク研究も盛んなのだということを知れてよかったです。

Valentina Presutti, Lora Aroyo, Alessandro Adamou, Balthasar Schopman, Aldo Gangemi, Guus Schreiber による **Extracting Core Knowledge from Linked Data** では、任意のデータセットの中心となる type や property を自動で取り出す手法について語られました。データセットの知識はしばしば不定形にて組織されているため、一般的にそれに対してどのようなクエリを書けばいいのかわかりません。そこで、知識パターンに基づいたデータセット自動解析アプローチが提案されました。この研究は非常に興味深かったです。私も Linked Data のあるデータセットを使おうとした時、しばしばこの問題にぶち当たるからです。現在のところ自分で調べるしかないのですが、これが自動で正確になされることができるのであればすごいことだと思います。また、私もデータセットからある知識を抽出する研究を行っているため、目的は違いますが手法や考え方は参考になることもあるのではないかと思います。これについては、後日、熟慮してみるつもりです。

Benjamin Zepilko, Brigitte Mathiak による **Defining and Executing Assessment Tests on Linked Data for Statistical Analysis** では、統計的な解析のための Linked Data の Executing Assessment テストが定義されました。これに限ったことではありませんが、本ワークショップにおいては Linked Data に統計的処理を行う扱う研究は多かったように感じました。

Marcus Cobden, Jennifer Black, Nicholas Gibbins, Les Carr, Nigel Shadbolt による **A Research Agenda for Linked Closed Data** では、Linked Open Data—その名の通り、広く公開された Linked Data—と反対に、クローズドな Linked Data である Linked Closed Data が提案されました。これは vision paper (先見性のある論文) カテゴリで発表されました。確かに Linked Open Data はしばしば法的・プライバシー的に問題があり、将来的に Linked Closed Data の定義が必要となってくるかもしれないと思っていたので、とても興味深い発表でした。

Julia Hoxha, Anisa Rula, Basil Ell による **Towards Green Linked Data** では、作られた Linked Data がグリーンかどうかを判断する条件を策定し、それをチェックするシステムが作成されました。発表にもあったように、近年 Linked Data は膨大な数になってきているけれども、そのクオリティ自体は下がってきていると言えます。クオリティの低いコンテンツが集まって、大きなサイズのデータになっている場合もあります。そのようなミスが含まれている Linked Data を減らすために、このシステムはある程度有効なのではないかと感じました。私は現在のところ Linked Data の応用研究を行っているため今使うことはなさそうですが、将来 Linked Data の制作をすることがあれば利用してみたいと思います。

COLD2011 の Closing Discussion では、昨年と今年のジャンルのバラつきについて言及されました。昨年は、

- Meta-data based consumption 1
- Dataset dynamics 1
- Knowledge discovery 2
- User interaction, usability, visualization 1
- In use and systems 1
- Temporal Linked Data 1

- Services and Linked Data 1
- とバラつきがあったのに対し、今年は、
- Query processing over multiple datasets 3
- Meta-data based consumption 1
- Knowledge discovery 3
- Information quality/trustworthiness 1
- User interaction, usability, visualization 2
- In use and systems 4

と、比較的偏った結果となりました。しかし、これに関しては悲観的に考えず、来年の投稿を待つと言った意見が多く見られました。また中には、もっと使えるアプリケーションとしての **Linked Data** に関する論文が増えて欲しいという意見もありました。私は応用分野をやっているの、こういった考え方があることは非常に好ましいことです。

最後に、今年で二度目を迎える **ISWC 2011 Linked Data-a-thon** において、ノミネートされた **Linked Data** を使ったアプリケーション 4 つの内から投票でトップを決めるためのデモが行われました(実際にデモされたのは以下の 3 つでした)。投票はインターネットで行われました。

- ISWC 2011 Conference Explorer
- Conformation
- Friends and Facets

どれも非常に素晴らしい出来だったのですが、**Linked Data** の新しい使い方という意味ではどれも少しインパクトが弱かったように思いました。そのあたりは **Linked Data** を使うに当たって、今後の課題なのかもしれません。

COLD2011 全体を通して、採択された論文は、デモが行えるような完成度の高い可視化(タグクラウド含む)や分析が特に多かったように感じました。また、かなり大規模な研究も多く、大きなプロジェクトがたくさん動いているのだということを感じました。このような中に、大学の研究室の研究を採録させるためには、大きなプロジェクトではできないような一風変わったアイデアやアプローチが必要なのではないかと感じました。また、**Linked Data** を利用した応用研究はあまり多くなく、その点においては少し期待外れでもありました。丁寧に造られたソフトウェアの紹介は幾つかあったのですが、それが本当の意味で使え、使ってもらえるアプリケーションなのかということは疑問でもあります。また、アプリケーション作成のためのフレームワークの提案も複数ありましたが、今後はそのようなフレームワークを利用して、**Linked Data** を利用するからこそ便利であり、かつユーザに実際に利用されるアプリケーションを提案することが重要なのではないかと感じました。しかしながら、今後の私の **Linked Data** の研究の方針を考える上で、本ワークショップへの参加は多くの収穫があったように思います。

3. ISWC2011 メインカンファレンスについて

2011 年は素晴らしいサービス (facebook や twitter 等) がたくさん盛り上がった年でした、というコメントから始まったオープニングトークは、早くも来年の **ISWC2012** への意気込みと今回のベストペーパーにノミネートされた論文等が発表されました。また、メインカンファレンス一日目には MIT のプロフェッサー Alex Pentland 氏による基調講演「**Building A Nervous System for Society**」も行われました。この基調講演はタイトルの通り、アクティブコントロールネットワークのため健康や運送手段やエネルギーなどの社会システムを再構築するためにはどうしたらいいのか、について「普及力のあるセンシング」「人の行動のモデリング」「活発な基盤 (インフラ)」という三つの観点から論じられました。人の振る舞いをデモするのは非常に大変ですが、現在ならば例えばスマートフォンなどのセンサーからそれぞれの状況を把握してやる方法などが考えられます。人が何かを決定することに対しては、多くのネットワークが影響しており、単純ではありません。それをいかにして構築するかは、確かに難しい問題であると思うと同時に、**Semantic Web** 技術によって解決できる問題なのかもしれないとも思いました。また、個人情報は今やインターネット上の石油である、という言葉が印象的でもありました。

その他、メインカンファレンスでの発表について簡単に述べたいと思います。

Mike Dean がセッションチェアを務めた **In-Use Ontologies and Linked Data** において、興味深い四つの報告がありました。そのうち、二つについて詳細を述べます。Christian Seitz and Rene Schonfelder による **Rule-based OWL Reasoning for specific Embedded Devices**, そして Peter Haglich, Robert Grimshaw, Steven Wilder, Marian Nodine and Bryan Lyles による **Cyber Scientific Test Language** の後に発表があった, Xing Niu, Xinruo Sun, Haofen Wang, Shu Rong, Guilin Qi and Yong Yu

による Zhishi.me - Weaving Chinese Linking Open Data では、現在 Linked Open Data において中国語でかかわれている知識は乏しいため、中国の Linked Data を、中国語で作ることによる問題を解決しながら作成したことについて述べられた。確かに漢字は Semantic Web には少々不向きな部分があるが、それをクリアしたうえで、Lookup サービスや SPARQL エンドポイントも完備した Linked Data が作成されていました。Linked Data にするためのオリジナルデータソースは Baidu, Hudong, C-Wikipedia からとってきたそうです。また、最後の発表である, Miriam Fernandez, Mathieu d'Aquin and Enrico Motta による Linking Data Across Universities: an integrated video lectures dataset では、機関を横切って教材を統合し共有する必要があることから、Linked Data 技術を利用した大学間をつなぐ教育関係の情報のリンクを作成すると共に、ビデオのデータセットも作成したそうです。実際に使われている例を見せつつ説明されました。質疑応答では、他にオープン大学における似た取り組みがあることも言及されました。

また、Aldo Gangemi がセッションチェアを務めた RDF Data Analysis でも、Andreas Thor, Philip Anderson, Louiqa Raschid, Saket Navlakha, Barna Saha, Samir Khuller and Xiao-Ning Zhang による Link Prediction for Annotation Graphs using Graph Summarization や Harris Lin, Neeraj Koul and Vasant Honavar による Learning Relational Bayesian Classifiers from RDF Data, Yang Yu and Jeff Heflin による Extending Functional Dependency to Detect Abnormal Data in RDF Graphs, Evgeny Kharlamov and Dmitriy Zheleznyakov による Capturing Instance Level Ontology Evolution for DL-Lite といった興味深い発表が多かったです。

その他、三日間に及ぶメインカンファレンス期間には、たくさんのセッションで多くの興味深い研究発表を聴くことができました。

4. おわりに

はじめにも述べましたように、今回の経験を通して私は大きく分けて二つの収穫がありました。一つは、トップカンファレンスに参加している同じ分野の研究者との交流を通して、国際的に活躍できる研究者を目指したいという意識の向上です。もう一つは、該当分野の研究の大きな流れを、一步引いた場所から見ることにより、今後の研究方針をより良いものへとする知識の獲得です。私はこれまで、本学会でも多く発表されている Linked Data という技術を使った応用研究をし、国内での発表を行ってきました。今回の学会では、私がやっているような応用研究として、Linked Data を利用したアプリケーションの紹介などが複数あり、今後の研究の進め方を考える上で非常に参考になりました。具体的には、博士論文執筆において二章の関連研究にて本学会で発表された論文を参照させていただく予定である他に、今後の研究に技術的な部分でも参考にさせていただく予定です。

また、本学会で発表された研究成果は、国家ぐるみの大きなプロジェクトの一部、あるいは集大成であるものが非常に多かったように思いました。そのような発表者の中には、研究プロジェクトのリーダーとして関わっているたくさんの女性研究者がいました。これまでの私の国際学会での発表は二回と決して多くはありませんが、今回の経験を通して彼女らのような国際的に活躍できる女性研究者になりたいという意識が強くなりました。

今後は、今回得た知識を活かして研究を進めると共に、博士論文を執筆し、国際的に活躍できる女性研究者を目指して邁進していきたいと思えます。

おおにし かなこ / お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 理学専攻

指導教員によるコメント

International Semantic Web Conference はインターネットをより高度に進化させるという主旨をもったトップの国際会議であり、今回、大西可奈子氏が「学生海外派遣」プログラムを利用させていただき、参加させていただいたことには大変大きな意味がありました。彼女の研究は、現在、Semantic Web 技術の枠組みにおいて中心的な技術となっている Linked Open Data を利用した新しい情報処理技術を提案するという事です。この研究を進めるにおいては世界のトップの動向を絶えず把握することが必要であり、それは情報を Web で収集することだけではなく、その分野の多くの研究者が一同に会する国際会議などに参加し、短期間に集中して著名な研究者らと情報交換をすることが大変重要となります。現在、彼女は博士後期課程 3 年生であり、博士論文の作成をおこなっています。今回の会議参加において、現在の最先端の研究に触れることができ、そのことは彼女の博士論文作成にも大きな意味をもったものになったと思います。また、彼女はこれから女性研究者として研究を続けていくことになっておりますが、世界で女性研究者がどのように一流の研究を行っているかを見る機会もあったようで、彼女の研究者としての意識の向上に大変役立つことができたと感じております。こ

のような機会を大西可奈子氏に与えてくださったことに深く感謝の意を表します。
(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (自然・応用科学系)・小林一郎)

学生海外調査研究	
「誘い」談話における構造分析 —「交渉話段」における中日言語行動の比較を中心に—	
黄 明淑	比較社会文化学専攻
期間	2011年11月2日～2011年11月8日
場所	フランス・パリ
施設	パリ大学、パリ国立図書館リシュリュー館、INALGO フランス国立東洋言語文化研究学院等

内容報告

1. 海外調査研究の必要性

本報告者は博士課程において、「誘い」表現における中日対照研究をテーマとして研究を進めている。博士論文では、中国語母語話者と日本語母語話者の「誘い」談話における言語行動の比較対照研究を通して「誘い」表現における中日の全体の構造分析を目指している。

今回の発表では、今までの先行研究に踏まえ、以下のような研究課題を設けた。

- (1)中国語母語話者と日本語母語話者の交渉話段の使用数にどのような差が見られるか。
- (2)中国語母語話者と日本語母語話者の交渉話段の使用にはどのような特徴が見られるか。

今までの研究をより深めるためには、客観的な視点から意見を聞く必要があると考えた。そこで、今回の「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムを通して、2011年11月2日か8日にかけてフランスで行われた「東アジア日本語教育・日本文化研究 2011年度 国際学術大会」に参加し、研究成果を発表した。日本、韓国、中国をはじめとする東アジアとヨーロッパ国々の日本語教育専門分野の海外及び現地研究者と教師及び発表者から様々な視点からのコメントと貴重なご意見をいただき、自分の研究を見直す良い機会となった。以下では、報告者が参加した国際学術大会で得られた成果について報告する。

2. 海外調査研究の目的及び位置付け

2.1 本研究の位置付け

グローバル化時代の発展に伴い、中国人と日本人の交流やコミュニケーションがますます盛んになっていくと考えられる。コミュニケーションが活発になる一方で、それぞれの文化に起因するコミュニケーションの誤解や摩擦も多く見られ、決して見過ごせないものである。そして、その引き起こされた誤解や摩擦は、単なる言葉や文法的な違いだけではなく、それぞれの文化や習慣、考え方、価値観を反映しているコミュニケーション・ルールの違いから生じる可能性があると考えられる。

山本（1982）が指摘したように、言語は文化の凝縮であり、文化と密接に関連している。また、久保田（2008）は、文化に関する情報不足によって、自文化の見方だけを基に他文化を解釈してしまうことがよくあると述べ、自文化と他文化の類似性と差異、両方を教えることの重要性を強調している。さらに、「文化の差異を分析することによって、相互の誤解や衝突が避けられる一方、類似性に焦点を当てることによって目標言語話者に対する母語話者の肯定的な態度を養うことができる」と指摘している。

本研究では、「交渉話段」に着目し、量的、質的な分析方法を用いて、CNSとJNSの誘い談話における共通点と相違点を比較、考察する。

2.2 先行研究及び本研究の目的

2.2.1 表現形式や発話機能の観点から見た研究

「誘い」¹に関する先行研究で、代表として挙げられるのがザトラウスキー（1993）である。ザトラウスキー（1993）は、電話の自然会話を用いて、日本語の勧誘のストラテジー構造分析を行っている。また発話機能によって発話を分類し、勧誘²の会話の構造について詳細な分析が成されている。黄（2011）は、「共同行為要求」（相手を誘うための共同行為を求める発話で誘い表現を指す。「～ませんか」「～ましょう」などが含まれる。）に着目して、日本語母語話者は「～ませんか。」「～どう？」など、「相手の意向を尋ねる」表現形式を多用する傾向があるのに対して、中国語母語話者は「～まし

よう。」など、「自分の意向を述べる」表現形式を多用する傾向があることが分かった。

2.2.2 誘う側と誘われる側のインターアクションの観点から見た研究

「誘い」に関する言語行動の研究の中、誘う側と誘われる側のやりとりのインターアクションに着目し、分析したものとしては、倉本・大浜（2008）が挙げられる。倉本・大浜（2008）では、日本人学生を対象として誘う側と誘われる側のやりとりを分析している。その結果、誘う側は「行こうよ」などといった誘いそのもの、及び「これから二次回あるんですけど」などの前置き表現や、情報提供が見られ、誘われる側には断りや受諾、「途中で帰ってもよければ」といった条件提示が見られたとしている。また、断りの後には多くの場合再誘いが見られたとしている。

2.2.3 意味公式の観点から見た研究

鄭（2009）は、「意味公式」³の分析方法を用いて、談話完成テスト（DCT : Discourse Completion Test）による日韓の勧誘ストラテジーを対照分析している。その結果、日本語母語話者は韓国語母語話者に比べ、「気配り発話」が多いことや「共同行為要求」の表現に相手の「意向」を尋ねる表現が多いことが明らかになった。それに対して、韓国語母語話者は日本語母語話者に比べ、「前置き」発話の中に「挨拶」や「呼びかけ」、「相手の近況を尋ねる発話」が多いことや「誘導発話」の中に相手のことをほめる発話や相手の不可欠性に言及する発話が多いこと、「共同行為要求」の表現に自分の「希望」を示す表現が多いことなど、意味公式に関して詳細が分析が行われている。

2.2.4 「話段」の分析観点から見た研究

鄭（2006）は、「話段」という分析枠組みを用いて、日本人母語話者と韓国人母語話者の誘い談話における対照研究を通して、「誘いの展開パターン」について分析している。その結果、日本語は「前置き話段⇒誘い話段⇒応答話段⇒交渉話段⇒確認話段」であり、韓国語は「誘い話段⇒応答話段⇒交渉話段⇒再誘い話段」であると結論づけた。

これまでの研究を見ると、「誘い」における構造や対照立場からの言語行動が明らかになっている。また、質的な記述についての研究はいくつかあるが、量的に分析したものは限られている。そこで、本研究では、「交渉話段」に着目し、量的、質的な分析方法を用いて、CNSとJNSの誘い談話における共通点と相違点を比較、考察する。その結果から得た知見から中国と日本の「誘い」言語行為に帰属されたコミュニケーション・スタイルの差異を通して、中日の異文化間コミュニケーションにおいて、どのような問題が起こり得、それらをお互いにどのように対処することが必要であるかを明らかにしていくことに貢献したいと考える。

2.3 本調査研究が博士論文における位置付け

筆者の博士論文では、中国語母語話者と日本語母語話者の「誘い」談話における言語行動の比較対照研究を通して、「誘い」表現における中日の全体の構造分析を明らかにすることと、中国の日本の異文化コミュニケーション教育へ提言できることを研究目的に定め、以下の5つの研究を行う予定である。

まず、研究1では、「誘い」談話における「共同行為要求」に着目して、中国語母語話者と日本語母語話者とコミュニケーションにあわれた共通点及び相違点を検討した。「共同行為要求」とは、「誘い過程において、誘う側が誘われる側に誘い行為に共に参加するよう働きかける発話」であり、「誘い」談話の中心部分である。それを分析することにより、中日の「誘い」談話の言語形式の実態を探ることができる。

次に、研究2では「誘い」談話における「誘導発話」に着目してその使用実態及び特徴などを対象に分析する。

そして、研究3では「誘い」談話における「交渉話段」に着目してその使用頻度及び特徴などを分析する。

研究4では「意味公式」の観点から、「誘い」言語行動の中国語談話と日本語談話における使用頻度、使用順序からその全体の特徴を探る。

最後に、研究1から4までの結果を博士論文にまとめ、中国語母語話者と日本語母語話者の「誘い」談話における共通点及び相違点、さらにその特徴について注目したい。また、その結果から得た知見から異文化コミュニケーションにおける示唆を提案する。今回の学術大会での研究は研究3と、研究4、研究5に位置付け、博士論文の中核になる。

3. 研究方法

3.1 会話収集方法

Brown and Levinson(1987)は、話し手の言葉遣いに影響する要因として力、距離、負担の度合いを挙げている。本研究ではデータ収集の際、中国側と日本側ともに3つの要因をすべて条件統制した上でデータ収集を行う。

表 1 会話データ収集における条件統制

	CNS	JNS
言語	中国語	日本語
力	大学の同級生（18歳—22歳）	
距離	同等（友人関係）	
負担の度合い	負担の度合いが異なる 2 場面を誘い内容と設定する。	

会話データ収集において、中国人ペアの録音調査は中国で、日本人ペアの録音調査は日本で実施した。録音は協力者が気楽に話せる場所（例えば、教室、学生専用の控え室など）で行った。調査に当たって協力者にはまず、同意書とフェースシートに記入してもらい、その後、誘う側、誘われる側それぞれにロールカードをお渡しし、できるだけ自然な会話をするよう求めた。会話の時間は特に設定せず、会話が終了した時点でできるだけ自然な形で終わらせるように口頭で指示を行った。ロールカードは以下に示す通りである。

【場面 1】 食堂への誘い

A：授業が終わりました。あなたは友達の B さんを誘って食堂と一緒にご飯を食べにいきたいと考えています。これから B さんを食事に誘ってください。
B：あなたは友達の A さんからこれから一緒に食事にいこうと誘われました。A さんと会話をしてください。

【場面 2】 アルバイトで忙しい友達をさくらんぼ狩りに誘う

A：クラスメート何人かと来週さくらんぼ狩りにいこうと話をしています。クラスメートの B さんもぜひ誘いたいです。でも、B さんは最近家庭教師のアルバイトでとても忙しいようです。これから B さんを誘ってください。
B：あなたは友達の A さんからさくらんぼ狩りにいこうと誘われました。でも、最近家庭教師のアルバイトでとても忙しいです。これから A さんと会話をしてください。

3.2 協力者

本調査は 2011 年 3 月から 6 月にかけて日本及び中国の大学でデータを収集した。調査対象者は中国人ペア、日本人ペアそれぞれ 25 組、合計 50 組である。協力者は全員大学生であり、同じ授業に出たり、同じゼミ、サークルに所属したりしている友人⁴同士である。友人同士の設定にしたのは、年齢の差が分析結果に及ぼす影響を避けるためと、日ごろ同じ大学の同じ学年あるいは同じサークルの友達なら馴染みがあるため、一層自然な会話データが取れると思ったからである。

4. 研究方法

ザトラウスキー（1993）は、「話段」の言語単位を分析単位と用いている。「話段」とは、一般に、談話の内部の発話の集合体（もしくは一発話）が内容上のまとまりをもったもので、それぞれの参加者の「談話」の目的によって相対的に他と区分される部分であると定義づけられている。会話の参加者が相互に協力して作り上げて行くものであるため、その大きさは一定していない。また、「話段」とは、2 つの発話からなる「応答ペア」を発話の発話集合に当てはめようとしたもので、それぞれの発話集合を「勧誘の話段」、「勧誘応答の話段」とすることで、発話がどのように関係付けられているかをとらえることができると述べている。

鄭（2006）はザトラウスキーの誘い話段、応答話段に、前置き話段、交渉話段、再誘い話段、確認話段を加えたが、本研究ではザトラウスキー（1993）、鄭（2006）の分析枠組みを援用し、一部修正を行い、以下のように定義する。「交渉話段」とは、「誘われる側の断りや否定的反応に対して、相手が誘いの話にのってくるように相手にとって魅力的な情報を与えたり、興味を引き出すために有力な情報を伝えたるすることを表す発話文のまとまり」である。

5. まとめ

本研究では、中日の「交渉話段」に見られる特徴を分析することを通して、以下のような結果が示唆された。まず使用頻度から見ると、負担度の度合いによって話段の構成要素が異なってくるのが分かった。**CNS**は負担度の度合いに関係なく、「交渉話段」を用いることが分かった。一方、**JNS**の場合、負担度が低い場面1では交渉話段が見られず、場面2で交渉話段が見られたことが分かった。次に、それぞれの場面で用いられた特徴から以下のようなことが示唆された。**CNS**は多くの場合、何回かのやりとりを通して交渉話段を作り上げていくのに対して、**JNS**はほとんど1回のやりとりによって「誘い」談話における交渉話段を作り上げていくことが明らかになった。

中国語の場合は「交渉話段」が多く見られたことから、誘う側は誘いを成功させたいことを目的に積極的に働きかけることが伺える。一方、日本語の場合は相手との意見の衝突を避け、相手の気持ちや意見を尊重し、相手優先で進む誘い方をしていることが伺える。

本報告書では、今回の海外調査研究の研究背景、今後の研究における位置付け、また具体的にどのような行なったかについて述べた。およそ一週間にわたって、自分の研究を東アジア及びヨーロッパの日本語教育界に発信し、得られた知見から今後の博士論文との結び付きについて考える機会が得られた。これからは、今回の調査研究で得られた貴重なリソースを処理、分析して、得られた知見を中国、日本における日本語教育現場にどのように活かすかを考えていきたい。

6. 本海外調査研究における成果

このたび、平成23年度「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムの支援をいただき、フランス・パリに滞在できたことに、心より感謝を申し上げる。

まず、本報告者の発表においては、本報告者が研究を進めていく課程で疑問に思っていた部分や本報告者とは相違なる見方であった部分について、質疑応答やディスカッションを通じて意見交換を行い、貴重なご意見をいただいた。それだけではなく、発表を通して自分の研究を見直すいい機会となり、研究進捗状況の確認ができ、研究結果を踏まえた博士論文執筆計画がなされることが期待される。また、今回の国際学術大会には、日本や韓国、中国、ヨーロッパ等海外の一流の専門家や教授、学者、教授、国内外の研究者が共に参加し、最近の日本語教育の研究の動きや現状、研究方法、異なる視点及び分析方法について議論を行った。

今回の学会参加及び発表を通して、日本語教育の中の教材開発や教授法の検討など、東アジア及びヨーロッパにおける日本語教育の方向及び現状を把握すると同時に、日本語教育における学習者の分析、及び学習者のコミュニケーション能力育成などの問題について、その理論と実践方法を検討し、日本語教育に関わる学習者・支援者・教師・研究者の間で活発な意見交換を行うことができた。それによって、アジア諸国及びヨーロッパの日本語教育研究の新たな可能性が開かれ、新たなディシプリンの確立が期待される。

7. 今後の課題

今回の「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムで得られた成果は、現在まで収集した資料や今回の国際学術大会でいただいたご意見を参考に研究を見直し、お茶の水女子大学の2012年日本語言語文化研究学術誌や『人間文化創成科学論叢』等に投稿する予定である。

注

1. 論文によっては、「勧誘」という言葉を使用しているが、先行研究によると「勧誘」は「誘い」と「勧め」(姫野 1998)の両方の意味を持つと考えられるため、本稿では「誘い」という表現を用いる。
2. 本稿では「誘い」という表現を用いるが、他者の文献を引用するに当たっては文献に記入した通りの用語を用いる。
3. 「話段」とは、一般に、談話の内部の発話の集合体(もしくは一発話)が内容上のまとまりをもったもので、それぞれの参加者の「談話」の目的によって相対的に他と区分される部分であると定義づけられている。
4. 「誘い」はある程度関係が築かれていなければ発生しにくいものと考えられるため、両者の関係を友人関係と設定した。

参考文献

- アクドーアン・プナル/大浜るい子(2008)「日本人学生とトルコ人学生の依頼行動の分析—相手配慮の視点から—」『世界の日本語教育』18号, 57-72.
- 久保田竜子(2008)「ことばと文化の標準化についての一考」『文化、ことば、教育』第1章 明石書店 1,14-30.

- 倉本美喜・大浜るい子 (2008) 「もう一つの勧誘行動—日本人学生による 2 次会への勧誘行動について」『広島大学日本語教育研究』(18), 57-63.
- 黄明淑 (2011) 「誘い表現における中日対照研究—「共同行為要求」に着目して—」『日本語／日本語教育』第 2 号, ココ出版, 137-153.
- ザトラウスキー、ポリー (1993) 『日本語の談話の構造—勧誘のストラテジーの考察くろしお出版
- 徐孟鈴 (2006) 「依頼会話の【終結部】の考察-日本人・台湾人・台湾人上級学習者の 接触場面のロールプレイデータを比較して」 『言葉と文化』7 名古屋大学大学院国際 言語文化研究科日本語文化専攻, 67-84.
- 鄭在恩 (2009) 「日韓の勧誘ストラテジーについて」『言葉と文化』名古屋大学国際言語文化研究科 10,113-132.
- 鄭榮美 (2006) 「自然会話における「誘いの展開パターン」について」日本語教育学会春季大会予稿集 163~168
- 鈴木睦 (2003) 「コミュニケーションからみた勧誘のしくみ—日本語教育の視点から」『社会言語科学』6(1),112-121.
- 筒井佐代 (2002) 「会話の構造分析と会話教育」『日本語・日本文化研究』12, 9-21. 大阪外国語大学日本語講座
- 長谷川 哲子 (2002) 「勧誘の談話における日本語学習者の発話の特徴」立命館言語文化研究 14(3),215-224.
- 姫野伴子 (1998) 「勧誘表現の位置-「しよう」「しようか」「しないか」」日本語教育 96,132-142.
- ファン, S.K (1997) 「英語母語話者と中国語母語話者の点火ストラテジーについて—日本語学習者としての「誘い」—」『日本語・日本文化研究』5, 35-49. 京都外国語大学留学生別科
- 藤森弘子 (1996) 「関係修復の観点から見た「断り」の意味内容—日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較—」『大阪大学言語文化学』5, 5-17.
- 森山新(2010) 「Holistic Education Of Japanese Language in the Global Era」『お茶の水女子大学 大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」平成 21 年度活動報告書 海外教育派遣事業編』, 126-130, お茶の水女子大学
- 山田七平 (1982) 「日本人と外国語」『国際交流と言語文化』企業内語学教育研究編, 語研.
- 吉田好美 (2010) 「勧誘場面の断りに見られる言い訳と不可表現及び勧誘者の言語行動について—日本人女子学生とインドネシア人女子学生の比較—」『言語文化と日本語教育』第 40 号, 11-19.
- Brown&Levinson(1987)politeness:Some universals in Languageusage.Cambridge University Press.
- Olshtain,E,&Cohen,A.(1983).Apology:Aspeech-actsset.InN.Wolfson&E.Judd (Eds.),Sociolinguistics and Language Acquisition 19-35. Rowley , Massachusetts: Newbury House

こう めいしゅく／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

黄明淑さんの研究は、中国人と日本人の「誘い」談話の対照言語学的研究であり、研究の成果を中国における日本語教育に活かすことを目的といたしております。

黄明淑さんは、平成 23 年度「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムに係わる支援により、2011 年 11 月 2 日から 8 日にかけてフランス・パリで開催された「東アジア日本語教育・日本文化研究 2011 年度 国際学術大会」に参加し、「誘い」談話における構造分析—「交渉話段」における中日言語行動の比較を中心に—というテーマで研究発表を行いました。発表の内容は、「交渉話段」における分析を通して、中国と日本の「誘い」談話の構造が明らかになる、というものです。

発表を通して、研究課題の設定の仕方、データの分析方法などに関して具体的な示唆を得ることができました。さらに、今回国際学術大会に参加し、アジアのみならずヨーロッパで活躍する研究者の方々と交流することができ、問題意識が明確になるとともに研究に関する多くの具体的な示唆を得ることができました。

現在は、今回の発表を投稿論文としてまとめる作業を行っております。また、今回の助成による成果は、博士論文執筆の中核をなすものとして位置付けていく予定で、今後の論文の進展が期待されるところです。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・佐々木泰子)

学生海外調査研究	
フィジーにおける理学療法士支援の持続性に関する研究	
小檜山 希	ジェンダー学際研究専攻
期間	2011年8月22日～2011年8月29日
場所	フィジー国
施設	CWM病院、タマブア病院、ナウソリヘルスセンター、ワイニンボカシ病院、ラウトカ病院、シガトカ病院、フィジー国立大学

内容報告

1. 緒言

理学療法士は、リハビリテーション専門職の一つで、基本的動作能力の改善のために体操や運動療法、物理療法を用いて医師の指示のもとに治療を行う専門職である。国際協力機構（以下 JICA）では、青年海外協力隊（以下 JOCV）派遣を行っており、フィジーへの理学療法士派遣を 1990 年から断続的に行っている。筆者も平成 13 年度 3 次隊として 2002 年 4 月から約 2 年間フィジーで活動を行った。その後も継続されている理学療法士派遣について、JICA 側は評価を行っていると考えられるが、それが一般に公表されることはない。

フィジーにおける理学療法士支援は、持続的な効果を持つ支援であるのか明らかにするために、今回はフィジーのメインアイランドであるビチレブ島にて活動先の調査を行うこととした。

本調査は直接博士論文に関係するものではないが、医療サービスの提供体制について、日本国と比較することは、日本の医療・介護分野の労働研究を行う上で、多くの示唆を与えるものである。今後本調査の結果をまとめ、『PT ジャーナル』に投稿予定である。理学療法士支援の持続性についての調査は見当たらず、この調査を論文にまとめることは、国際協力の効果を評価した一例となると考える。

2. フィジー

2.1 フィジーの概要

フィジーは南太平洋に位置し、300 以上の島々からなる。陸地の総面積は 18,333 km²の四国ほどの面積である。一番大きな島は東部に首都スバ、西部にナンディ国際空港のあるビチレブ島、2 番目は北部のバヌアレブ島であり、この 2 島で面積の 87 パーセントを占める。人口は約 84 万人、そのうちおよそ 50 パーセントがフィジー人、40 パーセントをインド系フィジー人が占めている。

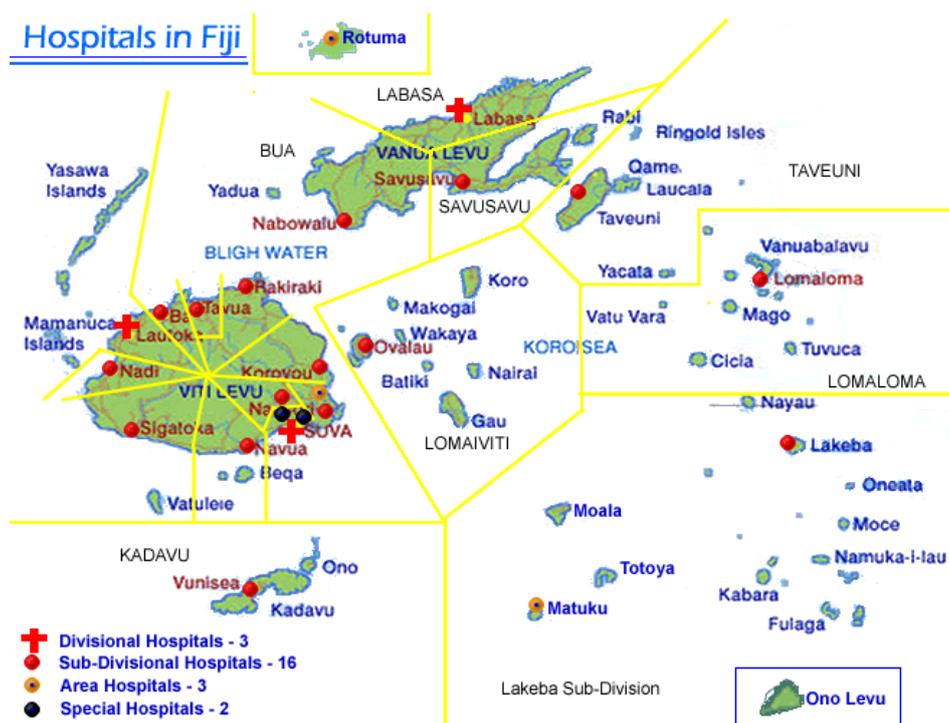
英国の植民地であったが 1970 年独立した。2005 年 12 月、ガラセ首相のフィジー人優遇対策、2000 年クーデター関係者の恩赦などに反対するフィジー人バイニ・マラマ司令官によるクーデターが起こり、現在英連邦からは除外されている。

2.2 フィジーの医療体制

フィジーの医療体制は中央・東部、西部、北部、3 つの Division（以下地域）に分けて地域ごとに保健医療サービスのネットワークを構築している。Division Medical Office は地域病院があるスバ、ラウトカ、ランバサにオフィスを構えている。Division は 19 の Medical Subdivision（以下副地域）に分けられ、これら副地域は多くの医療区域から構成されている。

各地域には高度医療を担う地域病院である Colonial War Memorial 病院（以下 CWM 病院）、ラウトカ病院、ランバサ病院がおかれている。その下の副地域には副地域病院、医療区域にはヘルスセンターが設置されている。また遠隔地の島には地区病院がある。その他特殊病院として、結核治療とリハビリテーションを行うタマブア病院、精神科のセント・ジャイル病院、ハンセン病対象の PJ Twomey 病院がある。地域病院は保健省病院局の、その他の施設は公衆衛生局の管轄下にあり、保健省が人事・財政のコントロールを行っている。

公立病院の医療費は無料で、私立のクリニックや病院は診察・検査すべて有料である。



出典：Ministry of Health, Fiji ホームページ

図 1. 国立病院の位置

3. JOCV 活動と理学療法士

3.1 JOCV

JICA は、技術協力、有償資金協力、無償資金協力、国際緊急援助、ボランティア派遣を行っている。JOCV 事業はボランティア派遣のひとつで、「開発途上地域の住民を対象として当該開発途上地域の経済及び社会の発展又は復興に協力することを目的とする国民等の協力活動を促進し、及び助長する」² 事業である。ボランティアの対象は 20 から 39 歳の日本国籍を持つ者である。

JICA では平成 16 年から事業評価を実施し、ボランティア事業では「開発途上国・地域の経済および社会の発展または復興への寄与」「開発途上国・地域と我が国との間の友好親善及び相互理解の深化」、「ボランティア経験の社会への還元」という 3 つの視点から事業を評価している。

3.2 理学療法

日本では理学療法士は「理学療法士及び作業療法士法」(法律第百三十七号)に定められた資格である。理学療法とは、「身体に障害のある者に対し、主としてその基本的動作能力の回復を図るため、治療体操その他の運動を行なわせ、及び電気刺激、マツサージ、温熱その他の物理的手段を加えることをいう」と定められている。指定された学校、養成施設において 3 年ないし 4 年間必要な知識及び技能を修得したもの、または外国の理学療法に関する学校若しくは養成施設を卒業し、又は外国で理学療法士の免許に相当する免許を受けた者で、厚生労働大臣が認定したものが、理学療法士国家試験に合格し、厚生労働大臣の免許を受ける。

フィジーでは、Fiji School of Medicine で 3 年間の教育を経て certificate と理学療法士資格が取得できた。しかし近年国立学校の統合が進み、Fiji National University (FNU) の一学科となり diploma コースが開講されている。

3.3 フィジーにおける JOCV 理学療法士の派遣

フィジーでは大きく 3 期にわけて JOCV 理学療法士の派遣が行われている (表 1)。

第 1 期理学療法士派遣は、1990 年から 1995 年に地域病院とリハビリテーション病院に行われた。第 2 期は 2001 年から 2004 年に副地域の病院に派遣された。その後 2006 年から現在に至るまで第 3 期派遣が再び地域病院とリハビリテーション病院で継続されている。

第 1 期、第 2 期の要請理由は、人材の海外流出であった。しかし筆者が第 2 期に活動を行うと、養成校を卒業後就職するポストが国立病院にないために、研修生として無償で働く若い理学療法士がいることが判明した。このことから、第 2 期は人材の海外流出というよりは、必要性にも関わらずポストが増やせない保健省の問題が養成の背景にあることが判明した。任期中 4 名の隊員が活動しており、

この4人で検討した結果、すべての派遣先（副地域の病院）で後任を要請しない方針となった。保健省や Superintendent Physiotherapist（国立病院理学療法士責任者、以下 SP）と話し合いの機会を持ち、地域病院への新規要請を行う方向となった。地域病院にはフィジーの理学療法士が勤務しており、一緒に働くことで JOCV 側がフィジーの理学療法について知ることができ、また勉強会の開催など技術移転の機会が増える効果を期待した。フィジー側の理由としては、人員不足を補うためであった。現在第3期理学療法士派遣は、リハビリテーション病院（タマブア病院）での最終派遣を持っている状況である。

表1 公表されている隊員活動報告書にて確認できる JOCV 派遣（1990～2011）

期	期間	配属先
第1期	1990/07-1992/09	保健社会福祉省 CWM 病院
	1990/12-1992/12	保健社会福祉省タマブア病院
	1992/04-1994/04	保健社会福祉省ラウトカ病院
	1992/07/1994/07	保健社会福祉省 CWM 病院
	1992/12-1994/12	保健社会福祉省ランバサ病院
	1993/04-1995/04	保健社会福祉省ラウトカ病院
第2期	2001/04-2003/04	保健省サブサブ病院
	2001/12-2003/12	保健省タベウニ病院
	2002/04-2004/05	保健省ワイニンボカシ病院
	2002/04-2002/09	保健省シンガトカ病院
	2002/07-2004/07	保健省シンガトカ病院
第3期	2005/07-2007/07	保健省ラウトカ病院
	2006/06-2008/06	保健省 CWM 病院
	2007/01-2009/03	保健省ランバサ病院
	2007/09-2009/09	保健省ラウトカ病院
	2009/03-2011/03	保健省 CWM 病院
	2009/03-2011/03	保健省ランバサ病院
	2009/06-2011/06	保健省タマブア病院

4. 調査

4.1 調査方法

訪問施設は、地域病院では CWM 病院、ラウトカ病院、副地域の病院ではシガトカ病院、ワイニンボカシ病院¹、専門病院ではタマブア病院、教育施設は FNU である。調査項目は以下の4点とした。

4.1.1 事前調査

フィジーで活動した JOCV の隊員活動報告書による情報収集を行った。また 2008 年から 2 年間実施された「フィジー国理学療法士臨床技術研修」(以下沖縄研修)終了時評価報告書による情報収集と、担当者へのインタビューを行った。

4.1.2 JOCV 活動後の現状調査

JOCV 活動後の配属先の人員配置、理学療法室の状況を調査した³。活動前の状況は、隊員活動報告書で確認した。

4.1.3 現地理学療法士インタビュー調査

CWM 病院にて SP にフィジーの理学療法士の現状について、および JICA、JOCV 活動をどのように捉えているかインタビューを行った。

4.1.4 支援物資調査

理学療法に関係する日本からの支援物資の現状を調査した。支援物資については事前に隊員活動報告書で確認した。

4.1.5 新規活動調査

FNU で活動しているシニア海外ボランティアに活動ならびに理学療法教育に関してインタビューを行った。

4.2 調査結果

4.2.1 事前調査結果

理学療法士派遣の実績は、表1のとおりである。

沖縄研修は、沖縄県理学療法士会から当時 JOCV として活動していた沖縄出身の理学療法士に打診があり、新しい草の根技術協力事業として開始された事業である。この事業によって、2008 年から 2 年間で 6 名の理学療法士がフィジーから研修に訪れている。この 6 人は調査時点でも離職せず勤務を継続していた。

このフォローアップ事業として 2010 年 6 月から約 2 か月間 2 名の沖縄県の理学療法士が短期派遣 JOCV としてフィジーを訪問し、研修成果の確認、評価方法の指導にフォーカスし、活動を行った。活動した理学療法士によると、短期間で活動目的を明確に巡回することは、技術移転の方法としては長期 JOCV より実施しやすい、ということだった。

4.2.2 JOCV 活動後の現状調査結果

CWM 病院、ラウトカ病院は地域病院であり、複数の現地理学療法士が勤務している。JOCV 活動後に人員配置に変化はなかった。

シガトカ病院は JOCV 派遣前と同様の体制にもどり、現地理学療法士 1 名が勤務していた。

ワイニンボカシ病院は JOCV 派遣前と同様の体制にもどり、同じ副地域内にあるナウソリヘルスセンター所属の現地理学療法士が兼務していた。JOCV 活動時の理学療法室は倉庫となっており、今後検査室に改修予定であった (図 2)。

タマブア病院は、現地理学療法士が 1 人勤務しており、JOCV 活動後に人員配置に変化はなかった。JOCV がデスクワークに使用していた部屋は、病院のコピー室となっていた。

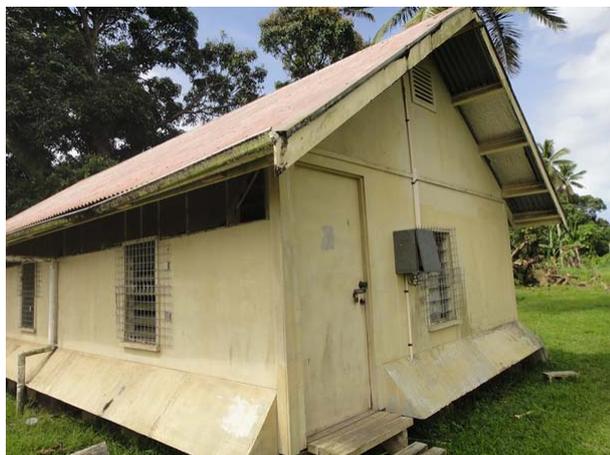


図 2. ワイニンボカシ病院の前理学療法室

4.2.3 現地理学療法士インタビュー調査結果

CWM 病院に勤務している SP にインタビューを行った。その一部を示すこととする。

まず、国立病院の理学療法士ポストは、現状を訴えた効果か 2005 年当時 29 であったが、2006 年に 35 に増えた。しかし 2007 年には公務員の定年が 60 歳から 55 歳と変わり、給与カットも行われた。その後、予算不足から人員不足があってもポストを増やさない状況が続いている。施設間の配置人数は保健省が決めており、人員配置は SP が中心となり決めている。現在 JOCV が派遣されていたサブサブ病院に現地理学療法士が勤務しているが、ここにポストはなく、ランバサ病院からの出向の形で行われている。JOCV がコミュニティで活動していたこともあり、現在積極的に訪問している。

保健省からは、JOCV を現地理学療法士と同じルールで扱うよう言われており、「スタッフの一人」として扱っている。JOCV は私たちが助けてくれており、政府の外で (直接) 助けてくれるため、私たちは仕事がしやすい。

日本での研修に参加すると、機器や仕事ぶりなどの全体像を直接みることができ、フィジー人の目を開かせてくれる。これはフィジーで行うのは難しい。現在沖縄の研修に行った理学療法士が中心となり、理学療法評価表が導入されている。CWM 病院では毎週水曜日朝 1 時間、その評価表を用いた勉強会が開かれるようになった。この勉強会開催を提案したのは、(15 年ほど前) 日本に研修に行った理学療法士と沖縄研修に参加した理学療法士である。

2010 年 6 月に 2 名の理学療法士が短期派遣で来訪し、1 名は整形外科疾患について指導を行い、もう 1 名は評価表の指導を行った。この形であると、「スタッフの一人」ではないため、フィジー人への指導はしやすい。

JICA はとても助けになり、兄のような存在で、専門的視点から見てくれている。
韓国からの理学療法士ボランティア派遣は一名行われたのみで継続していない。

4.2.4 支援物資調査結果

支援物資の多くは、日本大使館が実施している草の根無償・人間の安全保障資金協力（以、草の根無償）により提供されている。ワイニンボカシ病院の車いすのみ、JICA が JOCV 活動に対して実施している隊員支援経費から提供された。

ラウトカ病院では、プラットフォームは使用しているものの、エルゴメータは修理中、牽引器は倉庫に保管している状況であった（図 3、4）。牽引器はより新しい韓国からの支援物資を使用していた。倉庫にあった他の支援物資は、オーストラリアから提供されたものであった。現地理学療法士によると、支援物資を使いたい、訓練室が十分に確保されず、廊下で行っている状況なので、倉庫に保管しているということであった。

ワイニンボカシ病院に提供した車いす 6 台は紛失していた。提供当時看護師長が管理することになっていたが、その看護師長も移動となっていた。現在はオーストラリアからの支援物資の車いすが倉庫に保管されていた。

タマブア病院では、支援物資の第 1 便が届き倉庫に保管していた。第 2 便と物干し場のシェードが完成したらセレモニーを行い、使用を開始する予定とのことであった。しかしシェード用の予算を日本大使館から保健省に渡しているにもかかわらず、予算が執行されていないため、使用開始がいつになるかわからない状況であった。



図 3. 手前：プラットフォーム



図 4. 奥：牽引器 手前：オーストラリアからの支援物資

CWM 病院から移動してきた装具科は義肢科と統合され義肢装具科となっていた。装具作成用のオーブンは現在もプラスチック製短下肢装具作成のために使用されている。このオーブンは初代隊員が申請に関わった機器であり、20 年近く使用されているものである（図 5）。



図 5. オープン（左上に JICA のステッカーあり）

4.2.5 新規活動調査

2010年4月より、FNU 理学療法学科の clinical educator としてシニア海外ボランティアが派遣されている。シニアボランティアは、40 から 69 歳を対象としたプログラムであり、JOCV より経験を積んでいる理学療法士が派遣されている。

FNU は現在 2 名の現地理学療法士がいる。学生は疾患の基礎的知識などは持っているが、理学療法評価の手法などは不十分である。日本では平日に毎日行われる実習も、フィジーでは隔日に行われており、実習量が異なっている。病院実習では、病院勤務の現地理学療法士による指導はほとんど行われておらず、clinical educator が指導している。

教育機関への理学療法士派遣は有効と感じているが、今後シニア海外ボランティアでの人材確保は難しいと考えている。

5. 考察

5.1 「マンパワー」型活動の持続性の低さ

フィジーにおける JOCV 活動終了後の派遣先の状況を調査した。結果として、調査を行った施設すべてで派遣前の人員配置に戻っていたことが明らかになった。ただし、現地理学療法士雇用数の増加に伴い、欠員となっていた施設に他病院から出向する状況も生まれていた。

JOCV は、現地スタッフの補完としての役割が大きい。「マンパワー」に終始する活動は、持続性には結びつかないのは危惧していたとおりであった。ただし、SP へのインタビューから「マンパワー」としてフィジー国民に対し理学療法サービスを提供することで、医療サービスの向上には繋がっていること、また 1990 年からの活動によって、現地理学療法士との友好親善、相互理解の深化は進んでいる印象を受けた。

5.2 支援物資の長期使用

支援物資は、20 年近く使用されている機器もあれば、紛失している機器もあった。これは管理状況によるものと考えられる。車いすのように人を乗せて移動する機器に比べ、プラスチックを温めるオーブンは固定的に用いる者であり管理が容易であろう。今回プラスチック装具作成用のオーブンを長期にわたって使用されていることを確認できた。このことから、物資によっては持続的な効果を維持できるといえるだろう。

5.3 新たなプロジェクトの創出

JOCV 活動から発展し、沖縄研修が実施されている。この事業では理学療法評価に焦点があてられているが、そのフォローアップ研修としてフィジーへの短期派遣 JOCV が実施されており、「マンパワー」ではなく「技術移転」にフォーカスすることができている。また、シニア海外ボランティアが行っている教育機関での活動は、未来の理学療法士への「技術移転」につながる。

このことから、JOCV 活動単体では持続性が乏しいものの、別事業に発展し「技術移転」を行うことでの持続可能性が示唆された。

6. 結語

今回の海外調査により、「マンパワー」となる病院における JOCV 活動では、理学療法士支援の持続性は低いことが明らかになった。しかし、研修事業や教育施設への派遣といった形であれば、技術移転が可能であることが示唆された。また、支援物資は長期間有効に活用されているものも一部あることが明らかになった。

自分自身の活動後、地域病院への派遣が行われることになったが、その選択がよいものであったか疑問があった。第 1 期と同様に第 3 期も「マンパワー」としての活動が主となっていたが、新しい事業の開始に結び付いていた点は、プラスに作用したようである。この点は、JICA が市民参加事業の選択肢を増やした効果や教育機関の大学化と結びついた効果といえよう。

今後も研修・教育による支援により、フィジーの理学療法が発展することを期待したい。

【謝辞】

本調査はお茶の水女子大学「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プログラムの助成を受けている。調査にご協力いただいた皆様、隊員活動報告書を公開している JOCV の皆様ならびに JICA に御礼申し上げます。

注

1. ナウソリヘルスセンターの理学療法士が、ワイニンボカシ病院も兼務していたため、インタビューのためにナウソリヘルスセンターも訪問した。
2. 独立行政法人国際協力機構法第 13 条 (3) より抜粋。
3. 各病院で現地理学療法士にインタビューを行ったが、本報告では紙面の関係上割愛する。

参考文献

- 相原誠 (2003) 「隊員活動報告書」
磯貝恭兵 (2008) 「隊員活動報告書」
臼井弥生 (1994) 「隊員活動報告書」
来田晃幸 (2009) 「隊員活動報告書」
桜井由紀 (1995) 「隊員活動報告書」
副島彩 (2007) 「隊員活動報告書」
社団法人沖縄県理学療法士会 (2010) 「草の根技術協力事業 (地域提案型) フィジー国理学療法士臨床研修終了時評価報告書」
青年海外協力隊事務局 (2006) 「平成 17 年度ボランティア事業評価報告書」
高井浩三 (1994) 「隊員活動報告書」
高橋英明 (2009) 「隊員活動報告書」
田中みわ (2004) 「隊員活動報告書」
田村幸子 (1992) 「隊員活動報告書」
知脇希 (2004) 「隊員活動報告書」
槌田夏代子 (1994) 「隊員活動報告書」
東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム (2009) 「国際協力における海外ボランティア活動の有効性の検証」
中原かおる (2002) 「隊員活動報告書」
永堀明子 (2003) 「隊員活動報告書」
濱崎愛 (2011) 「隊員活動報告書」
林克郎 (1992) 「隊員活動報告書」
比嘉つな岐 (2009) 「隊員活動報告書」
本杉直子 (2011) 「隊員活動報告書」
独立行政法人国際協力機構法 (平成 20 年 10 月 1 日施行) <http://www.jica.go.jp/about/jica/pdf/jicahou.pdf> (2010 年 9 月 27 日最終確認)
JICA 事業別取り組み <http://www.jica.go.jp/activities/schemes/index.html> (2010 年 9 月 27 日最終確認)
JICA 地域提案型 草の根技術協力事業 http://www.jica.go.jp/partner/kusanone/chiiki/fij_02.html (2010 年 9 月 27 日最終確認)
Ministry of Health, Fiji <http://www.health.gov.fj/hospitals.html> (2010 年 9 月 27 日最終確認)
* 「隊員活動報告書」は、終了時報告書提出時期を発行年とした。

こびやま のぞみ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 ジェンダー学際研究専攻

指導教員によるコメント

本稿は、JICA のプロジェクトに専門知識のある個人として参加した著者が、その 7 年後にプロジェクトが行われた現地を訪問し、当時実施されたプロジェクトがどの程度現地化したかどうか、その効果を分析したものである。

JICA プロジェクトは、客観的な評価が十分に行われているわけではない。著者は参加者であった、という点からいえば、客観的評価といえるかどうかについて議論の余地はあるものの、JICA と離れた大学組織に属していることから、より客観的に評価をできる立場にあると思われ、この評価研究は一定以上の意義があると思われる。

途上国支援について、ニーズに合致しない、持てる技術に合致しない、などさまざまな問題点が指摘されている。著者は、技術伝達において、現在の方法が持つ問題点を指摘しつつも、一定の効果があつたとしている。技術支援の問題や効果を測定することを試みる研究として良い試みと考えている。なお得られた成果については、ぜひ JICA にフィードバックし、一つの評価として知らしめるべきであらう。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (人間科学系)・永瀬伸子)

学生海外調査研究	
父親の IT 利用と子育て参加・夫婦関係に関する研究発表と調査	
	佐々木 卓代
	ジェンダー学際研究専攻
期間	2011 年 11 月 16 日～2011 年 11 月 21 日
場所	アメリカ フロリダ州 オーランド
施設	全米家族関係学会第 73 回大会 (NCFR) Rosen Centre Hotel

内容報告

1. 本研究に至る経緯

報告者の研究テーマは、社会的に重要視されている父親の子育て参加促進要因を父親の属性や夫婦の関係性、職場要因、父親アイデンティティなどの視点から解明することである。また、IT が普及している社会において、父親の IT 利用が子育て参加や夫婦のコミュニケーション、夫婦の関係性に対してどのような影響があるのかを明らかにすることである。報告者は、これまでの研究で、父親が子育て参加することで、子どもの自己受容感を高めること (佐々木、2009a)、父親に対する親和性を深めること (佐々木、2009b)、父親自身の成長を促し、子どもの父親評価を高めること (佐々木、2010)、父親の過干渉的養育態度は、間接的に子どもの有能感を弱めること (Sasaki, 2011a) などを明らかにし、査読論文や学会等で発表を行っている。さらに、夫婦の愛情関係や子育てにおける協力的関係が、父親の子どもに対する支援的意識や子育て参加行動を増加させ、子どもの有能感や自己受容感、父親への親和性や評価などを高めることを明らかにし、父親の子育て参加における夫婦関係の重要性を示唆している。

さらに、石井クンツ昌子教授が代表を務める科研費研究会 I (「IT 社会における育児期のインフォーマルネットワークと世代間関係：日米比較から」科学研究費補助金基盤研究 C 課題番号 19500647) が収集した 2009 年母親調査データ (有効回答者数 524 人) を分析し、育児期の母親の IT 利用による夫の子育て参加や夫婦関係良好度に対する影響を明らかにし、母親の子どもに関する夫との IT 利用が夫の子育て参加を促進し夫婦関係満足度を高めること等に関して (2011b)、学会発表や研究成果報告書執筆などを行っている (2009 年 9 月日本家族社会学会第 19 回大会「育児期の母親の IT 利用と夫婦関係」：同年 11 月 National Council on Family Relations (以降 NCFR と記述) 71 回大会 (サンフランシスコ) “Marital Quality and Communication, and the Internet Use in Japan” : 2010 年 10 月日本家政学会家族関係学部会第 30 回セミナー「育児期の母親の IT 利用を媒介とする父親の育児・家事参加と夫婦関係」：同年 12 月京都大学 GCOE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」The 3rd Next-Generation Global Workshop “Japanese Mothers with Young Children and Internet Use: Husband' Child Care and Housework, and Marital Quality”)。

また、同教授が代表を務める科研費研究会 II (「情報社会における育児期の親の IT 利用と家族関係：日米比較から」科学研究費補助金基盤研究 B 課題番号 22300246) が収集した 2011 年父親データ (有効回答者数 475 人) を分析し、父親の子育てに関する IT 利用が夫婦のコミュニケーション時間を増加させ、夫婦関係良好度や子育て参加促進に対して有効に作用していることなどの学会発表を行った (2011 年 9 月日本家族社会学会第 21 回大会「育児期の父親の IT 利用と父親アイデンティティ・夫婦関係良好度」)。以上から、博士論文執筆にあたって、父親の子育て参加と夫婦の関係性の視点は欠かせないものとなっていること、IT と家族の研究においてはアメリカが進んでいることから、海外での研究動向や調査の必要性があると考えた次第である。

2. 海外調査研究の必要性と目的

日本で実施されている夫婦の関係性を測る尺度は、海外の研究者の文献などから項目を採用して日本に合うように修正した尺度が使用されている。すなわち、夫婦の関係性の観点による父親の子育て参加研究は、欧米の方が盛んに行われているため、先端の研究課題を把握するためには、海外における調査は不可欠で必要性があると考えた。また、IT の普及や利用は、アメリカにおいてかなり進歩し

ているため、父親の IT 利用と子育て参加研究の動向をアメリカにおいて調査する重要性と必要性が高いと判断した。

さらに、2009 年 11 月 NCFR 学会発表（前述）と 2010 年 11 月 The 5th International Conference in Applied Ethics at Hokkaido University における “Parental Involvement and Children’s Perception of Competence: From Gender Perspectives” の発表、並びに 12 月京都大学 GCOE 主催の The 3rd Next-Generation Global Workshop（前述）での発表において、海外の研究者から、父親の子育てと夫婦の関係性に対する質疑、IT 利用と夫婦関係良好度の研究においても、夫婦の関係性の視点について活発な質疑が出された。よって、本報告者は、博士論文において父親の子育て研究と夫婦の関係性を重要視していることから、NCFR 学会で研究発表を行うことで夫婦の関係性の視点を確認することと、学会での質疑応答から今後の研究の方向性のヒントを得ること、また、同分野における海外の研究を調査する必要があると判断した。

そこで、本調査の目的は、夫婦という単位や関係を特に大切にするアメリカの学会において、父親の子育て参加と夫婦関係の視点、家族や親子の関係性における研究動向、また、IT 利用と家族、夫婦、親子関係に関する国際的な研究動向などを調査することであった。また、多国の研究者が多数参加するかなり質の高い国際的な学会なので、学会期間中は、アメリカや他国の男性の子育てと夫婦の関係性の研究の現状や IT 利用の研究状況を調査するために、積極的に発表やシンポジウム、ポスター発表等に参加して、質疑応答をすることと、他国の研究者と交流し、情報や知見を深めることも目的の一つとして設定した。そして、アメリカにおける家族に関する多様な視点からの研究を調査することで、本報告者の博士論文のテーマとしている父親の子育て研究の執筆や研究を深めることにつながることも本調査の目的として定めた。

日本においては、NCFR の学会のように、多国の多数の研究者の発表を聞いて勉強できる機会はなかなか得られないので、父親の子育て参加に関する諸外国の現状や問題点の把握、父親の子育てに関する IT 利用の諸外国の情報を得ることが可能であろうし、今必要とされている父親研究の課題を発見することにもつながると考えた。日本においても海外においても、IT 利用が父親の子育て参加にどのような影響があるのかを解明している研究はほとんど見当たらないので、NCFR の学会参加により、IT 利用による家族関係、親子や夫婦の関係への影響など、今後の父親研究の課題発見につながる事が予想され、日本の父親の子育て参加研究の発展に貢献する意義があるとも判断した。

3. NCFR（全米家族関係学会）第 73 回大会における研究発表と研究調査の概要

3.1 研究発表の概要

今回の NCFR 学会において、石井クンツ昌子教授の科研費研究会Ⅱのメンバーは、2011 年 2 月に収集した父親データをもとに、シンポジウム形式でそれぞれの研究発表を行った。シンポジウムの題目は、“The Use of the Internet and Fathers’ Family Involvement in Contemporary Japan” であり、その中で、報告者は第 4 番目の報告となる“The Impact of IT Use on Co-parenting, Marital Relationships and Networking : A Case of Japanese Fathers” の中で、父親の IT 利用と Marital Relationships の箇所を担当して発表を行った。

本報告者の分析の結果、父親がインターネットを利用する時間が多いほど、子育てに関連する情報を有意に多く収集しており、その中でも、子育ての情報やゲームなどの収集にインターネットの利用頻度が多い父親は、妻との会話時間が長いということが明らかになった。さらに、その夫婦の会話時間は、夫婦の良好な関係性を高め、子育てに関して両親やきょうだい、友人などの社会的なネットワークとの対面によるコミュニケーション頻度も高めることが判明した。そして、夫婦の良好な関係性や子育てに関する社会的なネットワークとの対面によるコミュニケーションが、直接的・間接的に父親の子育て参加を高める効果があることが示唆された。このように、日本における育児期の父親の子育てに関するインターネット利用が、夫婦の良好な関係性を高め、父親の子育て参加を促進することを研究成果として発表した。

全てのメンバーの研究発表を終了した時点で、シンポジウムの聴衆者との質疑応答に移ったが、本報告者の発表に関する内容の質疑応答のみ報告させて頂くことにする。まず、最初に、父親の IT 利用と夫婦の関係性において、良い結果のみの報告となっているが、ネガティブな影響の面はなかったのかどうかの質問があった。この点に関して、報告者は、父親データの分析においては、IT 利用と夫婦の関係性にネガティブな影響は出ていなかったこと、ただし、2009 年に石井クンツ昌子教授の科研費研究会Ⅰで行った母親データの分析においては、母親の携帯利用時間が長いほど、夫婦の愛情関係は低いという結果になっていたこと、よって今後も IT 利用と夫婦の関係性に関しては、丁寧な分析を行っていく必要があるとの回答を行った。

次に、インターネットを長時間行っている父親は、家族というより外に関心が向いているイメージ

が強く、子育て参加を多く行っていることや夫婦の関係性が良いとのイメージが結びつかないとの質疑があった。この質問に対して報告者は、父親データの分析結果がそうなる理由を、調査対象者の父親が、子育てに関する情報検索、例えば、子どもを遊びに連れて行く際の施設の内容の確認や交通手段、また、子どもを遊ばせるためのゲームなどをダウンロードすることに一番多くインターネットの利用時間や頻度が多い父親たちであることを理由にあげた。それゆえ、子育ての情報検索目的の使用が、夫婦の会話時間を高め、夫婦の関係性を良好なものにしているとの説明を行った。また、妻以外の社会的なネットワークの対面頻度を高めることに関しても、子育てに関しての対面会話頻度を質問した上での分析結果であることも加えて説明した。アメリカの学会発表であるだけに、夫婦の関係性に対する質疑が多く出され、IT利用と夫婦の関係性の研究の意義を実感することにつながり、大変勉強になった発表の場であり、質疑応答であったといえる。

3.2 研究調査の概要

3.2.1 IT利用と家族に関連する研究の概要

Technology Use in Families のセッションにおいて、コンピューターを介するコミュニケーションとカップルの先行研究をまとめる形で研究報告があった (“Couples Use of Technology for Communication: Functions and Future Directions,” presented by Perry, M. S. University of Kentucky)。コンピューターによるコミュニケーションは、基本的に対面や声による相互作用ではなく、社会的・非言語的なものが欠落しているとの前提に立ち、カップルの関係維持に機能し、特に配偶者にとっては、緊急時、ストレスや必要性を感じている時に重要なものであること、軍隊にいるカップルにとっては、配属されている間の関係維持とコンタクトのために不可欠のツールであることが報告された。これらの研究で使用されている理論として、アタッチメント理論と関係弁証法的理論を用いていることも興味深かった。

また、離婚後の家族においてとりわけ対面でのコンタクトを維持することが難しいゆえに、離婚後も子どもを養育する親と、親と同居していない子どもに対するインタビュー調査の二次分析を行った研究報告があった (“Reflections on Technology use in Post-Divorce Families,” presented by Feistman et al. University of Missouri)。それらの親と子どもは、携帯電話やメールなどに対する恩恵と欠点に対して違う認識を持っていたが、家族のメンバーの親密さを維持することに IT 技術が助けになっていることを認めているというものであった。

次に、一人親の方が、二人親の家庭よりも報酬として子どもにより多くメディアを使用していること (“Media and the Family: Current Trends for Media Use, Monitoring, and Connection,” presented by Coyne et al. Brigham Young University)、親のオンライン活動は、環境理論から様々に異なった資源の必要性によって 5 つにグループ分けられ、とりわけ収入によってその活動状況が違うことが報告された (“Digital Divides: An Examination of How Parents’ Technology Use Differs by Income,” presented by Doty et al.)。収入の低い階層の親は高い階層の親よりもブログやソーシャルネットワーキングでしばしば IT を使用し、高い階層の親は低い階層の親よりも情報検索で多く IT を使用するとのことが明らかにされた。

他にも、韓国家族における研究で、親と子どもの学業期待の役割に父親においては IT 使用の効果があるとする研究 (“The Effects of Internet Use on the Relationships with Fathers among South Korean Families: The Role of Parental and Child’s Educational Expectation” presented by Kim, S.)、親が家族とのコミュニケーションに IT を使用することにおいて子どもの年齢によって相違があるとする報告

(“Parents’ Technology Use for Family Communication: Differences by Child Age” presented by Weigel et al.)、メールによって家族のコミュニケーションをはかることはアルツハイマーに罹った家族に対して日常的なケアになるという報告 (“Informal Care of Alzheimer’s: Family Communication by Email” presented by Grasse-Bachman et al.)、母親の新しいメディアの使用としてブログを行うことは母親としての幸福を増加しているのかどうか (“New Mothers’ Media Use: Could Blogging Increase Maternal Well-Being?” presented by McDaniel et al.) などの報告がなされた。他にも、IT に関する研究が行なわれており、カップル、親子、階層、病気などの多様な視点で IT の研究が行われていることがわかり非常に勉強になった。よって、今後の IT に関する研究を継続する上での課題につなげたいと考えている。

3.2.2 夫婦に関連する研究の概要

Marriage and Marital Quality のセッションでは、結婚生活の中で、男女ともに平等に愛情表現を行うけれども、女性は否定的な考えを抑止することによって愛情を表現するが、男性は妻と一緒に家事をすることや娯楽活動を行うことによって愛情を表現する傾向があるという研究報告がなされた

(“Do Men and Women Show Love Differently in Marriage?” presented by Bredow et al.)。次に、結婚継続とともにいかに結婚の質が変化するかという理解を深めるために、1980 年に結婚 3 年以下の夫

婦に 20 年に渡って結婚における幸福、問題、葛藤、相互作用などの変化を調査した研究においては、結婚における様々な様相において、結婚の質は U 字型や継続的減少という期待された軌跡を提示せず、結婚継続とともに共変するという理解を深めることにつながっていることが報告された (“Marital Quality across the American Life Course” presented by James et al.)。

また、新たに結婚した夫婦 610 組を 3 時点で調査した結果、1 時点で結婚満足度が高い夫婦は、2 時点においてより高い結婚の信頼が好意的な行動を増加させ、3 時点においては夫と妻双方の結婚満足度を高めていること、さらに好意的な行動のより高いレベルは、関係満足度を増加させ、妻の行動が夫の満足度を形成することが報告された (“Marital Confidence, Positive Couple Behaviors, and Marital Satisfaction” presented by Johnson et al.)。

他にも、関係性の質の予測や安定性の観点から、子どもをもち親となっている夫婦と親となっていない夫婦は、結婚の軌跡が本当に違うのかという研究報告 (“Marital Trajectories of Parents and Nonparents: Do They Really Differ?” presented by Durtscho)、イランの自称幸せな夫婦と成功的といえる結婚の要因や (“Self-described Happy Couples and Factors of Successful Marriage in Iran” presented by Dadras et al.)、中国の仕事満足度における結婚の質の効果はどう作用しているかなど研究報告もなされた (“The Effect of Marital Quality on Work Satisfaction in China” presented by Chiu et al.)。

Couples' Programs のセッションの中では、TOGETHER という財政的結婚の緊張に取り組む夫婦の能力を改良するためのプログラムについて、第一部ではプログラムの内容が書かれ、第二部においてはこのプログラムの効果を評価するとパイロットテスト研究で述べられていることが報告された

(“TOGETHER-A Couples' Program for Managing Financial and Marital Strain” presented by Hayhoe et al.) また、子ども福祉事業員は、苦痛を感じている結婚や家族の関係性に対する働きかけの仕方を用意しているが、健全な関係性と結婚教育に焦点を当てることを欠落していることを指摘し、関係性を改良するための知識を持つことが彼らの仕事の改良につながることを報告もなされた (“Child Welfare Workers' Attitudes and Views toward Relationship and Marriage Education” presented by Schramm et al.)

最後に、健全な関係性と結婚を形成し維持するための助けになっている政策的ツールとして用いられている結婚と関係性教育(MRE)の効果について、現在、収入の低いカップルに焦点を当てて知りえている包括的なレビューの発表がなされた (“What Works in Marriage and Relationship Education? A Comprehensive Review of Lessons Learned with a Focus on Low-income Couples” presented by Hawkins, A. J.)。このように、多様な文化圏に渡る Marital Quality の研究成果に触れることができたこと、アメリカにおいては、健全な関係性や結婚に対する教育プログラムなどがあり、収入の低い階層における重要性など、結婚の質や人種、階層などからの多様な研究視点を学ぶことができ、研究視点の広がりにつながった。

3.2.3 父親・家族・養育行動に関連する研究の概要

Fathering in Context のセッションでは、日本においてはあまり研究報告がなされないゲイの父親の観点から発表や、アフリカ系アメリカ人に関する研究報告が多く行われていた (“Why Parenthood?: Gay Men's Motivations for Pursuing Parenthood” presented by Downing et al. : “Gay adoptive Fathers' Challenges and Tensions in Balancing Work and Family” presented by Richardson et al. : “Breadwinning, ‘New Fathers, and the Package Deal in the Great Recession” presented by Pacholok et al.)。また、離婚が多いアメリカらしく、離婚した父親の新しいパートナーが、同居していない子どもに対する父親のかかわりにどのように影響するのか、父親のパートナーを新しい友人と称するなど、多様な視点での研究報告が多かった (“Daddy's Got a New ‘Friend’: Dose a New Partner Influence Father Involvement with Nonresident Children?” presented by McClain, L. R.)。

さらに、養育行動に関しては、青年期を扱ったセッションが多く見受けられ、Parenting Behaviors and Adolescent Well-being across Cultures や Adolescence, Childhood, Child Development and Socialization, Siblings, Family Relationships などのセッションでは、父親と母親のえこひいきによる成人後のきょうだい葛藤の問題や (“Differential Effects of Perceptions of Mothers' and Fathers' Favoritism on Sibling Conflict in Adulthood” presented by Suitor et al.)、若者の発達における母親・父親の支援と葛藤における研究報告 (“Maternal/Paternal Support and Conflict in Relation to Latino Youth Development” presented by Ferber et al.)、親の教育期待が家族関係の予測につながるとした研究の報告がなされていた (“Family Relational Predictors of Parental Education Expectations” presented by Weiser)。

以上から、本調査において、学会発表における活発な質疑応答を行ったことや、海外の研究者の発表を様々な角度から調査して研究成果を収集し、IT と家族、父親研究の動向、夫婦関係や親子関係で

取り上げられている課題を把握したことで、本調査の目的を達成できたと考えている。

4. 今後の研究計画と展望

今後の父親の IT 利用に関する研究計画としては、日本の父親と同様の調査票内容で、アメリカの父親に対して調査を行っており、日米比較分析を行う計画である。また、IT 利用と家族、父親の子育て参加や夫婦関係の視点の研究においては、人種の問題や社会構造的・文化的に多様性があるアメリカで得られた知見を、日本の社会的実情に照らし合わせた研究課題として焦点化していくことが必要であると考えている。

以上、海外の学会に参加して発表を行うことは、アメリカにととまらず、世界中の国々から参加する研究者たちに、日本人として研究成果を紹介することで、国際的な女性リーダーの育成につながるものと考え、NCFR などの国学会発表の重要性を大いに感じた次第である。海外の研究者たちが、グローバルで多様な視点から新たな研究を行い、理論の発展や実践の可能性を拡張していく姿勢は、非常に興味深く、研究上大変良い刺激を受けたと考える。よって、今後も、海外の進歩的な研究を肌で感じるためにも英語による学会発表や英語論文の執筆によって海外に研究成果を発信し、国際的な女性研究者として成長するべく努力する所存である。

その意味においても、本プログラムの支援によって NCFR 学会に参加し、国際的な研究成果を調査収集し、研究者たちと質疑応答の中で人脈を築くことにつながったことに対して、関係スタッフのご協力とご理解・ご尽力に深く謝意を申し上げたい所存である。また、報告者が博士論文で引用しているアメリカの父親研究の大家の先生方と知り合うことができたことは、本調査の大きな成果の一つであり、ご紹介くださった石井クンツ昌子教授にこの場を借りて心より御礼申し上げたい。今回の学会の発表や調査で得られた成果は、日本家族社会学会や家族関係学部会、NCFR 学会の発表の場において、さらに、査読論文の形で公表するとともに、現在執筆中の博士論文の一部として組み入れ、本海外調査研究の成果とする予定である。

参考文献

- 佐々木卓代 (2009a) 「子どもの習い事を媒介とする父親の子育て参加と子どもの自己受容感：スイミングスクールを対象とした調査から」『家族社会学研究』21(1): 65-77.
- 佐々木卓代 (2009b) 「父親の子育て参加と子どもの親和性」『家族関係学』28, 43-55.
- 佐々木卓代 (2010) 「子どもの習い事へのかかわりを通じた父親の成長と子どもの父親評価」『子ども社会研究』16, 31-44.
- Sasaki, T. (2011a) "Parental Involvement and Children's Perception of Competence: From Gender Perspectives" *Applied Ethics*, (Ed.) Center for Applied Ethics and Philosophy, 199-212.
- Sasaki, T. (2011b) "Japanese Mothers with Young Children and Internet Use: Husband' Child Care and Housework, and Marital Quality" *Proceedings of the 3rd Next-Generation Global Workshop Migration (Kyoto University)*, 575-587.

ささき たかよ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 ジェンダー学際研究専攻

指導教員によるコメント

佐々木さんは、現代日本社会において重要視されている父親の子育て参加に対して様々な視点から研究を行い、父親の子育て参加が、子どもにどのように影響し、夫婦の関係性とどう関連し、父親自身の人間的成長を促進するのかを解明することを主な研究目的として博士論文に取り組んでいる。また、近年の急速な IT 普及が、家族・夫婦・親子関係にどのように影響するのかに対しても重大な研究関心を持ち、今回の NCFR 学会において父親の IT 利用と子育て参加・夫婦関係の発表を行ったことは、日本の研究者として海外で研究発信を行う貴重な経験の積み重ねとなったと考える。特に、父親の子育て参加において夫婦の関係性を重要視している佐々木さんにとって、今回の NCFR 学会の発表で夫婦関係と子育てに関する活発な質疑応答が行われたこと、夫婦関係に関連する他の発表者の研究を調査し多くの示唆を受けたことで、今後の博士論文に対してかなり意義深い学会となったと確信している。さらに、博士論文に使用している理論の研究者たちとも知り合えたことは、今後の研究の発展につながり、学会参加のメリットといえる。以上から、本助成を頂き、海外における学会発表と調査研究を行ったことは、研究者同士の人脈を築き、佐々木さんの父親研究における夫婦の関係性の視点がグローバルなものとなり、博士論文執筆に向けて重要な進歩となったことと、今後も IT と家族・

父親の子育て参加の研究を継続する上で非常に高い成果を収めたことを評価することができる。
(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (人間科学系)・石井クンツ昌子)

学生海外調査研究	
Circus Amok (サーカス・アモク) のパフォーマンスの上演・受容の状況	
	佐藤 里野
	比較社会文化学専攻
期間	2011年9月1日～2011年9月9日
場所	ニューヨーク市、アメリカ合衆国
施設	New York Public Library 他

内容報告

1. はじめに

サーカス・アモク(Circus Amok)は、1984年、ジェニファー・ミラー(Jennifer Miller)を中心に結成されたパフォーマンスのグループである。ミラーは、ふさふさした髭を生やした女団長で、グループの芸術監督も務めている。「アモク」とは、もとはマレー人に特有のものとされていた精神的錯乱を表す言葉で、現在の一般的な用法では「狂乱状態」を意味する。サーカス・アモクのショーは、コミカルでわかりやすく、パペットやジャグリング、竹馬やドラァグ・パフォーマンスを取り入れた派手なスペクタクルは子どもたちにも人気がある。しかし同時にサーカス・アモクは、「子ども向けのサーカス」や、単なるエンターテインメントとは一線を画している。ミラーたちは、ユーモアでウィットに富んだセリフや動作の中に、時事的な問題を反映する諷刺や、体制批判のブラック・ジョークを盛り込んだスキット(寸劇)と、綱渡りやトランポリンなどのサーカス的なアクロバットをメインにしたシーンを次々とつなぎ合わせ、全体で2時間弱のショーを行う。結成時から、1年に1度のペースでツアーを行い、たいは8月、9月の真夏の時期に、マンハッタン、ブルックリン、クィーンズ、ブロンクス、つまりNY中のパークで、無料のショーを上演してまわる。そして年毎のテーマは、その時々々の社会情勢を反映した、政治的な内容となっている。たとえば、2002年の*The Experimental Walking Tour*と題されたツアーでは、2001年の同時多発テロ後のU.S. Patriot Actを批判し、続く2003年の*Home * Land * Security*では、対テロ戦争を扱っている。そして2008年の*Sub-prime, Sublime*では、当時切迫していた金融危機や、住宅ローンの問題を取り上げている。

以上の点から、サーカス・アモクは「批評的なサーカス」であり、その社会的な役割やアーティストたちのユニークさなど、多くの点でニューヨークの現代のパフォーマンス・アートにおいて重要なグループであるといえる。報告者は、博士課程入学時より、現代(80年代～)のアメリカにおけるパフォーマンス・アートの実践を対象に、「身体」を媒体にした表象芸術の政治性のあり方について検証しており、その中でサーカス・アモクについても分析を行っている。しかし、このグループについては、これまで日本ではほとんど研究されておらず、資料も充分ではない。そこで、本海外調査研究により、サーカス・アモクの本拠地であるニューヨークにおいて、ニューヨーク・パブリック・ライブラリー(NYPL)を中心に資料収集等を行い、その資料に基づき、同グループのパフォーマンスの上演・受容の状況を検証した。その結果、ニューヨークの前衛パフォーマンスにおけるサーカス・アモクの現在の位置付けに関する重要な分析を行うことができた。それをふまえた考察の概要を以下に報告する。

2. 「みんなのためのサーカスへ」ーサーカス・アモクの歩み

ここでは、これまでに報告者によって行われたサーカス・アモクのパフォーマンスの歴史と社会的役割について簡単に述べる。

このグループのもっとも興味深い点は、ミッションとして「みんなのためのパフォーマンス」を掲げている点である。このことは、劇場や美術館などのアート・スペースを拠点とし、ある程度の知識や関心を共有し得る特定の観客の前でパフォーマンスを上演することの多い他の多くの前衛のアーティストたちと比べると、極めて重要な特徴である。

結成時のサーカス・アモクは、マンハッタンのラ・ママ実験劇場(La Mama ETC)やパフォーマンス・スペース 122(Performance Space 122)などの実験演劇スペースを中心に活動していたが、1990年代

半ばから、上演の場所をブルックリンやブロンクスの市営公園などの公共スペースに移す。そのような変化の動機について、ミラーは、「特定のコミュニティの境界を越えたダイアログの場を開き、それによって新しいコミュニティを形成したいからである」と述べている。

しかし、それは同時に、危険を孕む挑戦でもあった。それまで拠点にしていた実験的な演劇サイトでは、どのような観客がパフォーマンスを観にくのかということとはあらかじめ想定することが可能であった。そのような観客たちは概ね、芸術的趣向や人生における価値観や政治的立場などにおいて互いに共通するものも多く、何より、アーティストたちによる前衛的で政治的なパフォーマンスを解釈するリテラシーを多かれ少なかれ持っている人びとであると考えるべきである。パフォーマンス・スタディーズの研究者で、サーカス・アモクの活動にも参加した経歴を持つマーク・サスマン(Mark Sussman)も指摘しているとおりに、前衛のアーティストらにとって、ニューヨークの(ダウントウンの)劇場は、「安全な」場所であった。¹

パフォーマンスのサイトをめぐる「安全性」とその政治性との関係について、報告者は、これまでに、スプリット・ブリッチーズ(Split Britches)のパフォーマンスの分析を通して考察している。スプリット・ブリッチーズとサーカス・アモクは、ジェンダー、セクシュアリティのあり方をめぐる政治的意識や、さまざまな社会的差別・格差への問題意識、また、社会風刺的でコミカルな演出等のスタイルなど多くの点で、その特徴を共有している。サーカス・アモクと同様、スプリット・ブリッチーズもまた、1980年代に活動をはじめ、90年代を通じて、ラ・ママ実験劇場などのニューヨークのダウントウンの劇場で作品を発表している。しかし、サーカス・アモクが「みんなのためのパフォーマンス」を目指し、劇場から屋外へと飛び出したのに対し、スプリット・ブリッチーズは小さな劇場にとどまり、そこにやってくる観客に向けたパフォーマンスを続けることを戦略的に選択した。そうすることで、スプリット・ブリッチーズは、観客の多くが「女性」、「フェミニスト」、あるいは「レズビアン」であるなどと想定し、解釈の共有や連帯といったものを前提として、「彼女たち」のコミュニティを創造することを試みたのである。したがって、スプリット・ブリッチーズとサーカス・アモクの演劇的戦略の違いは、想定される観客層の違いにあると考えられる。「彼女たち」が観客であることを前提にできるスプリット・ブリッチーズと違い、サーカス・アモクは、年齢、社会的なバックグラウンド、考え方などあらゆる面を異にする不特定多数の人びとを前にパフォーマンスを行うという課題に向き合わなくてはならなくなる。「安全な」劇場から屋外へとパフォーマンスの場を移したことで、サーカス・アモクは、「みんなのためのパフォーマンス」という新たなミッションのもとで、新たな活動を展開していくことになる。

対象とする観客における「彼女たち」と「みんな」との違いは、90年代という背景を考えると大変重要な意味をもつ。サーカス・アモクが「みんなのためのパフォーマンス」に向かい始めた90年代は、それまでのアイデンティティ・ポリティクスの有効性が揺らぎ、政治においても、芸術においても、そのジレンマにどのように向き合うべきかが問われ始めた時代であった。したがって、報告者は、サーカス・アモクの「みんなのパフォーマンス」への挑戦は、停滞しつつあるアイデンティティ・ポリティクスに対するオルタナティブな政治的枠組みの模索であり、90年代という時代の変化に呼応したものであるとの位置付けが可能であると考えている。しかし、これまでの段階では、その位置付けに関して、資料的な証拠が十分であるとはいえず、とくに、サーカス・アモクの初期のパフォーマンスに関する資料の閲覧や分析はほとんど行われていなかった。「みんな」のためのサーカス「以前」のサーカス・アモクのパフォーマンス、つまり、ダウントウンの小さな劇場でサーカス・アモクがどのようなパフォーマンスを行っていたのかを知ることは、同グループの軌跡をたどり、現在に適切に位置づけるには不可欠である。

本海外調査研究での大きな成果は、サーカス・アモクの「いま」を適切に位置づけるために必要な過去の公演の映像資料を閲覧できたことである。加えて、主宰であるジェニファー・ミラーのインタビュー映像や、「サーカス・アモク」とは別に彼女が行っている演劇・パフォーマンスの様子などを知ることができた。以下に、本調査で多角的に収集された資料のなかからとくに重要と思われるものを3点挙げ、それに関連して視察したニューヨークの劇場の状況も交えつつ、考察を述べることにする。

3. NYPL における映像資料調査より

前述したように、サーカス・アモクは90年代より、ニューヨーク市内の公園で、社会問題に対する批評的な姿勢と、大人から子供まで、誰もが楽しめるようなエンターテインメントの要素を組み合わせ、無料のサーカス・パフォーマンスを行ってきた。それらのパフォーマンスの多くは、ニューヨーク大学の Hemispheric Institute のビデオ・ライブラリーで閲覧することができ、パフォーマンスに取り入れられているスペクタクルや、ニューヨークの市民に身近な社会問題をパロディ化する手法などを伺い知ることができ、野外で、不特定多数の観客に向けて上演を行うことを意識したさまざま

な戦略を、芸術的側面と政治的側面の両方から伺い知ることができる。こうした屋外での上演に加え、今回の資料調査では、サーカス・アモクの初期のパフォーマンスや、グループについてのドキュメンタリー、主宰ジェニファー・ミラーのインタビューなどを閲覧することができた。

3.1 Juggling Gender

映像資料 *Juggling Gender: politics, sex and identity*(1992)は、タミ・ゴールド(Tami Gold)によるジェニファー・ミラーへのインタビューを中心に構成されており、フェミニスト、そしてレズビアンであり、髭を生やした女性であるミラーの人生と葛藤、価値観等が語られる。映像には、サーカス・アモクのパフォーマンスのシーンや、ミラーが参加したニューヨークのゲイ・パレード、また彼女の友人たちとの交流の様子等も含まれている。

ミラーは、1961年生まれで、コネティカットやカリフォルニアで幼少期を過ごした。両親はともにユダヤ系だが、彼女は、クエーカーとして育てられた。ミラーは高校でパフォーマンスを初め、やがて自分がレズビアンであることを認識し、フェミニズムに開眼していったと語っている。高校を卒業後、ミラーはパフォーマンス・アーティストとしての道に進む。そのときおもに、サーカス・パフォーマンスのトレーニングを受けたといい、それが彼女のアーティストとしてのバックグラウンドとなった。ミラーによれば、彼女の髭は、10代の終わりに突然生えてきた。ある医者には、ホルモン異常の一種であると告げられたというが、彼女は治療をしようとは思わなかった。彼女自身は、女性に髭が生えていることが問題であるとは考えなかったそうだが、彼女の祖母は、彼女になんとか髭を剃らせようとし、レーザー治療を受けさせられたと回顧している。彼女にしてみれば、その治療は苦痛でしかなく、その体験から彼女は、「女であること」に課せられる社会的な規範や抑圧を意識するようになった。インタビューでは、彼女のこのような意識が、「サーカス・アモク」という政治的なパフォーマンス・グループを結成するきっかけとなったことが明らかにされている。

ミラーの髭は、彼女を一般的な「女」であることから逸脱させているものの、フェミニスト、そしてアーティストとしてのミラーには大きな武器になっていると彼女は語っている。芸術における「理想の女性」像の表象から脱皮しようとするミラーにとって、彼女の髭は勇気を与えてくれるものであった。一方でこのビデオでは、ミラーの「女性的」な面も強調されている。それは彼女が時折見せる、非常にフェミニンな仕草や喋り方、また彼女が口紅を塗るシーンのアップなどに見ることができる。このことは、髭を生やした「女」という立場からパフォーマンスを発信していくという彼女のポジショナリティと呼応しているように感じられた。

また、*Juggling Gender* では、髭がアーティストのミラーに「強み」を与えている一方で、公衆トイレに入るときに苦勞することや、街中で好奇（ときには敵意）の視線を惹くことなど、苦難や困惑も同時にもたらすことがミラー自身によって語られている。しかしこうした体験も、彼女にとっては自分の中で構築されているジェンダーの感覚を多様化することにつながるという。多様性を内包する「女」という感覚こそが、特定の人びとにではなく、「みんな」に向かって呼びかけようとするサーカス・アモクのパフォーマンスの礎になっているのではないだろうか。

以上のことから、*Juggling Gender* は、「サーカス・アモク」の政治性の基盤を成すミラーのフェミニストとしての立場を知るための重要な手がかりとなる資料である。

3.2 Spies R us

映像資料 *Spies R us* は、サーカス・アモクによる1990年のパフォーマンスである。このパフォーマンスは、サーカス・アモクがニューヨークのダウンタウンの劇場を拠点に活動していた時期のもので、のちに市内の公園で行われるようになる野外公演との比較の上で重要な資料である。

NYPLの映像資料 *Spies R us* は、ニューヨークのイースト・ヴィレッジにあるパフォーマンス・スペース 122 で上演された約90分に及ぶ同パフォーマンスを記録したものである。タイトルにも表れているように、このパフォーマンスは「スパイ」をテーマに、当時のアメリカの外交政策及び国土安全保障(homeland security)への批判を目的としたもので、CIAなどの政府の諜報機関の活動と、国家権力という暴力との関係を風刺的に描いている。政治的な問題意識と、サーカスというエンターテインメントの要素、そしてコミカルなプロットを組み合わせる点で、1990年の *Spies R us* は、サーカス・アモクのその後のパフォーマンスと共通する要素を数多く持っている。しかし、パフォーマンスのスペースが、公園ではなく小さな劇場であるということ、そして観客層が、不特定多数の人びとではなく、「パフォーマンス・アート」に対する一定の興味と理解を持って集まる人びとであるということで、その表現方法には大きな違いが見られた。

廃校になった小学校の建物を利用したパフォーマンス・スペース 122 は、ニューヨークのコンテンポラリー・パフォーマンス・アートの中心地として知られている。報告者が訪れた9月初旬も、もうじきオープンする新しいシーズンに向けたリハーサル最中であった。周辺には、同様の小さな劇場も多く存在する。劇場の外壁や入り口の門には落書きが目立ち、割れた窓ガラスなどは放置され、敷

地内外にはゴミも散乱している。ニューヨークのこうしたタイプの劇場には決して珍しくない光景であり、パフォーマンスのスペースとしては、子供連れで自由に入ることのできる公園などとは全く異なる空間であることは明らかである。映像で見た *Spies R us* には、そのような空間の違いがパフォーマンスに及ぼす影響がよく表れていた。

パフォーマンス・スペース 122 は、劇場としては 100 席足らずと大変小さいスペースのため、サーカス・アモクの屋外の公演で見られるような大掛かりなトランポリンや、竹馬などのアクロバティックなパフォーマンスは見られない。逆に、観客との距離の近さを利用し、映像やスライド、照明を効果的に用いるなどの細かい演出で、ショー全体が構成されていた。また、映像では客席の様子も映し出されたが、観客には子供の姿は見とめられなかった。そのような空間で、リング・マスターのジュニア・ミラーは時おり上着を捨て、自身の乳房を露わにする。それによって「髭を生やした女」という彼女の身体性は、劇場空間の中で強いインパクトを放っていた。しかしこのような演出は、屋外で、子供を多く含んだ観客の前では、決して行われぬ。

以上の例からもわかるように、*Spies R us* は、サーカス・アモクが特定の「場所」と「観客」を限定してパフォーマンスを行っていた当時の様子を知る上で重要な資料映像である。

3.3 Gravity twins

Gravity twins: mysterious forces that bind は、1998 年にニューヨークの劇場キッチン(The Kitchen)において、ジュニア・ミラーが、キャシー・ワイス(Cathy Weis)とのコラボレーションで出演したパフォーマンスを記録した映像資料である。この資料からは、ミラーが「サーカス・アモク」のリング・マスターとは別に、ひとりのパフォーマンス・アーティストとしてどのような活動を、どのような人びとと行っているのかを知ることができる。

Gravity twins では、前述した *Spies R us* と同様、小劇場という空間の閉鎖性を生かし、照明、映像、裸 (nudity) を取り入れたパフォーマンスが行われていた。コミカルなプロットや派手なアクション、観客とのコミュニケーションといったエンターテインメント的な要素の強いサーカス・アモクのパフォーマンスと比べ、*Gravity twins* は実験的で前衛的な要素が強く、断片的で抽象的なイメージや、コンテンポラリー・ダンスのテクニックが多用されていた。共演者であるダンサーのワイスは、振り付けの中にビデオによる身体映像を組み合わせる手法でよく知られており、*Gravity twins* では、ワイスのそのようなテクニックと、ミラーのユニークな身体性が融合されていた。ミラーは、サーカス・アモクの活動と、ソロ・パフォーマーや劇作家としての活動を平行させて現在に至っている。つい最近では、2011 年の 6 月に、ラ・ママ実験劇場において、*Golden Racket* という芝居を製作・上演している。ラ・ママ実験劇場もまた、パフォーマンス・スペース 122 と同様イースト・ヴィレッジに位置し、ニューヨークの前衛パフォーマンスの中心地となっている。サーカス・アモクにおける「みんなのためのパフォーマンス」というミッションとは別に、ミラーはひとりのアーティストとして、ニューヨークの様々なパフォーマンス・アーティストと交流しながら、実験的な演劇スペースにおける活動も続け、特定の観客に向けて政治的な芸術を発信することも続けている。

4. おわりに

以上の 3 点の資料は、NYPL のアーカイブにおいて視聴可能なものである。これらの資料は、サーカス・アモクというグループの今日的な位置付けに関して、これまでの分析では得られなかった貴重な手がかりを、(1)サーカス・アモクのパフォーマンスの基盤となるミラーの政治的立場、(2)過去のパフォーマンス、(3)パフォーマンスの空間と表現方法との関係性、という主に 3 つの観点から与えてくれるものであった。今後は、これらの資料のさらに詳細な分析をすすめ、サーカス・アモクがミッションとする「みんなのためのパフォーマンス」の政治的な意味や意義を理論化したい。博士論文では、アメリカにおける 90 年代のパフォーマンス・アートにおけるパラダイム・シフトをどのように解釈するのかという問題を中心に扱うため、今回の調査に基づくサーカス・アモクの歴史と今日的な位置付けは、論文全体の第 1 章を構成する予定である。また、今回の調査結果の分析から、とくにサーカス・アモクのフェミニズムの政治性に焦点を当てて論文としてまとめ、本学の『ジェンダー研究』に投稿することを予定している。

フェミニズムの政治に根差しながら、「みんな」のコミュニティを創造しようとする試みは、「フェミニズム」が乗り越えなくてはならない人種、エスニシティ、階級、セクシュアリティなどの差異から生じる摩擦や矛盾と呼応している。「みんな」とはどのような人たちなのか。そして、その中に、「わたし」はどのように含まれ、参加していくことが可能なのか。このような問いは私たちひとりひとりにとって重要である。このような問いに「日本」の「女性」という立場から応答していくことで、国際的な女性リーダーの育成につながる成果が期待できるだろう。

注

1. Sussman, 265

参考文献

Sussman, Mark. (1998) "A Queer Circus: Amok in New York" *Radical Street Performance: An International Anthology*. Ed. Jan Cohen-Cruz. London: Routledge. 262-270.

さとう りの／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

パフォーマンス研究において実際の公演の要素を論じることは重要であり、その意味で今回の調査でサーカス・アモクの映像資料を視聴できたことはたいへん有意義であったと考える。加えて PS122 やラ・ママ実験劇場等現地のパフォーマンス空間を検証し「空間」および「観客」といった要素を論じることで、とくにパフォーマンスの政治性をめぐる議論に幅と奥行きをもたせることが期待できる。

いっぽうで 90 年代のパフォーマンスの政治性をめぐる議論はやや大まかであり、時代背景についての議論に再考の余地がある。60 年代（政治の時代）のパフォーマンスの政治性についての議論と、それに続く個人の内面への興味が先行するようなパフォーマンスが模索された時代とされる 70 年代（T. Shank）、レーガノミックスと AIDS 危機に揺れた 80 年代、アイデンティティポリティクスと PC(Political Correctness)が隆盛を極めるのが 90 年代初頭とすると、必ずしも 10 年単位の時代区分でなくてもよいが、時代の流れとパフォーマンスの傾向を今一度整理すると議論がさらに有効に進められるのではないか。

1 週間程度の調査期間で凝縮した調査を行うためには、事前の準備が重要であり今回の準備状況はまずまずであったとの印象を持った。今回の調査結果と映像資料の分析をふまえ、次回にはぜひ渡米前にサーカス・アモクにコンタクトをとり、芸術監督ジェニファー・ミラーにインタビューなどを申し入れるとよい。また、博士論文に掲載するための画像等プレス資料を入手するために広報担当にもコンタクトをとり、将来的には、コピーライトを取得して出版することも視野に入れ、次回に向けてさらに準備を進めるとよい。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科（文化科学系）・戸谷陽子)

学生海外調査研究	
助詞の誤りに対するリキャストとメタ言語フィードバックの認識 —刺激回想インタビューの分析を通して—	
菅生 早千江	国際日本学専攻
期間	2011年9月25日～2011年10月7日
場所	アメリカ ニューヨーク州
施設	ヴァッサー大学

内容報告

1. 背景、研究目的、および意義

外国語を学ぶ学習者の発話の誤りをどのように訂正するかということは、外国語教育に携わる者にとっては日常的な関心事である。同時に、学習者の誤りに対する訂正フィードバックは、言語を習得する上で重要な要因であるインプット、アウトプット、気づき等に関わる研究対象であり、第二言語習得研究の領域で現在活発に議論されているテーマである。

訂正フィードバックを与える方法のうち、学習者の発話の誤りを教師が自然に言い直す手法を「リキャスト」という。リキャストは対象者に対して正用を提示する (**input-providing**) 方法である。一方で、学習者に自己訂正をさせるように (**output-pushing**)、「もう一度言って」など明確化を要求したり、誤り部分を繰り返したり、「動詞は**-te form** ですね」など、メタ言語 (文法用語) を用いる方法もある。どのような誤りに対して、どのフィードバック手法を用いるのが効果的であるかということは、見解の一致を見ておらず、議論が続いている。

日本語を対象とした研究は欧米語を対象とした研究に比べて多くはないが、その中で報告者は、日本語学習者の誤りに対する訂正フィードバック手法と、フィードバックの対象である文法項目の関係について、博士論文のテーマとして研究を続けている。修士論文の一部をまとめた菅生 (2008) では、受益補助動詞 (～てくれる、～てもらう) を対象とし、補助動詞の欠落に対して付加するためにリキャストした時と、助詞の誤りに対してリキャストした時とでは、対象者の反応が異なることから、助詞にリキャストしても対象者が気づかない可能性があるかと報告した。しかし、実際に気づいていなかったのかどうかは検証していない。

この点を検証することを目的として、報告者は 2010 年、本校の「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣プログラム・海外インターンシップ」による研究助成を受け、協定校のヴァッサー大学において、動詞の活用や補助動詞の誤りに対するリキャストと、助詞の誤りに対するリキャストでは認識 (気づいたかどうかに加え、気づいた場合にはどのように受け止めたか) が異なるかどうかを調査した。インタビューコメントの分析を通して、動詞の活用や補助動詞の誤りに対してはリキャストが効果的であるが、助詞にはリキャストで正用を提示したとき、リキャストされたことそのものには気づいても、なぜそれが正しいのか納得しない例が有意に多いことを報告した (菅生, 2010a)。対象者は助詞の誤りにリキャストを受けても、「助詞の使い分けは本当に難しい」とコメントしたり、「私は助詞の使い分けについて～～と理解しているので「に」を使ったが、どうして「に」が誤りで「で」なのか理解できない」と述べたりしたのである。これは、学習者の中で、助詞の選択についてルールが不明確であったり、あるいはルールを不正確に構築しているとき、リキャストで助詞の正用を提示しても文法ルールの再構築につながらない可能性を示している。そうであるなら、助詞の誤りにはメタ言語を用いて文法ルールのヒントを与えるフィードバックのほうが効果的なのではないだろうか。そこで、助詞の誤りに対して 2 つの異なるフィードバック手法 (リキャストおよびメタ言語フィードバック) を受けた時に、学習者がどのように認識するかを目的に、本調査を計画した。

研究課題は以下の通りである。

- 1) 助詞の産出を促すタスクにおいて、リキャストとメタ言語フィードバックとでは、学習者の認識は異なるか。
- 2) リキャストとメタ言語フィードバックの認識は、学習者が現在言語化できるメタ言語知識とど

のように関わるか。

日本語を対象とした訂正フィードバック研究で、対象とする項目によってフィードバック手法の認識が異なることを報告しているのは、現在のところ報告者のみである（菅生 2008,2011a,2011b）。対象項目に対する学習者のメタ言語知識とフィードバック手法の認識がどう関わるかという問いは、新規な観点であり検証すべきであると考えられる。また、欧米語を対象とした研究が中心の第二言語習得研究において、日本語のように類型論的に異なる言語を対象としたときに、どのような結果が得られ、どのような第二言語習得の理論で説明するかは、当該領域全体における価値のある報告となる。以上の点において本調査の意義が認められる。

2. 調査概要

2.1 チュートリアルセッションによるインタビュー調査

2.1.1 参加者

本調査の参加者は中級日本語学習者 11 名である。受け入れていただいたヴァッサー大学で、日本学科担当教員の承認のもと、「話す練習を目的とした 1 対 1 のチュートリアルセッション」実施を周知してボランティアを募集し、協力者を得た。

2.1.2 チュートリアルセッションでの活動

セッションでは、アイスブレイキング（緊張ほぐし）および日本語力のチェックも兼ねた簡単なインタビューの後、2 種類のストーリーナレーションタスクを実施した。ストーリーナレーションタスクの詳細は、次節で述べる。1 つ目のタスクは、対象とした項目のメタ言語知識をみるために行った。2 つ目のタスクの際には、参加者の発話中の誤りに対して、リキャストとメタ言語フィードバックを与えた。セッションは参加者の承認を得て録音・録画を行った。

次に、訂正フィードバックを与えたタスク 2 について、録画ビデオを再生し、それを刺激剤として対象者に「訂正フィードバックを受けた場面で何を考えていたか」を英語で語ってもらう刺激回想法によるインタビューを、Mackey, Gass & McDonough (2000) と同じ方法で実施した。処遇はこまめであるが、最後に、参加者からのタスクの質問に答えたり、学習のアドバイスを行うなど、教育的配慮を示してセッションを終えた。

2.2 ストーリーナレーションタスク

ストーリーナレーションタスクとは、物語を素材とし、10 コマほどの絵に英語および日本語で物語が併記してあるもので、日本語文を音読する中で空欄を補ったり選択肢に答えることをタスクとしたものである。

2 種類のタスクのうち、タスク 1 は、「さるかに合戦」を使用し、絵の中に 10 か所、対象言語項目である助詞について、3 択で適切なものを選ぶ問いを設けた。さらに、個々の設問で回答した直後にどうしてそれが正しいと思ったかを口頭で説明することを求め、そして音読を継続することとした。このタスクは、参加者が対象言語項目の使用について、どのようなメタ言語で理解しているかの手がかりを得るために行った。

タスク 2 は、「舌切すずめ」を使用した。10 コマの絵に英日併記の物語文が書かれており、そのうちの日本語文 34 文について、助詞の部分に空欄を設け、日本語文を音読しながら産出することを求めた。語彙は注を設けた。

タスク 1・2 とも、はじめに絵と英語を用いて参加者にストーリーを理解してもらい、その後、日本語文の音読を行ってもらった。どちらのタスクでも、「明示的な知識」（知っている知識）ではなく、「暗示的な知識」（直観的にアクセスでき使える知識）を用いて行うことを求めるために、「これはストーリーナレーション（読み聞かせ）の練習なので、設問の箇所でも立ち止まらずにできるだけ瞬時に答えて流暢に続けるようにしてください。直観を大切にしてください」という教示を行い、時間をかけて考えないように誘導した。

2.3 対象とする言語項目

タスク 1 および 2 に含めた言語項目は、菅生 (2010a,b) を受け、中級学習者でも誤りやすい用法の助詞とした。「位置詞＋（で）＋活動動詞」、「～を出す、～に出る、～から出る」、「～が入っている、～に入る」、「持ち主受け身の身体の部分を示す「を」」、「複文中の主語を示す「が」」などである。

2.4 リキャストおよびメタ言語フィードバックの操作上の定義

リキャストの長さや与えるタイミングは、リキャストの気づかれやすさに関係があることが指摘され、短く、修正の数が少ないリキャストが気づかれやすいとされる(Egi,2007)。本調査では「誤りの助詞を含む句のみ」の短いリキャストを与えた。

メタ言語フィードバックは、「place marker of the activity verb」のように、文法用語を使って助詞の選択に関わる文法ルールを示した。

34問からなるタスクのうち、前半と後半でフィードバックの手法を変え、1人の対象者に対してリキャストとメタ言語フィードバックの両方を行った。参加者11名のうち、5名はタスクの前半でリキャスト・後半でメタ言語フィードバックを与え、6名はその逆の順番でフィードバックを与えた。

3. 調査結果

本報告書執筆現在、文字起こしやコーディングなどの作業中であるため、結果を量的に示すことができない。そこで、対象とした助詞のうち、「位置詞＋(で)＋活動動詞」の発話例を紹介し、予測される傾向を示す。タスク1、タスク2について述べた後、研究課題に対する結果をまとめる。

3.1 タスク1 (メタ言語知識の言語化) について

「位置詞＋(で)＋活動動詞」の場合、よく指摘されるのは、「テーブルの上に本があります」のように「～の上/下/中/に」という文型を教科書で扱うので、位置詞と助詞「に」を「かたまり」(chunk)として覚えており、「で」が使えないということである。そこで、タスク1では、4箇所を対象者の助詞の選択と学習者に内在したルールを探った。「サルは木の上で柿を食べていた」「カニは木の下で待っていた」「カニはいろいろのそばで休んでいた」、および「屋根の上で臼がサルを待っていた」である。

その結果、「動詞が「食べる」だから助詞は「で」である」というのは正答者が最も多かった。それに対して、「待つ」では、「カニは木の下でがまんよく待っていました」と「屋根の上で臼はサルを待っていました」では正答率が異なった。前者のカニの例では、「actionだから「で」です」というコメントと共に正答を選んでいても、後者の「屋根の上で臼は～」の例では、「に」が選択された割合が高くなった。臼の行動が静的なイメージを与えたからか、同じ対象者が前半を「で」、後半を「に」を選んでいこともあった。

「いろいろのそばで休む」は、この4題の中では一番正答率が低かった。「そばに」をよく聞くからとか「休む」はそこにいるだけだから、という理由で、「食べる」や「待つ」で「で」を選んでいても、ここで「に」を選んでい参加者もいた。

事例として、上述の4題における参加者Vの回答および回答理由の口述(【 】で示す)を紹介する。

- ・「木の上で食べる」：(「で」を選択)。

【I think it's 木の上で、because it's the location he is eating, but I think に could be okay, too. I am not positive.】

- ・「木の下で待つ」：(「に」を選択)。

【Same reason, probably に or で、but に sound better maybe.】

- ・「いろいろのそばで休む」：(「に」を選択)。

【I think そば usually takes に、but I am not positive.】

- ・「屋根の上で待つ」：(「に」を選択)。

【I think うえに is correct because I think うえ usually has に.】

この例を見る限り、参加者Vは4題中1題しか正答しておらず言語化できたメタ言語知識は不確実なものに思われる。この対象者がタスク2においてどうであったかを紹介する。

3.2 タスク2 (リキャスト・メタ言語フィードバックの処遇) について

以下に、「位置詞＋(で)＋活動動詞」のタスクにおける発話例、および刺激回想コメントの事例を記す。参加者Vは、タスク前半でメタ言語フィードバックを、後半でリキャストを受けた。1)はタスク開始後、この項目としてはじめてメタ言語フィードバックを受けた時の発話および刺激回想コメントである。

- 1) 参加者V：すずめは、テーブルの上に遊んでいました。<下線部誤り>

調査者：遊びます is an activity verb so what is the particle marking the place?

<メタ言語フィードバック>

参加者V：すずめは、テーブルの上で遊んでいました。<修正>

- * 刺激回想コメント：In those programs which I used for a while with Japanese, they have a lots of 「テーブルの上に」 sentences, which I hear over and over and over again, so I always think 「テーブルの上に」 without regard for what else will happen in sentences.

参加者Vはさらに3度、この項目で誤りメタ言語フィードバックを受け、1)と同様のコメントをしている。2)は、タスクの後半で、調査者が誤りに対するフィードバックをリキャストに変えてからも、この項目で誤ったところである。

- 2) 参加者 V : おばあさんは、すずめの家の前に、言いました。<下線部誤り>
調査者 : 家の前で、<リキャスト>
参加者 V : 家の前で、言いました。<修正>

* 刺激回想コメント : yeah, so. まえに is something I hear more often than まえで, so…

参加者 V は、このリキャストの際にメタ言語フィードバックと同様、「これまで多く受けていたインプットの影響で間違えてしまった」と、誤りの原因を特定している。参加者 V は、この誤りの後、この項目の最後の問題で、正答している。

タスク 1 において参加者 V が言語化したメタ言語知識のうち、「位置詞 + (で) + 活動動詞」の助詞選択については、4 題中「木の上で食べる」以外は誤っており、不確かであった。そこにメタ言語フィードバックおよびリキャストを受けて文法ルールの再構築を行い、正用の産出に至ったように思われる。

3.3 結果のまとめおよび考察

研究課題 1 の「リキャストとメタ言語フィードバックでは認識が異なるか」について述べる。参加者 V の例では、タスク前半のメタ言語フィードバックでも、後半のリキャストでも、自分が誤った理由を特定しており、2 種のフィードバックの認識の差はないように思われる。他の参加者では、「に」の誤りをタスクの前半ではじめて「で」とリキャストされた時、「どうして？」と返答し、刺激回想コメントでも「で」が正答である理由がわからない」と述べた例もあった。量的に分析すると、場所の「に」と「で」、のような 2 つの項目の使い分けについては、メタ言語フィードバックのほうがリキャストより文法ルールの再構築につながる可能性があるように思われる。

研究課題 2 の「リキャストとメタ言語フィードバックの認識は、学習者が現在言語化できるメタ言語知識とどのように関わるか」については、リキャストを受けた参加者が、自分でルールを発見できるかどうか、という点に、学習者が現在言語化できるメタ言語知識が反映されるように思われる。「位置詞 + (で) + 活動動詞」の例でいえば、位置詞と助詞「に」を「かたまり」(chunk)として定着させている対象者と、3.1 で述べた参加者 V のように「理由は言語化できないが、「で」である可能性も意識している」対象者とでは、リキャストあるいはメタ言語フィードバックを受けた時の認識は異なっているように思われる。

ここでは、「位置詞 + (で) + 活動動詞」の例についてみたが、「～を出る・～に出る」の場合など、他の助詞では傾向が異なるように見受けられる。「～を出る」の場合、タスク 1 で正答できず、また、出発点を表す「を」のルールについて言語化できない参加者が多かった。その場合はタスク 2 でメタ言語フィードバックを受けても、納得したという認識を示した刺激回想コメントは少なかったようである。この項目にリキャストを受けた参加者の中には、刺激回想コメントとして、「「出る」の場所は object と扱うのか」という独自の解釈をしてしまった例もあり、リキャストが効果的に働きかけてはいないようであった。一方で、「～に出る」の場合、タスク 1 で「～に出る」のルールが言語化できない参加者にも、リキャストが効果的に働きかけていたように思われる。これは、目的地や到達地点を表す「に」の用法はよく定着していたこと、文脈によって登場人物の行動の方向性が明らかだったことなどが理由であると思われる。

今後、対象とした助詞それぞれについて、「リキャストおよびメタ言語フィードバックの認識」および「言語化できるメタ言語知識との関係」を量的・質的に分析して示したい。

4. 成果報告計画および報告者の博士論文における本調査の位置

対象者数の少ない小規模のデータであることは考慮しなければならないが、言語化できるメタ言語知識によってフィードバックの認識が異なることが検証できれば、先行研究に照らし興味深い報告である。本調査結果を「言語学会」、「日本語教育国際研究大会・名古屋 2012」で発表するほか、第二言語習得研究のジャーナルにも投稿することで、成果を報告したい。

このたび実施した調査は、昨年の調査から得られた仮説を検証するもので、博士論文を構成する研究の最後の調査である。博士論文は、大きくは 3 つの独立した研究に基づきそれぞれ 1 つずつの章を構成する予定である。対象とする文法の誤りが動詞(補助動詞・活用形)および助詞の場合における効果的な訂正フィードバックの手法について、学習者の明示的知識・暗示的知識との関係、言語化できる文法知識との関係、文法項目の二項対立性、文脈におけるルールの明示性などから論じ、考察する予定である。

5. 謝辞に代えて

本研究はお茶の水女子大学 文部科学省特別経費「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジ

ェクト「学生海外派遣」プログラムによる平成 23 年度「学生海外調査研究」枠での助成を受けて実施した。

本調査は協定校であるヴァッサー大学の理解と協力があっはじめて実施できたものである。今回も昨年同様、**Research Proposal** を事前に提出して学内倫理委員会の審査を受け、許諾を得て実施した。加えて、今回は学科長のご高配により、正式な **Visiting Researcher** として受け入れていただき、様々な便宜を図っていただいた。このことに感謝すると同時に、海外で研究者として調査を遂行することに伴う責任も実感し、身の引き締まる思いで調査にあたった 12 日間であった。同校日本学科のドラージ土屋浩美学科長および教員の皆様にはここに謹んで謝意を表したい。

参考文献

- 菅生早千江(2011a)「中級日本語学習者の助詞と動詞の誤りに対するリキャストの認識－刺激回想インタビューの分析を通して－」『2011 年度日本語教育学会春季大会予稿集, 172-177.
- 菅生早千江(2011b)「複数の誤りを 1 つのリキャストで訂正したときの中級日本語学習者の認識－刺激回想インタビューの分析を通して－」『言語科学会第 13 回年次国際大会予稿集』153-154.
- 菅生早千江(2008)「受益表現の誤用と訂正フィードバックに対する中上級日本語学習者の反応－リキャストと自己訂正を促す介入の比較－」『日本語教育』139, 日本語教育学会, 52-61.
- Egi, T.(2010) Uptake, modified output, and learner perceptions of recasts: Learner responses as language awareness. *The Modern Language Journal*, 94,1-21.
- Egi, T. (2007) Interpreting recasts as linguistic evidence:The role of linguistic target, length, and degree of change. *Studies in Second Language Acquisition*, 29, 511-537.
- Mackey, A., Gass, S. and McDonough, K. (2000) How do learners perceive interactional feedback? *Studies in Second Language Acquisition*, 22, 471-497.

すごう さちえ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 国際日本学専攻

指導教員によるコメント

本報告におけるデータは分析中であり、実証に基づく知見の報告になっているとは言えませんが、サンプル数の少ない小規模データであっても、いくつか興味深い傾向が見られていると思います。

「おばあさんは、すずめの家の前に言いました」のような助詞「に」と「で」の誤りは、第二言語習得研究の領域ではよく研究されている対象ですが、訂正フィードバックの対象とした研究は報告者の一連の研究以外にはありません。リキャストとメタ言語フィードバックでは、メタ言語フィードバックの方が学習者の内在化したルールを再構築するのではないかという報告は、興味深いものです。それが対象者の言語化できるメタ言語的知識のレベルに関わるかどうかという点、加えて、他の用法の助詞における 2 種類のフィードバックの認識はどうであったか、正規の報告を待ちたいと思います。これらについてすみやかに分析を進め、論文として投稿することでこの分野に知見を報告し、博士論文を上梓するべく研究を進めるよう期待します。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・森山新)

学生海外調査研究	
14世紀イングランド宮廷に関する史料調査	
	常木 清夏
	比較社会文化学専攻
期間	2011年10月3日～2011年11月2日
場所	イギリス（オックスフォード、ロンドン）
施設	オックスフォード大学附属ボードリアン図書館、イギリス国立公文書館

内容報告

1. 海外調査研究の必要性及び目的

報告者は、主にジェンダーやセクシュアリティの観点から、中世イングランドにおける人的結合関係を研究している。ある社会集団の中で共有されている道德観念や行動様式を考察することで、その集団の思考様式の一端を明らかにすることができると思う。そこで、14世紀初期のイングランドを対象に、年代記を初めとする当時の叙述史料を分析することで、当時の宮廷内において共有されていた思考様式を明らかにしようと研究を進めている。そこから、その思考様式が政治等いかに影響を与えているかについて考察する。

報告者が研究対象としている14世紀イングランドの国王エドワード二世(Edward II, 1284-1327 在位 1307-1327)の治世では、寵臣が権勢をほしいままにして、政治に混乱をきたしたと言われてきた。また、この問題に関連して、国王の臣下への寵愛が同性愛的なものであったか否かという議論も長らく続けられてきた。実際にエドワード二世が同性愛者だったか否かという議論は、決定的な証拠がないために結論が出せない。それよりも、当時の人々がエドワード二世自身とその周りの宮廷内の人々をどう見ていたのか、またどのように描き出そうとしたのかという点を明らかにすることが重要である。そこから、当時の宮廷における人的結合関係の一端を明らかにし、ひいては当時の政治文化を明らかにすることができる。ジェンダーやセクシュアリティ研究の観点を取り入れることで、新たな側面から政治文化史を研究することが可能だと考えている。

昨年度の『ジェンダー研究』に掲載された拙稿では、年代記の中でエドワードと彼の寵臣ピアズ・ガヴェストン(Piers Gaveston, 1312年没)並びにヒュー・ディスペンサー(Hugh Despenser the younger, 1326年没)との関係がどのように批判されているかを分析した¹。その結果、ガヴェストンとディスペンサーに対して、それぞれ異なる批判の形式が使われていることが明らかになった。ガヴェストンは、国王がホモソーシャルな絆を壊す行動を取る原因として批判された。その一方で、ディスペンサーに対しては、彼と王との間に同性愛関係があると示すような内容で批判されている。

同じ寵臣という扱いにも関わらず、ガヴェストンとディスペンサーで異なる批判の形式が取られているのは何故なのか。この問題について考える際に、まず理解しなくてはならないのは、ディスペンサーをバッシングする際に、セクシュアリティの観点からの批判を持ちだしたエドワード二世妃イザベラの動向である。エドワード二世治世の後半から、イザベラの存在感は非常に増してくる。元々彼女は、彼女が所持する莫大な富の面からも、実家であるフランス王家との関わりの面からも、エドワード二世治世を通じて最も重要な人物の一人であった。その彼女が正面切ってディスペンサーと王に対峙するとはどういう意味を持つのかを再考察する必要がある。王妃イザベラの生涯については、P. C. ドハーティ(P. C. Doherty)が伝記にまとめているが、彼女に関する研究の蓄積という点に関しては未だ不十分であるといえる²。そのために、エドワード二世治世全体を通しての王妃イザベラの動向、また治世末期の動乱における彼女の役割、そしてエドワード二世の次のイングランド国王、エドワード三世の治世における王妃イザベラの姿を丹念に見ていく必要がある。

また、イザベラがフランスから嫁いできた王妃であるというのは見過ごせない重要な事実である。当時のイングランドにおいて、フランスとの関係は非常に重要な外交問題であった。イングランド国王は自らが持つアキテーヌ公としての地位のために、フランス王即位に際して臣従礼を行わなければならなかったのだが、イザベラの父であるフィリップ四世(在位 1285-1314)の死後、ルイ十世、ジャン一世、フィリップ五世といずれのフランス王も治世が短く終わり、シャルル四世(在位 1322-1328)

の代になって、またも臣従礼の問題が顕在化してフランス王家との関係が悪化した。そもそも、この臣従礼の問題は、エドワード二世とイザベラの婚姻の取り決めとともに、アキテーヌ公領領有を巡るイングランド王家とフランス王家の対立に関わるものであった。後に、エドワードとイザベラの子であるエドワード三世（在位 1327-1377）が、これらのアキテーヌ公領や臣従礼の問題を背景としてフランス王位継承権を主張し、イングランドとフランスの間で百年戦争が勃発することからも、エドワード二世治世、特に治世末期におけるフランスとの関係は外交史としても政治史としても極めて重要であると言える。さらに、1324年にイザベラは前述の臣従礼の問題を解決するためにフランスに使節として派遣されるのだが、それ以降反乱軍を率いてイングランドに上陸するまでフランスに留まり続けたことを考慮すると、この時期のイザベラの動向は後のエドワード廃位に向けた準備期間としても極めて重要であったといえる。すなわち、王妃イザベラ及びイングランドとフランスとの関係を理解することが、エドワード二世治世を理解するために、非常に重要であるといえよう。また、イザベラ個人について考える以前に、そもそも中世の王妃がどのような立場であり、どのような役割を担っていたのかについても理解する必要がある。そのために、王妃研究も必須である。

これらの研究の具体的な方法は、まずは様々な二次文献にあたり、次に年代記や国王文書にあたった上で、王妃イザベラの政治動向を分析することである。年代記におけるイザベラの描写を丹念に追うことは、これまでの研究で扱ってきた国王と寵臣との関係に王妃がどう関わってくるのかという点を理解し、年代記が描き出したエドワード二世宮廷の様子を包括的に把握するために必要である。それに加えて、王文書等からイザベラの政治動向を追うことで、そのような年代記の描写が実際のイザベラの行動と合致しているかを確認することが可能になる。年代記に独自の描写がある場合は、何故その描写がわざわざ加えられたのかという点を考察することで、当時の人々が捉えていたイザベラの姿を浮かび上がらせることができる。それは、エドワード二世治世末期の国内騒乱の原因の一端を、新たな側面から示す大きな材料となる。そのためには、日本で入手が困難であるオリジナルの証書や多様な二次文献にあたるのが求められるために、直接イギリスに出向いて調査する必要がある。

2. 調査の概要

2.1 オックスフォード大学附属ボードリアン図書館 (Bodleian Library)

オックスフォード大学ボードリアン図書館はオックスフォード大学に属する学術図書館であり、国立図書館 (British Library) に次ぐイギリス第二の規模を誇っている。昨年に同図書館を訪れた際は新しい閲覧室の建設による工事の影響で、本来の棚から蔵書が移動していたり街外れの書庫に移動していたりと多数の蔵書にアクセスがしづらい状況であったが、今年は新設の閲覧室も既に整備されていて、非常に使いやすくなっていた。これまで、封緘書状録 (close rolls) や開封書状録 (patent rolls) などのカレンダー類及び年代記などが収録されている Rolls Series 等、主に 19 世紀以前に発行された歴史関係の蔵書は Old Bodleian Library の Upper Reading Room に、20 世紀以降のものは Radcliffe Camera の Upper Reading Room に配架されていた。しかし、今年度から前述の二つに加えて、新しい配架場所として Old Bodleian Library と Radcliffe Camera を繋ぐ地下に Gladstone Link という Reading Room ができた。つい最近の研究書も、イギリスやアメリカで出版されたものならほとんどカバーされているようで、調べている内に新たに必要になった蔵書へのアクセスも非常に容易であり、より使いやすい図書館になった。また、資料のコピーシステムも、以前のコピーカードシステムから一新されて、インターネット上でクレジットカードを通じて自分のアカウントに入金するという PCAS システムになった。このシステムは既に昨年導入されていたが、システムの導入に伴ってコピー機も新しくなり、スキャンができるようになったのが非常に有益である。スキャンした原稿を PDF 形式で読み取って、持参した USB メモリに保存したり自分のメールアドレス宛に送付したりできるため、資料をコピーした大量の紙の束を苦勞して日本に持ちかえるという負担が激減した。

今回、ボードリアン図書館では主に二次文献の調査と収集を行ったが、前述の図書館の改装のおかげで、これまで見つけられなかった資料や入手が困難であった資料を多数発見することができた。その中でも、日本で入手することができなかったものに、H. ジョンストンの *Edward of Carnarvon 1284-1307* がある³。これはタイトルに入っている年号の通り、王に即位する前のエドワード二世に焦点を当てた文献であり、即位後の彼に注目した文献が多数を占める中で、生誕から王太子時代までの「カエルナーヴォンのエドワード」と呼ばれた時期のエドワード二世を知るためには必須かつ重要な研究書である⁴。エドワード二世治世初期の寵臣であったとされるピアズ・ガヴェストンは、エドワードが王太子であった時に彼のハウスホールドに加わったことから親交が始まるため、エドワードとガヴェストンの間柄について理解するには、エドワードが国王に即位した後のことを知るだけでは不十分である。また、ガヴェストンはエドワード二世の即位前に、前王のエドワード一世によって国外追放を命じられている。この追放の理由は様々に論じられているが、この研究書によって同時期の

動向についても新たな詳細を知ることができる。

王妃イザベラに関する研究としては、中世の王妃に関する研究書を多数入手できたことに加えて、昨年度入手したオックスフォード大学に提出された博士論文の続きを入手できたことが重要な成果である。王妃イザベラの伝記の著者である P. ドハーティは、オックスフォード大学に博士号取得のための学位論文を提出している⁵。論文の内容は、極めてよくまとまったイザベラの伝記であり、1308年のエドワードとイザベラの婚姻以前からエドワード三世期初頭までのイザベラの動向が、豊富な史料を元に詳細に記載されている。この学術論文が、後に出版されたイザベラの伝記の元になっているのだと思われるが、豊富な史料に裏打ちされて学術的にも信頼がかけるとはいえ、伝記の方は多少一般向けに書き直されている。そのため、こちらの学術論文を同時に参照する方が、より確実で詳細な情報を入手することができる。昨年は、膨大な枚数に記されたこの学術論文から、エドワードの治世序盤の部分及び治世末期の部分の複写を持ち帰った。国王とガヴェストンの関係並びに国王とディスペンサーの関係に、王妃がどのように関わってくるのかを理解することが重要であると考えたからである。その二つの時期を優先して考察した次に必要とされるのが、イザベラがイングランドに輿入れする前の期間とガヴェストンの死後からディスペンサーの台頭までの期間、そしてエドワード二世の廃位後からエドワード三世治世に入ってイザベラが亡くなるまでの期間である。今回持ち帰ったのは、それら残りの部分である。婚姻前の期間に着目することが重要なのは、前章で触れたようにイングランドとフランス間の外交に二人の婚姻が密接に関係するからである。また、エドワード二世治世の中頃は、イングランドがスコットランドとの戦争で大敗し、エドワードと敵対する最有力諸侯であったランカスター伯トマスとの武力衝突で勝利を収めた、政治的に重要な期間である。この間にイザベラが王妃としてどのような役割を果たしていたかを知ることは、中世の王妃像を知るためにも極めて重要なことである。さらに、エドワード二世廃位後の時期のイザベラは、息子であるエドワード三世がまだ若かったこともあって、愛人であったとされるウェールズ辺境伯ロジャー・モーティマとともに宮廷における実質的な権力を握っていた。このことから、時期としてはエドワード三世治世ではあるが、エドワード二世を廃位へと追い込んだ治世末期の動乱の流れがここまで続いていると見ることもできる。それゆえに、エドワード二世治世末から続けて分析する必要がある。以上のことから、今回入手したドハーティの博士論文の三つの期間の部分は、これまでの国王と寵臣の関係を中心に分析する研究を更に発展させて、エドワード二世治世全体の人的結合関係について考察するために必要不可欠な資料であるといえよう。

2.2 イギリス国立公文書館 (The National Archives)

今回の調査で最も重要な目的は、イギリス国立公文書館で王文書の現物を確認することとチャーター・ロール（王が発給した証書が記録された台帳）の複写を入手することである。どちらも日本で行うことはできないにも関わらず、不可欠な研究である。

王の証書の発給記録は王側の台帳に残されるものの、証書の現物は受領者に渡される。そのため、現在ではほとんどの証書は散逸したり紛失したりしてしまっている。しかし、イギリス国立公文書館に所蔵されている資料の内、資料番号 DL (Duchy of Lancaster) から始まるランカスター公領に関係する文書群の中にランカスター公やその前の権利保有者たち（エドワード二世治世においてはまだ公領ではなく伯領であったためランカスター伯）に関係する証書の現物が多数残されている。中には書状に印璽が付されているものも残っており、当時の書状がどのような形態で発給されていたのかを自分の目で確認することができる。

尚書部 (Chancery) が記録・保管したものには、封緘書状録や開封書状録、チャーター・ロール (Charter Rolls) などがある。封緘書状 (letter close) は、羊皮紙の文書を折り畳んだ後、その下部の紐上に切ったもので結び、それに蠟の印璽を付して封緘したものである⁶。その形式から、行政内の通達など機密性の高い文書に使用された。一方、開封書状 (letter patent) は、そのように封緘する必要のない内容、特権授与などむしろ広く告知されるべき内容を認めた文書である。今回は、資料番号 DL10 に所蔵されている書状の内、自分の研究に関連する開封書状を数点確認することができた。一番上の行には飾り文字が使われており、紙の下部には紐上の羊皮紙が通されてそれに蠟の印璽が付されていた。印璽の様子は玉座に座る王の姿が描かれており、その反対面には騎馬姿の王が描かれていた。これらの開封書状は貴重史料の保管庫から取り寄せて確認したものであるが、公文書館の一階の展示スペースには所蔵されている史料の性質や特徴がわかりやすく解説されており、それらも史料理解の一助となった。印璽の紹介や王の証書がどのように発給されるかの説明、羊皮紙の作成方法などが見やすくまとめられており、現物を確認しながら理解することができるので、研究書に書かれた説明を読むだけではない、より具体的な理解が可能であった。

チャーター・ロールの複写は前回よりも多くの部分を持ち帰ることができた。今回入手した複写は主として治世初期の頃のもので、ガヴェストンに対するコーンウォール伯領の授与に関する問題など

の分析に使用できると考えている。1307年にエドワード二世は、過去一世紀来親王領であったコーンウォール伯領をガヴェストンに与えた。多数の諸侯の同意を得ての授与ではあったが、年代記 *Vita Edwardi Secundi* は、このコーンウォール伯領の授与が諸侯のガヴェストンに対する怒りの原因の一つとなったと示している⁷。*Vita*はこの問題をガヴェストンに否定的な論調で述べているが、実際のところチャーターにはどう記載されているかを明らかにすることで、*Vita*が述べている内容がどこまで史実に沿っているかを確認し、年代記の独自性について考察することが可能である。

チャーターは、記載されている内容の確認そのものも重要であるが、チャーターに書かれている証人リストを使って、年代記に書かれている情報が正しいかどうか確認するためにも利用できる。チャーターには、王と共に移動中の宮廷が滞在している場所が発給地として書き込まれており、その際、王に供していた主だった臣下たちが証人として名を連ねるのが普通である。その情報を利用して、年代記の記載と史実とで異なっている箇所を明らかにすることができる。これらの証人名は、チャーター・ロールの内容をまとめた刊本であるカレンダーにも記載されていないので、現物を確認するしかなかったのだが、今回は公文書館内に設置されている *List and Index Society* 発行のエドワード二世のチャーターにおける全ての証人リストが記載された出版物を入手することができた⁸。これを使用することで、証人の確認のためだけに全てのチャーターを自力で確認する必要がなくなり、自身の研究に必要な部分のチャーターに注力することができるようになった。

3. 今後の研究計画、展望

今回の海外調査では、多数の二次文献と王の証書等の王文書の複写を入手することができた。これらの史料を用いることで、これまでよりも多角的にエドワード二世治世における人的結合関係についての考察を深めることができる。今後は、二つの軸から研究を進めていきたいと考えている。第一の軸は、第一章で述べたように、王妃イザベラという軸である。当時の王妃の役割や王族・貴族の結婚観、また宮廷内におけるジェンダー規範をより明確にするために、イザベラが政治的な言説においてどのように描写されたのかを分析する。W. M. オムロッドは2006年に発表された論文の中で、エドワード二世治世末期からエドワード三世期にかけて政治的な言説におけるイザベラのイメージが変化させられたと述べているが、同時代の年代記においても彼が指摘したと同様の変化が見られるかを確認したい⁹。また、オムロッドが述べるように、エドワード三世期にイザベラのイメージが変化させられたのが宮廷内のジェンダー規範を正常化させるためであったとしたら、エドワード二世治世末期以前の「正常な」王妃像であったイザベラの姿も明らかにする必要がある。その点も踏まえて、年代記分析を進めたい。

第二の軸は、ガヴェストンとディスペンサーに関して拙稿で明らかにしたことが、他の同時代の年代記や王文書とどう関連するかを示すことである。拙稿では、年代記 *Vita Edwardi Secundi* を中心に国王と寵臣の関係を考察したが、他の同時代の年代記においても *Vita* と同様のスタンスが見られるかを確認することが必要である。また、年代記の独自性を明らかにするために、証書等の王文書から導きだされる史実との相違点についても考察していきたい。以上の二つの軸から研究を進め、第一の軸に関する考察は、2012年度の中世学会において口頭報告を行いたいと考えている。また、それを基に投稿論文を執筆する予定である。

ジェンダー・セクシュアリティ研究を用いることで、これまでとは異なる観点から既存の研究を見直すことは画期的な手法であり、イギリスやアメリカにおいてもこの手法を積極的に取り入れている研究者は多い。国際的なトレンドであるともいえるが、日本における西洋中世史研究においてはまだ数が多くないように見受けられる。今回の海外調査によって得られた成果によって、日本の西洋中世史、特に政治史の流れに、新たな観点を用いることの有用性を僅かながらも示すことができるならば、今年度の海外調査のテーマである「国際的な女性リーダーの育成」に多少なりとも貢献できるのではないかと考えている。

注

1. 常木清夏、「エドワード二世宮廷における男同士の絆——*Vita Edwardi Secundi* を中心に——」、『ジェンダー研究』、国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究センター、第14号、71-82頁、2011年。
2. P. C. Doherty, *Isabella and the Strange Death of Edward II* (London, 2003).
3. H. Johnstone, *Edward of Carnarvon 1284-1307* (Manchester, 1946).
4. 1284年に北ウェールズにあるカエルナーヴォン (Carnarvon) 城で誕生したために、エドワード二世は「カエルナーヴォンのエドワード」と呼ばれた。
5. P. C. Doherty, 'Isabella, Queen of England, 1296-1330' (D.Phil., Oxford, 1977).

6. 王の証書や令状に関する説明は、エドモンド・キング著、吉武憲司監訳、『中世のイギリス』385頁、15項。を参考にした。
7. W. R. Childs (ed.), *Vita Edwardi Secundi: The Life of Edward the Second* (New York, 2005), pp. 28-29.
8. J. S. Hamilton, *The Royal Charter Witness Lists of Edward II (1307-1326) : from the Charter Rolls in the Public Record Office, List and Index Society 288* (Kew, 2001).
9. W. M. Ormrod, "The Sexualities of Edward II" In G. Dodd and A. Musson eds. *The Reign of Edward II: New Perspectives*. Woodbridge: York Medieval Press, 2006, pp. 22-47.

つねき さやか／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

常木清夏さんは、14世紀イングランド政治文化史に関する博士論文を執筆中です。もともとイングランド中世後期史研究はわが国では比較的未開拓な分野といえますが、特に14世紀の研究者は少なく、欧米の膨大な研究蓄積を十分に消化しつつも政治文化とジェンダーという視座にたって新しい知見を切り開く博士論文の完成が望まれます。これまでに常木さんは、イングランド国王エドワード2世の宮廷における政治文化を、国王のホモセクシュアリティをめぐる言説を手がかりに明らかにした論文を発表しました。その結果宮廷における政治的求心力の核としての王妃についても研究が必要であるという結論に至りました。そこで当時の政治文化の特質を明らかにするために、エドワード2世宮廷における王妃イザベラの行動を、ジェンダーの視点から読み解いていくことを、本調査の目的のひとつと定めています。今回の海外調査で持ち帰った史料により、この面でも常木さんの研究が大いに進捗することを期待しています。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・新井由紀夫)

学生海外調査研究	
中国唐代の獄官令に関する史料収集及び現地調査 — 京域及び陵墓の視点を中心として	
	永井 瑞枝
	比較社会文化学専攻
期間	2011年9月2日～2011年9月13日
場所	中国（西安、洛陽、北京）
施設	大明宮国家遺址公園、陝西歴史博物館、西安博物院、咸陽博物館、乾陵、乾陵博物館、昭陵博物館、漢陽陵博物館、洛陽博物館、洛陽古代芸術博物館、隋唐洛陽城定鼎門遺跡博物館、中国社会科学院、中国国家歴史博物館、首都博物館、故宮博物院

内容報告

1. 研究状況と海外調査研究の必要性

報告者は現在、日本の獄令について研究を行っている。獄令とは、古代国家の統治方針を定めた法典である律令の中の一編目であり、罪を犯した者に対する罪状審議や、刑罰の確定、執行といった、一連の断罪過程の手法について規定したものである。いわば獄令は、如何にして犯罪に対する処罰を通して、国家の秩序を構築及び維持しようとしたか、その方針を定めた法であると言えよう。しかしながら、日本の断罪制度については、平安時代に律令の規定とは別に設けられた、検非違使による断罪のあり方に関する研究を中心に、これまで先行研究が多く積み重ねられている分野であるが、一方でこの獄令という編目に対する評価は消極的であるという実状がある。

そこで、報告者はこの日本古代史における獄令の歴史的な位置づけを考察する目的のもと、修士論文の作成にあたって、この獄令について、主に中国の唐令との比較を通してその特質を明らかにすることを試みた。日本の律令は唐令を継受して編纂されたものであるため、獄令もまたその母法となった唐の獄官令と比較することにより、日本がどのような断罪制度の方針を想定して、実際に施行しようとしたかという点を考察した。なおその比較検討を行う際、現在既に散逸している唐令の様相を伺い知るための史料として、宋代に編纂された天聖令をその内の一つに加えて検討を行った。その検討の結果として次のことが明らかとなった。すなわち、日本では獄令を編纂する段階で、唐の獄官令の条文構成といった、基本的な断罪過程は忠実に把握していた一方で、「獄官」といったそもそもの断罪過程を支える専当官の存在に対する理解や、枷などの拘束具などの刑具及び刑罰の扱い、さらには王権の中核である京域内での断罪制度について、唐のものを改変した上で、日本独自の断罪状況を想定して、獄令の関連条文が編纂されていた。

こうした結果を受けて次に考察するべきは、こうした日唐の条文の間に観られる改変の跡が何を意味するかという点である。それを考察するにあたっては、そもそも唐の獄官令が編纂された前提状況、つまり中国における断罪制度についても理解を深めることが必須である。何故ならば、唐で獄官令が編纂するより以前から、中国では晋令からの歴代王朝で獄官令は存在しており、また罪人に施す刑罰に至っては、唐代の制度に至るまでのより長い変遷があるため、唐を始めとした歴代中国王朝の断罪制度の理解をなくしては、唐の獄官令に対する正しい評価を下せないからである。そこで唐の獄官令の理解を深めるといふ目的のもと、実際に現地の中国へ赴き、特に遺物を主とした史料収集を行う必要があると感じた。

そのため、今回は西安、洛陽といった、唐代の西都長安そして東都洛陽が置かれた地域と、現在の首都である北京を対象として調査を行うこととした。なおその調査の際には、特に報告者は、都が置かれた「京域」という空間と、「陵墓」という皇帝陵に関する遺物を中心としてその収集を試みた。この二つを今回の調査の視点としたのは以下のような理由からである。まず「京域」については、獄官令のいう断罪処理では、それが行われる地点が在京であるか否かという点について、その区別が明確になされている。このことから、在京すなわち京域が断罪制度といった場面で、どのような役割を果たす空間として機能していたかという点を明らかにするべきと考え、着眼点の一つとして設定した。また「陵墓」については、中国の秦漢代の陵墓で、労役刑を課された罪人が、陵墓の造営に使役され、陵墓付近に埋葬されたという事例がある。そのため、そうした秦漢代における労役囚のあり方が、後

の唐代における労役刑である徒役にどのような影響を及ぼしたのか、その点について明らかにする必要があることから、もう一つの着眼点とした。さらに今回の調査にあたっては、史料収集だけでなく、北京では中国社会科学院という専門機関への訪問も予定した。この中国社会科学院では、報告者が修士論文の作成の折りに、唐令に関する重要史料として取り上げた天聖令について、その発見から現在まで継続して研究が行われている。そのためその天聖令研究について、その手法や情報を学ぶことを目的として、今回訪問を試みた次第である。

それでは次項で、その調査の内容と成果について各調査地域に分けて述べていきたい。

2. 調査内容

2.1 西安における調査研究

2.1.1 大明宮国家遺址公園

大明宮とは、唐の都長安城の北東に建設された宮殿であり、皇帝の居所としての機能を持った空間である。この遺址公園では、宮殿の正南門である丹鳳門を始めとして、その宮殿内の建物が復原されているほか、出土遺物などの展示が行われている。

この内、復原された丹鳳門の見学では、門道が五本ありその巨大な規格に驚かされたが、さらに復原された門の中に設けられた博物館内では、保存された門の遺構を見学できた、その問道の数に加えて一つ当たりの道の広さにも衝撃を受けた。特にこの丹鳳門については、通用門としてのみではなく、この場で大赦が行われていたことから、大赦を行う舞台としての機能を有していたことが分かっている。こうした機能は特に玄宗期以降に顕著に見えるようになる。この大赦という儀礼については、唐の獄官令で、行う時には囚人を集めて、彼らに口頭で赦を宣告するという手続きが規定されたと考えられている¹。このことから、大赦を行うという行為は、まさに皇帝の徳を知らしめる機会であり、それを行う場として、十分な高さと同規模を持つ丹鳳門が絶好の舞台装置として、玄宗期以降に利用されるようになったと言える。玄宗期は、丹鳳門以外の門楼においても、臣下に対する賜宴や軍事儀礼が行われるようになったことが先行研究で指摘されているが²、こうした時期に皇帝権力を誇示する場の一つとして、特に丹鳳門は主として大赦の開催場として利用された空間だったのである。

一方で日本では、大宝元年にこうした大赦儀礼を行うことを停止する措置が取られており³、実際に日本の養老獄令では、こうした舞台装置を用いての大赦の規定は削除されている。このことから日本と唐との間に、大赦を行う際の宮城の空間利用に対する認識に差異があったと考えられ、この点については、日唐の京城の違いを踏まえた上で、今後検討する余地がある。

この他、宮城内では、政変の起こる舞台となった玄武門や皇帝が日常の政務を掌る宣政殿、朝会を行う場である含元殿などの復原を見学することができたほか、大明宮全体を十五分の一に縮小した復原模型を観ることで、宮城全体の概観を立体的に把握することができた。

2.1.2 陝西歴史博物館

陝西歴史博物館は、史前から清代に至るまでの時代に渡る、西安関連遺物が多数展示されていた博物館である。遺物として唐三彩や陶俑などが多数陳列されていたが、その中には唐代私第の建築模型の三彩も展示されており、私第のあり方を伺い知る材料を得ることができた。それを見ると、瓦葺きの屋根の建物であるほか、大門が設けられていたこと、またその建築構造が非常に複雑であったことが分かった。唐の宮繕令では、こうした建築構造に対してその規格に制限を設けていたと考えられるが、日本ではそうした制限は設けられていない⁴。それは両者の私第の建築構造の違いがあることに由来するものであろうと考えられ、宮城域だけでなく、私第についても両者の間には規模の差があったと分かった。

2.1.3 西安博物院

西安博物院は、陝西歴史博物館と同様に西安市内に存在する博物館であるが、展示室の中心に唐の長安城の復原模型を設置して、周囲に西安関連の遺物が陳列されている。そのため、復原模型を通じて唐の長安城の全体を鳥瞰図として把握することができた。そのため、先ほど大明宮遺跡での丹鳳門の高さとその機能について触れたが、京城内では、基本的に寺院の塔を除いて、高さのある建物が確認できないことが分かった。こうした高さのある建物の建築については、宮繕令に私第での楼閣建築を禁止する規定が設けられていたことが、天聖令により明らかになっている⁵。一方で大明宮遺跡の見学によって、宮城内には望仙台という高さのある楼閣が設けられており、その高さは麟徳殿や含元殿を凌ぐほどのものであったことが明らかとなった。このことから、前述の私第への規制と同様に、建物の高さに関する規制を通して、より一層宮城という舞台装置を誇示するための京城空間が人工的に作られていたと考えられる。

2.1.4 咸陽博物館

咸陽は、秦代に都が置かれた地域であり、この博物館では秦漢代の遺物を中心とした展示が行われ

ている。中でも前漢兵馬俑館という展示では、有名な秦始皇帝陵より小規模であるが、出土した兵馬俑を見ることができた。秦始皇帝陵は今回調査先としては行くことができなかったが、この博物館の見学により、秦代から継続した兵馬俑を持つ、漢代の墓域のあり方について理解を深めることができた。漢代の兵馬俑もまた騎馬や武具を持つ様子を伺うことができ、後述する「刑徒墓区」の存在と併せて、皇帝の墓というものが中国の歴代王朝でどのような空間として捉えられていたか、今回調査した唐代の陵墓の概観と併せて今後検討を深めていきたい。

2.1.5 乾陵、乾陵博物館

乾陵は唐の第三代皇帝高宗と、則天武後の合奏陵である。乾陵は陵墓へつながる神道の両側に人馬像が荘厳に並べられており、陵墓域の中心として整備されたことが分かる。また陵墓の南門手前には石像の六十一蕃臣があり、彼らの頭部は破壊されていたが、唐代の服飾の様相を知ることができた。天候不順により、調査時には南門より北に見ることできる陵体を見ることが叶わなかったが、その陵体へと連なる陵墓域の一部を見ることができ、その整備に対する規模の大きさを体感することができた。また乾陵博物館では、乾陵の陪葬墓の一つである永泰公主墓の中を見学することができ、陪葬墓と雖も、その内部全体に渡り唐代の官人が描かれた壁画や、女官の絵柄が施された石椁の外壁などが確認できるなど、当時の墓域に対する整備の重要性が明らかとなった。

2.1.6 昭陵博物館

昭陵は唐の第二代皇帝太宗の陵墓である。この昭陵自体は見学することができなかったが、その出土遺物や石碑を見るため、今回昭陵博物館を訪れた。出土遺物の中では、壁画なども展示されており、乾陵と同様に唐代の官人及び女性などが描かれていたが、中には舞や琵琶などの楽器を演奏する様を描いたものもあった。こうした壁画の内容や、また他の施設で確認することができた陶俑などの墓域からの出土品の姿を見ることによって、墓域の中で官人らの日常のあり方が表現されていたことを感じることができた。

2.1.7 漢陽陵博物館

漢陽陵博物館は、前漢第四代皇帝景帝の陵墓及びその遺物を展示した博物館である。

ここに展示された遺物の中で注目すべきが、陽陵の陵墓域と 1.5 キロメートルほど離れた場所にある刑徒墓区から出土した枷である。このような陵墓に付随した刑徒墓区の存在は、秦の始皇帝陵や後述する洛陽の後漢代のものが知られるが、しかしながら囚人の拘束具である枷が出土した例は珍しく、今回の陽陵博物館で実物を確認することができたことは厚遇であった。展示されていた枷は、足枷である鈇と首枷である鉗の二種類である。どちらも鉄製であり、錆びはあるものの、枷としての形態を鮮明に残している。こうした拘束具の着用については、唐の獄官令では労役刑につく場合に鉗を用いることが規定されているほか⁶、これらの規格の基準も明確に設けられている⁷。ただ、鉗の重さが八両以上一斤以下とあるように、漢代の鉄製のものと比べると非常に軽量化されている。そのため唐の鉗は鉄製ではなく「枷」の字が木偏で表されるように、木製であったと考えられる。そもそも刑徒墓区に拘束具を着用させたまま埋葬していることから、漢代の鉄資源の豊富な状況が伺える。しかし唐代の規格規定からは、当時の鉄をめぐる状況には変化が生じていたと思われる。大明宮遺跡では鉄釘の出土を確認したが、こうした刑具に関する鉄資源は窮乏していたのかもしれない。

2.2 洛陽における調査研究

今回洛陽での調査にあたっては、洛陽理工学院の日本語学科に在学されている班閃閃さん、孫李華さんの両名の方からの助力を得た。お二人とご紹介して頂いた宇都宮美生先生には、この場をお借りして御礼申し上げます。

2.2.1 洛陽博物館

今回訪れた洛陽博物館は二〇〇九年に開館された新館であり、後述する北京の国家博物館や首都博物館に匹敵するほどの建物規模を持った博物館であった。新館であるが故か、博物館では珍しく入館の際に荷物検査も行われた。博物館内では、史前から始まり宋代までの、洛陽に都が置かれた時代全域を網羅した展示が行われている。

その展示物の中で、今回は後漢の洛陽城南郊の刑徒墓区から出土した磚の実物をみるることができた。この磚には、刑徒墓区に埋葬された罪人の氏名、死亡年月日、刑罰名などが書かれているため、当時の労役刑のあり方を示す貴重な史料として注目されてきたものである。実物はまさに建築に用いられる磚の断片であることが分かり、建築時で不用になったものを再利用したことを物語る。こうした磚が罪人とともに埋められた事は非常に興味深い。唐の獄官令によれば、罪人の死亡時にはその埋葬地の上に姓名を書いたものを立てることになっているが⁸、この磚は土中に埋められたものであり、獄官令のいうそれとは性格が異なる。陽陵の罪人が拘束具を着用したまま埋葬されていたことを併せて考えると、彼らは死後もまた罪人として使役される者として、刑徒墓区にこのような磚や拘束具を持ったまま埋葬されたと推測される。それは陵墓や労役刑の性格を考える上で重要な点と思われ、今後も

検討を深めていきたい。

ところで、こうした充実した遺物を持ちながら、当博物館では図録が発刊されていなかったため、これら遺物の情報を紙媒体として入手できなかったのが心残りであった。早期の発刊を切に望むところである。

2.2.2 洛陽古代芸術博物館（旧古墓博物館）

この博物館は旧名が示す通り、洛陽周辺から発掘された墓葬を集めた博物館であり、地下にはその墓葬の内部が移築展示されている。長期に渡り洛陽に都が置かれたことから、その周辺の陵墓の数も多く、この博物館に展示されていた墓葬空間も、様々な種類があり非常に見応えのあるものであった。特に墓葬内部の壁画や石刻画などが見学できたほか、また副葬品の遺物も同様に並べて展示されていた。中には鎮墓獣といった陶俑も置かれていた。鎮墓獣は唐の陵墓の壁画にも描かれていることから、日本とは異なる副葬品の姿を見ることができた。

2.2.3 隋唐洛陽城定鼎門遺址博物館

この博物館には、洛陽が東都として置かれた時代、その京城の正門にあたる門であった定鼎門の遺構が保存されている。門の一階部分で保存された遺構を見学することができる他、二階部分では洛陽城の模型があり、当時の東都洛陽城の様相を立体的に確認することができた。

中でも興味深かったのはこの門から発見された駱駝の足跡である。洛陽以外の博物館でも駱駝に乗った胡人の陶俑を多く見ることができたが、こうした交流が実際に洛陽でもあったことを実際に感じられる史料であった。こうしたことから、唐代の流通を考える上での起点としての洛陽城の重要性を考えるに至った。刑罰に関して言えば、流刑を行う際に起点からの配置距離を想定するようになったのは、洛陽を併せた複都制を採用した北周の制からであり、それは二つの都という中心点から周縁への流通路に沿った制度と考えられる。今回の洛陽の訪問によって、こうした流刑についても多くの考えるべき視点を得たので、今後の研究に活用したい。

2.3 北京における調査研究

2.3.1 中国社会科学院

中国社会科学院では、天聖令の研究会に参加させて頂くことができた。今回の研究会では倉庫令の条文を対象としたものであり、今回報告者らの参加を勧めてくださった黄正建氏を始め、中国社会科学院にて天聖令研究を行っている、多くの研究者及び学生の方々と交えて、演習及び活発な討論が行われた。日本の天聖令に関する研究会では、天聖令という宋令から如何に唐令を復原するかという点に特に焦点が当てられているが、今回は宋令ではなく不行唐令を対象にして、その唐令としての条文内容から唐制を明らかにすることに注目して論議が行われていた。

また今回の訪問によって、当機関で獄官令を研究されている方が男性でお二人もいることを知った。日本では獄官令を辻正博氏が詳細に研究されているが、やはり獄令含めて研究が盛んとは言い難い状況である。中国でのこうした研究状況を聞いたことを契機として、報告者も自身の研究を推し進め、また今後お二方のご意見を伺えることを望む次第である。今回の調査研究には、単に学術的な調査というだけでなく、国際的な女性リーダーの育成という目的も含まれている。まさに今回の調査研究による中国での刺激を受けて、国際的な学術交流を行える研究者となるべく研究に精進したいと思うに至った。

2.3.2 中国国家博物館

この博物館はその名の示す通り、中国各地から出土した史前から現代に至るまでの遺物が展示されており、その数は国家博物館という名に相応しい規模であった。そのためここでは多くの史料情報を得ることができたが、全てを述べるには紙幅が足りないため、春について報告したい。

春は唐代の女性がつく労役刑として獄官令に規定されていたと推測されている行為であるが⁹、この春を行っている後漢代の女性の陶俑を確認することができた。こうした春を行う女性像は唐代の絵画にも見えることから、春が女性の基本労働の一つとして見なされていたことが分かる。前述の刑徒墓区のあり方から分かるように、漢代の労役囚は多くが男性で、彼らは陵墓の土木事業に従事していたが、獄官令でも男性は土木事業の労役につくと規定されている¹⁰。こうした点から、唐代の獄官令という労役刑と漢代の労役刑との関係性をより強く考える必要性を感じるに至った。

2.3.3 首都博物館

首都博物館は現在の首都である北京から出土した遺物を中心に展示した博物館であるが、唐代以前の遺物も展示されており、石で作られた二重楼閣を持つ建物を模した遺物もあった。このことから本来、中国では楼閣などの高層の建物を持つことが別段珍しくなかったと考えられる。むしろそのために、人工的に造られた京城内では、建物の規格を規定する必要があったと推測される。

また、この博物館内の書籍販売は非常にその種類が充実しており、北京だけでなく西安の一部の博物館の図録や洛陽の考古遺物の報告書なども入手できたことは幸いであった。

2.3.4 故宮博物院

故宮博物院は明清時代の皇帝の居城とされた場所である。しかし、門の楼閣など唐の大明宮などに見られる宮城の要素を受け継いでいる建築構造を確認することができた。また大和殿などの建物の多くに日時計が置かれており、古代の王朝と同様に、時間に対する支配というものが王権の権力を表す一つの指標とされていることが分かる。また、故宮博物院の敷地内にて開催されていた、中国古代司法実物展を見学したが、故宮博物院公式の展示であるかという問題があるため、ここでその詳細を述べることは避けたい。

なお、今回の調査にあたってはこれまで御名前を挙げた方以外に、多くの方々からあらゆる面で助力を頂き、そのおかげで今回の調査を大変充実したものにする事ができた。改めて御礼申し上げる。

3. 今後の展望

今回実際に現地で遺跡や遺物を確認したことにより、獄官令に関する参考史料の数々を入手することができ、その結果獄官令の条文内容について考える上での示唆を多く得ることができた。

現在報告者は修士論文の一部を改稿して、これまで先行研究で問題とされてきた獄令と、同じく律令の一篇目である公式令に見える断罪制度関係の条文の関係性について考察を行っており、しかるべき学術雑誌への投稿を予定している。その中で報告者はこの獄令と公式令の関係性から、古代日本では日本独自の断罪権の確立を図っていたと推測しており、それによって京域内の行政を掌る京職の断罪権が国司よりも低下していたという論を展開している。こうした京職の権限の背景には、日本独自の京域空間の捉え方が影響していると考えられるが、それが今回の調査によって明らかとなった唐の京域の空間利用とはどのような面で異なるのか、獄令及び獄官令に見える「在京」すなわち京域に関する条文について改めて検討を加え、現在の研究を更に深化させていきたい。

また修士論文では徒刑や流刑についての獄令条文を取り上げたが、日唐間の違いを確認した一方で、その背景について考察を深めるには至らなかった。しかし、今回史料収集を行ったことによって、それらの刑罰に関する検討材料を手に入れることができた。そのため、今後は歴代王朝の刑罰の変遷を理解した上で、唐代の徒流刑の刑罰の規定及び実態を考察し、日本との差異の背景について掘り下げたい。

そのほか、日唐の律令比較研究を行っている研究会においても、引き続き獄令及び獄官令の比較研究の報告を行いたいと考えている。そして最終的に博士論文として、徒流などの刑罰形態も含めて、獄令及び獄官令のいう断罪過程の概観を明らかにしていきたいと考えている。

注

1. 雷開「唐開元獄官令復原研究」『天一閣藏明鈔本天聖令校証』下冊 中華書局 2006年
2. 穴沢彰子「唐代皇帝生誕節の場についての一考察」『都市文化研究』3号 2004年
3. 『続日本紀』大宝元年十一月乙酉条
4. 牛来穎「天聖當繕令復原唐令研究」『天一閣藏明鈔本天聖令校証』下冊 中華書局 2006年、養老當繕令3私第宅条
5. 牛氏前掲論文
6. 『宋刑統』名例律卷三
7. 『宋刑統』断獄律卷二十九
8. 天聖獄官令不行唐令四条
9. 雷氏前掲論文
10. 『宋刑統』名例律卷三

ながい みづえ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

永井瑞枝さんの修士論文は、近年中国で発見され唐令を含むことでも注目されている北宋の天聖令を新しい史料として、犯罪に関する日本の獄令と唐の獄官令を比較することによって、日本古代の国家や社会の特質を明らかにした優れた論文であった。

今回の海外調査研究では、唐獄官令について京域と陵墓の視点から関係史料を蒐集し、現地調査を行うことができた。京域についての現地調査によって、大赦儀礼が行われた丹鳳門など京域の空間利用や、乾陵や昭陵など唐の皇帝陵と京域との位置関係を立体的に把握し、日本との違いを明らかにし

たことは、日本の都城を掌握する行政組織である京職の断罪権の特殊性とも関連しており、今後研究の深化が期待できる。また、長安と洛陽の陵墓周辺に存在する陵墓造営に使役された刑徒が葬られた刑徒墓区についての資料を収集したことは、獄官令の研究を実態的に進めて行く上での重要な手がかりとなるだろう。

さらに、北京の中国社会科学院歴史研究所を訪問し、天聖令刊本を編纂した研究者たちと交流して天聖令に関する最新の研究成果を入手し、研究ネットワークを築くことができたことは、今後、唐の獄官令と日本の獄令の比較研究を発展させて博士論文を作成していく上で何よりの成果であったと言えることができる。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・古瀬奈津子)

学生海外調査研究		
シャンゼリゼ・バレエ団に関する文献収集、映像確認		
	深澤 南土実	比較社会文化学専攻
期間	2011年9月19日～2011年9月30日	
場所	フランス	
施設	パリ・オペラ座附属図書館、シネマテーク・ド・ラ・ダンス	

内容報告

1. 調査の目的

本調査の目的は、シャンゼリゼ・バレエ団の発表作品や動向を当時のプログラムや新聞・雑誌の批評や評価、関連する文献・映像資料の収集と閲覧をすることであった。これらの調査は、筆者の博士論文執筆において必須、かつ大変重要な調査である。

第2次大戦直後のフランスのネオ・クラシックダンス（モダン・バレエ）の中心は、シャンゼリゼ・バレエ団 *Les Ballets des Champs-Élysées* (1945-1951) であった。同バレエ団は戦後のフランスを代表するバレエ団でありローラン・プティの原点であるが、ほぼ研究されてこなかった。

ローラン・プティにとって最初のバレエ団でもあるシャンゼリゼ・バレエ団は、若手バレエ・ダンサーと一流の芸術家達が革新的な振付、そして人間味を持つ作品を次々に創作し発表した。今回の調査は特に同バレエ団誕生の契機と初期の活動をプティの振付作品に注目し、考察するために必須のことであった。

特に、筆者はバレエ団結成の契機となり、後にバレエ団の代表的作品であり続け、現在でも再演され続けているプティの振付作品《旅芸人》 *Les Forains*、《ランデブー》 *Le Rendez-vous* を中心に調査をすることとした。

貴重な一次資料であるバレエ団の日誌やプログラム、そして映像を閲覧することは、明らかにされていない同バレエ団の全貌、実態や発表作品を把握出来ると考えられる。以上の資料は日本国内のみならず、インターネット上でも閲覧不可能な貴重な資料である。パリ・オペラ座附属図書館、またシネマテーク・ド・ラ・ダンスでしか所有していない資料も多い。日本にバレエシャンゼリゼ・バレエ団の資料はほとんど存在せず、フランスに足を運び、映像を確認し、文献を収集・調査することは筆者の研究においては不可欠であった。

2. 調査施設

2.1 パリ・オペラ座附属図書館／フランス国立図書館

2.1.1 シャンゼリゼ・バレエ団と「舞踊のタベ」のプログラムの閲覧

パリ・オペラ座附属図書館 (Bibliothèque-Musée de l'Opéra National de Paris) は国立図書館の一部でもあり、オペラ座内にあるオペラやバレエ、音楽関連の資料を収める図書館である。所蔵資料をパソコン等検索機で検索することは未だに出来ず、昔ながらのカード式で探し、司書の方に依頼して、資料を運んで来てもらう。すなわち、所蔵資料は、現地に行かないと把握出来ないのである。

この附属図書館は、シャンゼリゼ・バレエ団の全プログラムを保管しているわけではないが、7年間の活動中の14冊を保管していた。しかし、バレエ史研究においては、バレエ団のダンサーの写真やレパートリー作品の紹介が掲載されている、しっかりとした厚紙のプログラムのみの調査では調査とは言えない。公演日や毎日の演目、出演者を記してある紙切れ一枚のハウス・プログラム (*encarts*) の方がより重要となる。そのハウス・プログラムも多く保管しており、全て書き写し、貴重な閲覧となった。そのハウス・プログラムの閲覧により、多くのことが把握出来た。以下、パリ・オペラ座附属図書館に保管されているハウス・プログラムから得た公演日程の調査を列挙する。

まず、最初のシーズンは、1945年10月12～30日 (31日というデータもある)。第2シーズンの1946年3月2～19日。また、好評を博した1946年4月 (アデルフィ劇場 *Adelphi Theatre*) と10月 (オペラハウス *Opera House*) に行ったロンドン公演のプログラムもあった。しかし、46年から毎

年盛んに行っていた国内外へのツアーに関するプログラム類に関しては、残念ながら上記のイギリス以外は所蔵されていなかった。

1946年6月の第3シーズンのハウス・プログラムも所蔵されていなかった。他に所蔵されていたハウス・プログラムは、1946年8月の公演、そして1946年12月19～30日の公演。1947年は1月1～22日、11月12～16日、18～23日。1948年は11月27～12月6日。1949年は4月19～22日。1950年は11月9～15日（以上全てシャンゼリゼ劇場 Theatre de Champs –Élysées）。1951年は10月3～7日、29、31日（いずれもエンパイア劇場 Theatre de L'Empire）であった。

以上、プログラムとハウス・プログラムから得た情報をもとに、今後バレエ団の年表を作成する予定である。

また、このバレエ団のプログラムのために寄せられた当時第一級のレベルで活躍していた作家や役者などの言葉は、このバレエ団が当時芸術界においてどのような位置を占め、意味を持っていたかについて理解出来る手掛かりとなり、新聞・雑誌の批評同様に研究において非常に貴重となった。

さらに、同バレエ団においては、《旅芸人》の公演回数が非常に多く、1948年12月3日には、250回記念公演の記録もあった¹。いかにこの作品を大事にしていたかが明らかとなった。

他に、シャンゼリゼ・バレエ団の前身であるリサイタルのプログラムも何点か閲覧することが出来た。これらリサイタル公演の出演者や作品の詳細はどの文献にも見られなかったため、貴重な資料となった。

シャンゼリゼ・バレエ団の前身のリサイタルであった、「舞踊のリサイタル」(Recital de Danse) 1943年4月15日(サル・プレイエル Salle Pleyel)、「舞踊の夕べ」(Soiree de la Danse) 1944年12月22日、1945年6月(サラ・ベルナール劇場 Theatre Sarah Bernhardt)のプログラムも閲覧した。その中には、ローラン・プティとジャニース・シャラが二人で振付・出演した作品が多く、また、パリ・オペラ座バレエ学校の生徒達による作品発表もあり、興味深い調査となった。

2.1.2 バレエ団に関する新聞・雑誌記事の閲覧、コピー

一次資料の中でも非常に重要となる、バレエ団の公演の当時の新聞・雑誌の批評記事をオペラ座図書館は非常に多く所蔵していた。それらを手にとることが出来たことは本当に貴重な体験であった。しかし、保管していた人が図書館に寄贈したという可能性が高く、簡単なスクラップ集となっているために署名や引用元がわからない記事も多い。

滞在中に読み切ることが不可能だったが、この資料に関してはコピー依頼をすることができたため、全てをコピーして持ち帰ることが出来た。その資料の一つには、「「シャンゼリゼ・バレエ団で踊っていた」というのは、今日ではディアギレフの「バレエ・リュスで踊っていた」と言っているかのようだ」(Yves-BONNAT, *Les Ballets des Champs –Élysées-des Souvenirs et des projets, Le Reme de la Danse no.2, 1947*) と、バレエ団の当時のバレエ界での存在の大きさを物語るコメントも見られた。

作品別にも閲覧、コピー依頼をすることができ、《ランデブー》の批評文も多かった。今後全てを読み、分析してゆく。

今回の調査中、非常に残念だったことの一つに、フランス国立図書館内のアート&スペクタクル部門内に所蔵されているロンデル・コレクション内にあるはずのシャンゼリゼ・バレエ団の当時の日誌の閲覧が叶わなかったことである。ロンデル・コレクションは存在し、バレエに関する資料を多く保存しているが、シャンゼリゼ・バレエ団についての資料は見当たらないと言われてしまった。何度も図書館に通い、オペラ座図書館の数人の司書の方とも交渉を重ねたが、データ上にないと言う。ただし、親切な司書の方が様々な方面に電話をかけて調べてくれてわかったことは、過去に一度、シャンゼリゼ・バレエ団の展覧会を開催することになり準備を進めていたのに、展覧会の直前になってプティが取りやめたという情報を得た。その展覧会の準備のための資料の一部が、バレエ団の当時の日誌だったのだろう、ということまではわかったのだがそれ以上は情報を得られず、司書の方も「奇妙なことだ」と語っていた。筆者が参考にした論文内の著者の書き間違いという可能性もあり得る。その確認もかねて、今回の調査への宿題となってしまった。

2.2 シネマテーク・ド・ラ・ダンス

シネマテーク・ド・ラ・ダンス (Cinémathèque de la Danse) では、主に3点の映像資料を閲覧することが出来た。プティの振付作品《旅芸人》(Yves-Andre Hubert, 1966, 20min)、バレエ団のプリンシパルダンサーであったジャン・バビレの特集映像 *Babilee '91* (William Krein)、また戦後周辺のシャンゼリゼ・バレエ団に関するドキュメンタリー映像、*Naissance des Ballets des Champs –Élysées* (シャンゼリゼ・バレエ団の誕生) (Claire Sombert, 1989, 30min) を閲覧した。

《旅芸人》の全編を閲覧出来たということは非常に貴重な体験であった。この映像はプティが1948年に結成したバレエ・ド・パリ (Les Ballets de Paris) のダンサー達が踊り、また衣裳もイヴ・サン・ローランが担当をしたため、初演の時とは多少異なると言える (初演から20年後であるから当然だ

ろう)。しかし、この作品の評価を読んでいただけではわからない、作品の「哀愁、物悲しさ」、またプティ振付のアクロバティック性や魅力を十分に感じることが可能となった。アンリ・ソーゲがこのバレエ作品のために作曲した音楽であるため、全てのシーンが音楽によって切り替わり、7部構成となっていたことがわかった。

小さなサーカス団がゆっくりとした足取りで下を向いてある街にやってくる。荷を解き、準備や稽古をし、舞台上に小さなカーテン付きの舞台が完成する。そうして本番となり、街の少年や見物人がちらほらと現れる。少女やピエロ、双生児の少女やハトの手品、ダンス、アクロバティックな見せ物などのシーンが次々にある。そうして見物人たちからお金を集めようとするのだが、客たちは支払いもせず帰っていき、一団は落ち込む。暗い雰囲気皆で皆後片付けと着替えをし、荷を荷台にのせ、また重々しく寂しげに街を去って、次の街へと旅立つ。

これらの物語が非常に魅力的に構成されており、評価されていた「哀愁、物悲しさ」そのものであることが理解できた。次々に見せ物が変わり、観客はその演技にも魅了され、また、物語全体に漂う切なさがこの作品が観客を惹き付けて止まない理由だったのではないだろうか。

ドキュメンタリー「シャンゼリゼ・バレエ団の誕生」は、誕生に関わったイレヌ・リドヴァ、アンリ・ソーゲ、そしてジャン・バビレへのインタビューと、当時の戦後のパリの様子とバレエ団の人気を写真や映像で構成した映像であった。「集まったダンサーも芸術家も、皆若く美しかった」などと語るリドヴァの言葉からは、バレエ団に関わる全ての人達が新作創作への熱意を持ち、活気に満ち満ちていたこと、さらには当時のバレエ団の人気を知ることが出来た。

3. ローラン・プティのセレモニーへの参列

ローラン・プティは今年の7月10日にジュネーブで87歳にして亡くなった。偶然にも、筆者の調査研究期間中の9月23日にパリ市内のサン・ロッシュ教会でプティ氏の追悼セレモニーがあり、参列する機会に恵まれた。

カメラやビデオ撮影禁止の荘厳の雰囲気の中、《若者と死》に使用されている楽曲であるバッハの「パッサカリア」(Passacaille B.W.V.582)がパイプオルガンで演奏されてセレモニーが開始された。プティ氏の長年のバレエ界における功績が司祭によって語られ、友人達が追悼の意を表し、短いセレモニーであった。参列者にはプティの妻、ジジ・ジャンメールや近親者、プティと深い繋がりを持つパリ・オペラ座バレエ団のバレエ・ダンサーや元バレエ・ダンサーを始めとして、スペイン、イタリアからなど、世界的スター・ダンサー達、そして関係者、筆者のような者たちがいた。

プティは死の直前まで世界中のバレエ団に振付指導を続けていた。また、世界中のダンサー達がプティの作品を踊りたいと渴望している。プティ自身の魅力や才能に合わせ、才能ある芸術家達に囲まれていたことを実感した日となった。

また、筆者の滞在中に刊行されていたヨーロッパ圏内の舞踊関連雑誌のほとんどが、ローラン・プティ追悼特集をしていた。それら全てが筆者の研究に非常に有効な資料となった。

4. 考察

ローラン・プティは1940年にパリ・オペラ座に入団後、舞踊批評家のイレヌ・リドヴァによって、当時天才少女ダンサーとして名を馳せたジャンヌ・シャラのパートナーとして選ばれた。2人はオペラ座外でのリサイタルで作品を発表し始めた。

1944年、リドヴァがリサイタル「舞踊の夕べ」を主催した。そこで2人を含めたオペラ座を飛び出した若く才能のあるダンサー達、ジャン・バビレやルネ・ジャンメール(後のジジ・ジャンメール)らが踊り、バレエ愛好家や知識人の間で話題となった。45年、ディアギレフの秘書、そして台本家、照明家でもあったボリス・コフノがプティに《旅芸人》の振付を提案した。オペラ座を退団したプティは父親の資金援助を得て《旅芸人》を上演し、成功を収める。この作品では、衣裳や美術、装飾をクリスチャン・ベラルが担当した。哀愁に満ち、かつアクロバティックな振付のこの作品に観客は魅了された。批評家達はこの作品を絶賛し、《旅芸人》は戦後最初の価値ある作品として位置づけられた。

プティは古典の伝統を継承するだけではなく、時代を反映したテーマ、そして共同作業者を選んだ。また観客とのコミュニケーションも重要だと考えていた。

《ランデブー》では、ジャック・プレヴェールが台本、アンリ・ソーゲが作曲をそれぞれ担当し、またピカソがドロップカーテンを描き、写真家ブラッサイが美術を担当した。

1945年10月、支配人のロジェ・ウッドにより、シャンゼリゼ劇場がプティらに提供され、シャンゼリゼ・バレエ団が設立される。コフノが芸術監督、弱冠21歳のプティがメートル・ド・バレエ、振付家兼ダンサーとなった。プティは上記3作品の他に《草上の昼食》*Déjeuner sur l'herbe*、《悪魔

の花嫁》*La Fiancée du diable* (1945)、《ジュピターの恋》*Les Amours de Jupiter*、《洗濯女の舞踏会》*Le Bal des blanchissesses* (1946) 《13の踊り》*Treize danses* (1947) を振付けし、意欲的に作品を発表し続けた。

シャンゼリゼ・バレエ団の発表する新作では、シャラ振付の《カード遊び》*Jeu de cartes* (1945) などコミカルな作品も人気を得たが、作家のエルザ・トリオレは同バレエ団の発表する新作の特徴を次のようにうまく言い当てている。

「人間的なものである・・・テーマそのものが変化している。ダンスそのものへの動機が変わっている。日々の生活によってすり切れた上着がダンスに入り始めた。綺麗なピンクのタイツやクラシックシューズは続いているけれども。おとぎ話は様相を一変させ、貧困、運命、困難なことについてのダンスに変わった」² (筆者拙訳)。

トリオレが指摘する「貧困、運命、困難」という表現は、《旅芸人》《ランデブー》《若者と死》に最も当てはまるだろう。

舞踊批評家のアントワヌ・リビオが、当時のバレエ団の公演は「舞踊が中心になり、観客参加の印象を与える公演」³であったと位置づけている点は注目に値する。このことは、当時を振り返りコフノらが自らのバレエ団を皆が家族のような集団であったと思い出していることと無縁ではないと考える。後期バレエ・リュスに集結した一流の芸術家達による台本や音楽、衣裳や装置のデザインを目の当たりにして、オペラ座出身の勢いのあるダンサーや新たな発想を持ちつつあった振付家集団には、これで第2次世界大戦を乗り越えられるという一種の連帯感があったに違いない。戦争で厳しい生活を強いられていた観客は新鮮、かつシックで悲哀に満ちたバレエに惹き付けられ、新鮮なコミュニケーションをさえそこに見出したと言える。それ故に、シャンゼリゼ・バレエ団は第2次世界大戦後フランス・バレエの出発を担った存在であったと言えよう。

5. 今後の研究へ

以上のように、本調査は10日間という短期間ではあったが充実したものとなった。このように、バレエ団や振付家や作品の研究を文献のみで行うのではなく、一次資料である、当時のプログラムや雑誌、新聞記事を確認、また映像で確認し、一つのバレエ団の調査を通して戦後フランスの舞踊界を考察する、ひいては社会や舞踊を考察する、という研究は舞踊学という枠に収まらない研究であり、本調査はグローバルな広い視野での先進的な調査研究であったと考える。

シャンゼリゼ・バレエ団についてはいまだ研究がなされていないため、筆者の学位論文での主要テーマとなる。本調査の主題であった研究は恐らく学位論文(博士論文)執筆の第1、2章をしめるであろう。シャンゼリゼ・バレエ団が他の芸術やその後続く舞踊に与えた影響は計り知れないものがある。

今後も引き続き、今回の調査研究で得たシャンゼリゼ・バレエ団について、また同バレエ団に属していた時代にプティが振付けをした重要な作品の資料の読み込み、分析を通し、戦後のフランスの舞踊の動向や社会的背景を導き出し、舞踊史におけるそれらの位置を考察する。

今回の調査に基づき、今年度の12月3日には第63回舞踊学会大会にてシャンゼリゼ・バレエ団の初期の活動やその意味をテーマに研究発表することが決定している。

注

- 1951年11月27日にはローザンヌにて449回目のバレエ団としては最後の《旅芸人》の公演を行っている。Christout, Marie-François(2004) *Les Ballets des Champs-Élysées :A Legendary Adventure*, *Dance Chronicle*, Vol.27 :190.
- Les Ballets des Champs-Élysées 1946*, Ed.Aljanvic,1946,Paris. (バレエ団のプログラム)
- アントワヌ・リビオ(前田充訳)『モーリス・ベジャール—現代バレエの精髓』(西田書店、1978)。

参考文献

- Aschengreen,Erik: Tr. to English by Patricia Mcandrew and Per Avsum (1986) *Jean Cocteau and the Dance*.Gyldendal: Copenhagen.
- Beaumont,Cyril(1954) *Ballets of Today*. Putnam and Co:London.
- Craig-Raymond,Peter(1953) *Roland Petit*.Losely Hurst:Surbiton, Surrey.
- Crosland,Margaret(1957) *Ballet Carnival*.Arco :London.
- Haskell,Arnold.L(1950) *Baron at the ballet*.Collins:London.
- Ries, Frank W.D(1986) *The Dance Theatre of Jean Cocteau*. UMI Research Press: Michigan.
- Boll,André(1956) *Jean Babilée*.Robert Laffont:Paris.

- Clair Sarah(1995) *Jean Babilée ou la danse buissonnière*. Van Dieren :Paris.
Christout,Marie-François(2004) *Les Ballets des Champs-Élysées :A Legendary Adventure,Dance Chronicle*,Vol,27 :157-198.
Fiette Alexandre(Ed.)(2007a) *Roland Petit à l'opéra de Paris : Un patrimoine pour la danse*. Opéra national de Paris:Somogy éditions d'art:Paris.
Fiette Alexandre(Ed.)(2007b) *Zizi Jeanmaire Roland Petit : Un patrimoine pour la danse*.Opéra national de Paris:Somogy éditions d'art:Paris.
Kochno,Boris(1954) *Le ballet*.avec la collaboration de MariaLuz, Hachette:Paris.Koeing,
John Franklin(1980) *Le Danse contemporaine*. Fayard: Paris.
Lidova,Irène(1956) *Roland Petit*.Robert Laffont:Paris.
Lidova,Irène(1969) *Roland Petit*.Sodal:Paris.
Mannoni,Gérard(1984) *Roland Petit-Ouvrage conçu et réalisé*. L'avant-scéné Ballet/ Danse:Paris.
Mannoni,Gérard(1992) *Roland Petit:Un Choreographe et ses danseurs*.Paris.
Michaut,Pierre(1950) *Le ballet contemporain 1929-1950*. Plon:Paris.
Minyama,Philippe(1998) *Jean Babilée*. Marval:Paris.Pastori,
Jean-Pierre(1997) *La danse,des Ballets russes à l'avant-garde*. Gallimard:Paris.
Petit,Roland(2003) *Roland Petit:rythme de vie:entretiens avec Jean-Pierre Pastori*.La Bibliotheque des Arts:Lausanne.
Petit,Roland(1993) *J'ai dansé sur les flots*.Grasset :Paris.
Schneider,Marcel,Michel,Marcelle,Robin,Jean(1983) *Danse à Paris-Ballets des Champs-Élysées Festival international*.Dell'arte:Paris.Williamson,Audrey(1958) *Ballet of 3 decades*.Rockliff:London.

Program

- Soirée de Ballets* Ed.Chêne.06.1945 :Paris.
Les Ballets des Champs-Élysées Ed.Mercure.12.10.1945:Paris.
Les Ballets des Champs-Élysées Ed.Mercure.17.03.1946:Paris.
Les Ballets des Champs-Élysées1946 Ed.Mercure.05.04.1946:Paris.
Les Ballets des Champs-Élysées1946 Ed. Aljanvic.1946:Paris
Les Ballets des Champs-Élysées1946-1947 Ed.Aljanvic.19.12.1946:Paris.
Les Ballets des Champs-Élysées1948 Ed.Mercure.06.11.1948:Paris.
Les Ballets des Champs-Élysées1949 Ed.Mercure.19.04.1949:Paris.
Les Ballets des Champs-Élysées 1949-50 Ed.Mercure.7.11.1949:Paris.
Les Ballets des Champs-Élysées Ed.Mercure.12.06.1950:Paris.
Les Ballets des Champs-Élysées1951 Ed. Mercure.3.10.1951:Paris
Ballet de L'opéra Picasso et la danse 1993 :Paris.
Ballet de L'opéra Roland Petit 9.2010:Paris.

ふかさわ なつみ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

深澤南土実さんの海外調査研究では、1.フランス国立図書館におけるロンデル・コレクション内にあるシャンゼリゼ・バレエ団の当時の日誌閲覧、2.パリ・オペラ座附属図書館におけるシャンゼリゼ・バレエ団当時のプログラム閲覧、3.シネマティーク・ドゥ・ラ・ダンスにおける現在でも再演されている作品《ランデブー》《旅芸人》の映像の閲覧、を通してフランスのネオ・クラシックダンス（モダン・バレエ）の中心であった当時のシャンゼリゼ・バレエ団の誕生の契機と初期の活動を探ることが主な目的であった。このような調査により日本では得られない貴重な情報を収集できたことは、博士論文の執筆に関して非常に有益な収穫であったと考える。また、この時期に渡欧したことによって、深澤さんの研究対象でもある亡くなったローラン・プティ氏のセレモニーに参列できたことも研究の大きな励みになったと思われる。今回の調査結果は、12月に開催される第63回舞踊学会大会で発表を予定している。さらに、研究を進め深化させることを期待している。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・猪崎弥生)

学生海外調査研究	
唐代長安城に関する現地調査	
古内 絵里子	比較社会文化学専攻
期間	2011年9月2日～2011年9月13日
場所	中華人民共和国陝西省西安市・北京市
施設	大明宮跡、興慶宮跡、含光門跡、延平門跡、薦福寺、慈恩寺、青龍寺、外郭城壁跡、中国社会科学院、北京大学、国家博物館、首都博物館、故宮博物院

内容報告

1. 海外調査研究の必要性と目的

修士論文では、日本における古代都市の成立というテーマで研究に取り組み、七世紀の「みやこ」の実態を考察した。その研究結果としては、古代日本では、七世紀の初めまで大王宮自体を「みやこ」とみなしていたが、七世紀半ばの孝徳朝に「みやこ」が大王宮の周辺までをも含む空間に変化したことを明らかにした。さらに、大王宮周辺空間の現出要因が大化改新の官制変化と評制施行という二つの政策にあることを解明した。そして、大王宮と周辺空間によって形成された「みやこ」が七世紀後半の天武朝から都城という中国の「みやこ」の形態に整備された要因について分析を加え、これら七世紀の「みやこ」についての都市成立過程の歴史のなかでの位置づけとその意義を解明した。

この研究を進める中で、七世紀後半に造営された藤原京以降の「みやこ」の形状は、『周礼』の考工記や唐の長安城を模倣しているが、以下の相違点がある。

①行政制度の相違

唐では、城の内外問わず州郡郷里制が敷かれていたが、日本では都を一つの行政領域とする独自の行政制度が敷かれた。したがって、日本は唐の都の形状をそのまま継受したのではなく、そこに日本独自の構造やシステムを導入していた。

②構造上の相違

長安城をはじめとする唐代の都は四方を城壁で囲んでいたが、日本の都には四方を巡る城壁がなく、平城京では、京城南面 4.2km のうち羅城門の両側 100m のみ築地塀が設けられていただけだった。城内の坊という区画についても、長安城などでは坊牆という壁で四方を囲んでいたのに対し、日本の都では坊はあるものの、それを囲む壁が存在しない。

これら①②から、都に対する統治形態・理念はまったく異なることに関心を抱いた。当時の日本が長安城のどの部分を継受し、逆にどこを継受しなかったのかを逐一比較検討することで、日本の都の特質・独自性を解明することができるのではないだろうか。

そこで、今後は日本古代における都市の展開を研究するつもりである。そのため、

(1) 日本古代の京城空間の変遷

(2) 日唐における京城空間の比較検討

(3) 古代東アジア世界における日本古代の京城空間の位置付けと史的意義

という三点から研究を進めていく。

(1) では、七世紀後半から始まる藤原京造営から平安京、そしてその後の都城制解体までの約四百年にわたる京城空間の制度や実態の変遷を分析し、その形成・展開過程を解明する。

(2) では、日本古代の京城空間のモデルとなった中国の長安城と洛陽城を研究し、日唐における京城空間の制度と実態の比較を行い、その共通点と相違点を考察する。

(3) では、(1) (2) の研究を踏まえて、文献史料と考古資料の両面から日本の京城空間の特質と創出要因を検討し、最終的に古代東アジア世界での日本古代都市の位置づけと史的意義を明らかにする。

この研究の(2)である「日唐における京城空間の比較検討」を行うためには、唐代長安城の規模・構造を把握する必要がある。したがって、中国西安市に残る唐の長安城の遺構や遺物などを自身で調査しなければならない。また、長安城の精密な研究を行うには、中国にしかない文献史料や最新の考古資料のデータの収集・検討することが必須である。

そこで、今回の海外調査研究では、長安城の規模や構造を明らかにするため中国陝西省西安市の唐代長安城址に点在する寺観や大明宮などの各遺跡で実測調査を行った。また、北京市では、先端の歴史研究を行う中国社会科学院の歴史研究所、北京大学、中国国家博物館、故宮博物院に行き、日本では手に入らない長安城に関する文献史料の収集を行った。

2. 調査の成果

2.1 唐代長安城址調査

唐代長安城は、隋の開皇二年(582)に造られた大興城を唐が受け継ぎ長安城に改名した都である。この地域は、前漢の首都となって以後、五胡十六国の前趙・前秦・後秦、南北朝の西魏・北周など唐代以前の諸王朝の首都でもあった。唐代長安城の規模は、東西 9.7km、南北 8.6km の長方形の形状でこの四方を城壁で囲み、十二の門があった。城内は道路によって碁盤の目に区切られた坊という区画が 100 以上あった。この坊も四方が坊牆という土壁で囲まれ四つの門があった。城内の中央北寄りに宮城、その南に皇城がつくられ、皇城の南東と南西にそれぞれ東市・西市が設けられた。このように、長安城は都市計画に基づいていた都であった。また、唐末の戦乱で破壊されるまで約三百年間、唐朝の政治・経済・文化の中心地であった。

今回はその唐代長安城の中でも遺構が残る大明宮跡、興慶宮跡、皇城跡、含光門跡、延平門と外郭城壁跡、薦福寺、大慈恩寺、青龍寺で現地調査を行った。

2.1.1 大明宮

大明宮は、唐代長安城の東北、禁苑の東南部分に位置し、城内で最も規模が大きい宮殿であった。貞観八年(634)に太宗が造り始めたが、太宗の死により造営が中断された。その後、龍朔二年(662)に高宗が病にかかり、当時の宮城であった太極宮が卑湿であるため、ここに移り政治を取るようになった。その後唐代末期まで宮城として存続した。

発掘調査から東壁が 2614m、西壁 2258m、北壁 1135m、南壁 1675m の台形型の宮城であり、四方を宮壁に囲まれていたことが判明した。宮内は正門である丹鳳門、正殿である含元殿・宣政殿・紫宸殿、玄武門が宮の中軸線上に配置される構造であった。この宮城の構造は、だいたい『周礼』という「前朝後寢」制にしたがって、前半分は朝廷政務区で、後半分は皇帝らの生活区であった¹。この大明宮は奈良時代の平城宮の構造にも多大な影響を与えた。現在、大明宮址は大明宮国家遺址公園となり、主要な建物が復原されていることから、今回はその遺構や博物館を見学した。

まず、丹鳳門を見学した。丹鳳門は大明宮南面正門で、龍朔二年に建てられた。日本では朱雀門に相当する門である。丹鳳門は、単に門としてだけでなく、赦令の頒布や宴会が行われ大典の重要な場所でもあった。この門は、2005年から2006年にかけて発掘が行われ、五つの門道、隔牆、墩台、馬道、城壁が確認された。現在、丹鳳門は復元され丹鳳門遺址博物館となっている。博物館内部には、門の鴟尾や板瓦、瓦当、鉄釘、版築で造られた城牆の外部を覆う磚などの出土遺物が展示してあった。また五つの門道と隔牆の遺構が展示されており、門道は全て幅 9.4m、南北 33m であり、隔牆の幅は約 3m であった。門道制は日本の門には見られない制度であり、階級ごと通る五つの道が決まっており、真中の道は皇帝専用の道であった。

次に正殿部分を見学しに行った。大明宮の正殿部分である朝廷政務区画は含元殿・宣政殿・紫宸殿を中心として、建物を対称に配置して、東西三つの垣によって前朝・中朝・内朝の三区画に分けられていた²。

含元殿は、丹鳳門の北 160m の位置にあり、正殿の中で最も重要な建物であった。龍朔三年に建てられた。含元殿は前朝の中心建物で、その東西に左・右金吾仗院や東・西朝堂などが置かれていた³。発掘調査から含元殿殿堂は東西 76.8m、南北 43m、高さ 3.46m であることが判明している。含元殿の右には翔鸞閣、左には棲鳳閣があり、飛廊でこれとつらね、いずれも平地より四十余尺高いところに建てられた⁴。日本の大極殿に相当するが復元された基壇を見たことにより、規模の大幅違いを把握することができた。また、復元基壇から朝廷部分を見てみると日本の宮城の朝廷に比べて、規模に対して小さな印象を受けた。そして、含元殿の北裏には磚瓦窯址あった。磚瓦窯址は宮内に二十基あり、宮内の城壁、門、道に大量に使用されていた磚は宮内で造られていたことが今回の調査でわかった。

次に、宣政殿は含元殿の北 300m の位置にあり、龍朔三年に造られた。殿の規模は東西約 70m、南北 40m 以上で、その両側に宮牆があった。この建物は、中朝の中心建物であり、新帝即位、冊封太子、科挙殿試など重要な政治の場であった。この殿の遺構からは真っ直ぐ南には含元殿がよく見え、これら建物が大明宮の中軸線上に並んでいることを確認できた。

最後に、大明宮の北面正門である玄武門を見学した。この門には、東西 34.2m、南北 16.4m、幅約 5m の門道が一つと、両側に高い門樓基があったことが発掘調査で確認されている。現在、玄武門も復原されており、門道の高さは馬車も余裕で通れるほど高かった。また、門は内部は土をつき固め、

表面を磚で覆っていたものであった。

その他、大明宮址では、宮城内で一番高い建物であった望仙台址や、紫宸殿址、麟徳殿址などを見学した。時間がなかったため宮殿内の主要建物しか見ることができなかったが、それでも規模の大きさを実感することができ、文献史料からは窺い知ることのできない大明宮の荘厳さと構造を理解することができた。

2.1.2 興慶宮

興慶宮は、外郭城の興慶坊に位置する。興慶宮は開元二年（714）に離宮にされ、同十四年（728）に北隣の永嘉坊、東隣の勝業坊の二坊の地の半ばを析いて拡張して宮内が大々的に整備され、十六年に一応の完成した後、玄宗はここで政務を執り行った⁵。天宝十二年（753）には、沈香亭・勤務政務本楼・花萼相輝楼などの建物が建てられた⁶。現在は公園となっており沈香亭と龍池が復原されている。このような外郭城にある宮は、日本でも八世紀後半の長岡京の東院などが確認されている。

2.1.3 含光門

現在の西安市の中心部は明代の西安城壁に囲まれている。1986年の調査でこの西安城の南城壁内に唐代の含光門が残存していることが確認された。含光門は皇城の南面城壁に開く3つの城門のうち、正門である朱雀門の西方にあった門であり、現在、西安皇城含光門遺址博物館としてその遺構を展示している。発掘調査によって、門の基壇の規模は東西37.4m、東西19.6mで3つの門道が判明している。日本でいえば大内裏を囲む宮垣に相当する。日本では藤原宮の宮垣は一本柱塀、平城宮以降は築地塀であったが、この含光門と皇城壁は土をつき固め、表面を磚で覆った荘厳なものであった。

2.1.4 延平門跡と外郭城跡

外郭城壁は外郭城の東西9.7km、南北8.6kmを囲む城壁である。日本では羅城と呼ばれるが、日本の都城では南面の羅城門付近のみ築地塀が確認されており、都城全体を囲むものではなかった。発掘調査で確認されている残高は0.7～1.5mであることから、高さは2mであったと想定されている。城基は場所により異なるが多くは9～12mで、3～5mの部分もある。また門址付近では20m近くの厚さが確認されている⁷。今回は、その中でも延平門と長安城の西にある待賢坊から永和坊に接する外郭城壁址を現地調査した。

2.1.5 薦福寺・慈恩寺

小雁塔は現存する唐代の磚塔であり、現存する数少ない唐代長安城の建物である。この塔は、安仁坊西北隅の薦福寺浮図院にあった。薦福寺は嗣聖元年（684）に創建された。小雁塔が建立されたのはその約20年後の景龍年間（707～10）に建てられた。建立当初の塔は十五層の高さ88.2mであった。

唐代長安城内の現存するもう一つの建物は慈恩寺にある大雁塔である。慈恩寺は、貞観二十二年（648）に高宗が皇太子時代に母の文徳皇后の供養のために再建した寺院である。元果院や太平院等の塔頭を含み、建物の全体は1897間、三百人の勅度僧という大規模寺院であり、長安城の東南の晋昌坊の東半分を占めていた。インドから帰国した玄奘三蔵が上座として迎えられ、翻訳院で大部のサンスクリット仏典を漢訳しており唐代長安城の代表的寺院の一つであった⁸。大雁塔は、永徽三年（652）に玄奘三蔵がインドから持ち帰った仏像や経典を保存するために建てられた磚塔である。高さは67.4mであった。

2.1.6 青龍寺

青龍寺は新昌坊の4分の1を占める大寺院で、創建は隋開皇二年（582）で、はじめ靈感寺とあった。その後、龍朔二年に城陽公主が観音寺とし、景雲二年（771）に青龍寺に改名された。空海、円行、円仁、恵運、円珍、宗睿など日本人僧侶が学んだ寺としても名高い寺院であったが、北宋以降、荒廃し廢寺となった。

現在の青龍寺は近年再建されたものだが、発掘調査により、北門、殿址、塔址などの遺構が確認されている。遺構図・遺物は現在の寺院内に展示スペースがあり、仏頭、蓮華紋瓦当、獸面紋瓦当、筒瓦、鴟尾、手印紋磚、蓮華磚、石経幢残片、経幢頂、緑釉陶碗、三彩象座、緑釉帶蓋水盂などを見ることができ、当時の隆昌を窺うことができた。

2.2 北京市における史料調査

北京市では、中国社会科学院、北京大学、国家博物館、首都博物館、故宮博物院に行き、唐代の史料や資料を収集した。

2.2.1 中国社会科学院

中国社会科学院では、歴史研究所に行き天聖令の研究会に参加した。天聖令とは、宋代の令つまり法典であり、1999年に載建国氏の「寧波天一閣藏明鈔本《官品令》考」（『歴史研究』1999-3）により寧波天一閣博物館に北宋天聖七年（1029）編纂の天聖令写本の存在が判明した。その中に、唐の開元二十五年令と目される不行唐令があることから、長年不明だった唐の具体的な令を知ることが可能

となった。この天聖令には、都に関する条文も数多くあることから、今後、唐代長安城を研究する上で欠かすことができない史料である。参加した研究会では、倉庫令の不行唐令四条を検討した。この研究会には、中国社会科学院の先生方をはじめ、北京大学、中国法政大学、中国師範大学などの大学院生が参加しており、活発な討論が行われていた。また、日本の天聖令の研究とは違う視点から令と唐の実態についてアプローチしており、今後の天聖令を研究していくうえで大変参考になった。研究会終了後は、中国社会科学院内の隋唐宋元史研究室や付属図書館を案内してもらい、数多くの貴重書を見させていただいた。中国の歴史研究の最先端機関に行くことができ、とても勉強になった。

2.2.2 北京大学

北京大学では、付属博物館に行った。この博物館には北京大学考古系が収蔵した中国各時代の遺物が展示してある。真桶形匣鉢装焼、青釉子母杯盤など唐代の陶器をみることができた。また北京大学図書館には多くの唐代に関する史料や本があり、貴重な史料を得ることができた。

2.2.3 国家博物館

国家博物館は、中国を代表する博物館であり、唐城の貴重な遺物を数多く収集している。その中でも 1972 年の新疆吐魯番から出土した「餃子・点心及食具」という唐三彩の模型は、当時の菓子や食器の形などがよくわかる遺物であった。また、陵墓などの陶俑や壁画が数多く展示してあり、文官・武官・女官などの唐代の服装などがよくわかった。このように、唐代の遺物からその時代の生活様式を知ることができ、長安城での生活の一端を知る良い資料を得た。

2.2.4 故宮博物院

故宮博物院は、明から清朝にかけての宮城であった紫禁城である。この紫禁城は、正門である午門一太和門一正殿（太和殿・中和殿・保和殿）一内廷一神武門が宮の中軸線上に配置されている。清朝の宮城であるが、先述した大明宮にみえる「前朝後寝」制が残っており、中国の宮城の構造がよくわかる。この「前朝後寝」制は日本の宮城でも七世紀から確認され、孝徳朝の難波長柄豊碓宮も宮門一前殿一後殿があり、その後の宮城であった後飛鳥岡本宮・近江大津宮・飛鳥浄御原宮・藤原宮にも、その構造が引き継がれた。すなわち、中国の宮城構造は、外郭城の構造より早く日本に伝わったといえる。

3. 今後の研究計画

今回の調査研究では、(2)の「日唐における京城空間の比較検討」を行うため、西安における唐代長安城の遺構と北京での史料収集を行うことができ、多くのデータを得ることができた。今後はこの海外調査研究で集めた史料やデータをまとめ、唐代長安城の構造・実態を解明していく。また、七世紀後半から中国の都城制に倣って創出された藤原京、平城京、恭仁京、難波京、長岡京、平安京が造られた飛鳥から平安時代までの約四百年間に京城空間の変遷を分析し、日本古代都市における京城空間の形成過程を研究していく。それらの検討をした上で、日唐の都市の比較を行い、古代日本の都市の特質を明らかにしていく。

その研究成果を踏まえて、日本が「京」制度を創出した要因を研究し、日本古代の京城空間の特質を解明する。そして、古代東アジア世界での日本の都市の位置づけと史的意義を明らかにする。

注

1. 何歳利・馬彪(訳)「唐長安大明宮発掘の成果と課題—考古学の新成果と興安門遺跡の発掘と研究」『アジアの歴史と文化』10,34.
2. 前掲 1 参照.
3. 前掲 1 参照.
4. 佐藤武敏 (2004)「唐の長安」『長安』講談社 163-164.
5. 徐松・愛宕元(訳) (1994)『唐兩京城坊攷』平凡社 51.
6. 前掲 4,130.
7. 徐松・愛宕元(訳) (1994)『唐兩京城坊攷』平凡社 68-69.
8. 前掲 8,102.

ふるうち えりこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

古内さんの修士論文は優秀な内容で、日本の古代都城史上における 7 世紀半ばの前期難波宮の画期

性を文献史料と考古学資料の双方を使って明らかにしたものだ。

博士論文においては、古代における都市の展開を、7世紀後半の藤原京以降の都城における京城空間の形成過程を辿ることによって探求していくことにしている。その際、日本古代の都城のモデルとなった中国の都城と比較する視点が欠かせない。今回の海外調査研究によって、古内さんは唐の長安城の大明宮や城壁、門、寺院跡などの遺跡を実地に調査し、大きな成果を得ることができた。

また、日本の都城が行政制度上、京職によって把握されるのに対して、唐では、長安城の内外問わず州郡郷里制が敷かれていた。古内さんは、この行政制度の違いについて、近年発見された新しい史料である天聖令を用いて論証しようとしている。今回の海外調査研究で、北京の中国社会科学院歴史研究所における研究会で天聖令について最新の研究成果に触れることができ、研究者との交流ネットワークを築くことができたことは大きな成果であり、今後、博士論文作成に活かされることが期待できる。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・古瀬奈津子)

学生海外調査研究	
地域の科学教育貢献を目的とする米国大学アウトリーチ活動の調査 －Cornell Cooperative Extension の実践活動－	
堀田 のぞみ	ライフサイエンス専攻
期間	2011年10月8日～2011年10月16日
場所	Ithaca, NY, USA (米国ニューヨーク州イサカ市)
施設	Cornell University

内容報告

1. はじめに

本調査研究で参加するコーネル大学の共同普及事業 (Cornell Cooperative Extension: CCE) は、1914年にモリル・ランドグラント法 (Morrill Land-Grant Colleges Act : 大学を新設する州に対して土地を無料で交付する) の適用を受け、コーネル大学が大学の社会的責任において運営する社会貢献部門の事業である¹。設立当初から、地域と連携した初等科学教育のカリキュラムの促進や、農業に従事する地域コミュニティの後継者教育にはじまり、日本でも導入された「4-Hクラブ」(農業青少年クラブ)との連携を担ってきた。本調査は、筆者の現在の博士後期課程の研究テーマである、「科学教育支援を通じた大学の地域連携の在り方」を確立することを目的とした研究内容と合致することはもちろんのこと、科学教育を通じた地域貢献に歴史ある同事業は調査するにふさわしい。日本でも、近年、地域の科学教育への貢献を目的とした研究者のアウトリーチ活動が推進されており、全米で活発に行われている大学のアウトリーチ活動のなかでも、今回、歴史ある同事業に着目し、その実態について海外での訪問調査を行うことは、まだ日本では日の浅いこの分野を研究として系統立てるきっかけとなり、学位取得後のキャリア形成においても、非常に意義のある調査であった。海外で訪問調査を行うということは、調査目的に合致した調査を効率よく行うことが第一だが、その一方では、調査期間を通して現地に滞在することにより、インフォーマルに自分の研究分野に関するさまざまな情報を聞くこともできた。米国では通称ランドグラント大学と呼ばれる大学では古くから社会貢献、アウトリーチ活動が義務付けられており、本研究分野の中心である。また、コーネル大学総長の Frank H.T. Rhodes の著書「The Creation of the Future: The Role of the American University」は全米で注目され、本書の Service as a Societal Obligation の章では、本事業が取り上げられている。このような状況においてコーネル大学の共同普及事業の運営方法については、研究者の関心度も高いことが推測され、有意義な調査となることが期待できる。さらに、同大学の共同普及事業 (CCE) のディレクター、Helene R. Dillard 教授は植物病理学を専門とする研究者であり、特に女性リーダーの一人として責任ある立場で組織を統括し活躍する姿からは学ぶべきことも多く、筆者が本調査にあたっての支援を受けた本学プロジェクト「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」の趣旨に合致するものであると考えられる。

2. コーネル大学

2.1 共同普及事業 (Cornell Cooperative Extension: CCE)

2.1.1 運営組織図

コーネル大学は、1865年に設置された私立大学であるが、キャンパス内に一部公立大学を含む、全米でもめずらしい半官半民の大学である。コーネル共同普及事業 (以下 CCE とする) は、パートナーシップを通じて、地域と人々の生活の改善を目的に実践に基づいた研究知識を現場に活かすべく行われる教育システムである。CCE 教育システムの主な特徴は、

- ニューヨーク州のすべての郡にそれぞれの運営組織、ニューヨーク市に事務所を持つ
- ニューヨーク州全体で 1,700 名のスタッフと教育者 (educator) を雇用しており、スタッフ及び教育者は Volunteer Board of Directors が運営する各地域の CCE 組織に属する。
- 50 名のスペシャリストが地域及び州単位で設定されたプログラム (例えばフルーツ・野菜と害虫管理、穀物と管理等) を展開している。

- CCE のプログラムには 40,000 人のボランティアが年間参加している。ボランティアはトレーニングを受けており、各地域においてアドバイス、指導、メンタリングからプランニングまで多岐に渡った活動を行っている。
- 約 200 名の大学職員が大学の責務に基づき、それぞれの公的な共同普及事業のパートナーとして関わっている。
- プログラム開発は地域住民にとって重要な課題を抽出し、それを研究と連携することにポイントが置かれる。共同普及事業に従事する地域の教育者 (local educators) が地域のニーズと大学職員の研究との連携を行う。
- 組織、省庁、機関、産業界の数千の実施者と協働で行われる。パワフルなネットワークが構成されることにより、地域には積極的な変化がもたらされ、持続的な改善策を講じることができる。

である²。また、現在、特に CCE が優先しているプログラム分野に、「農業と食糧システム(Agriculture and Food System)」、「児童、青少年、家族(Children, Youth, and Families)」、「地域と経済の活性(Community and Economic Vitality)」、「栄養と健康 (Nutrition and Health)」がある。運営組織の形態としては連邦、州、地域単位から構成される。コーネル大学 CCE 組織のチャートを図に示す。

2.1.2 インタビュー相手

訪問前、数度に渡るメールでのやり取りを行った結果、ディレクター、Helene R. Dillard 教授の計らいにより、次の 21 名へのインタビューを計画・実施することができた。各人へのインタビューは 1 時間から 1 時間半であった。

Helene Dillard, Director, CCE

Glenn Applebee, Associate Director, CCE

Chris Watkins, Associate Director, Agriculture and Food Systems, CCE

Mark Giles, Extension Support Specialist, CCE

Todd Schmit, Assistant Professor, Dept of Applied Economics & Management, Director, Cornell Program on Agribusiness and Economic Development

Paul O'Connor, State Extension Specialist, CCE

Tom Overton, Associate Professor, Dept of Animal Science, Director, PRO-DAIRY

Marvin Pritts, Chair, Dept of Horticulture

Brad Rickard, Assistant Professor, Dept of Applied Economics & Management

Raylene Ludgate, Youth Education Coordinator for elementary and preschool age children, Cornell Plantation

Donna Levy, Environmental Education Outreach Coordinator for middle school and high school students, Cornell Plantation

Neil Mattson, Associate Professor, Dept of Horticulture

Betsy Lamb, Senior Extension Associate, Integrated Pest Management

Paul Curtis, Associate Professor, Dept of Natural Resources

Jenny Kao-Kniffin, Assistant Professor, Dept of Horticulture

Mark Smith, Extension Associate

Chris Smart, Associate Professor, Plant Pathology

Steve Reiners, Assistant Professor, Dept of Horticulture Sciences, (New York State Agricultural Experiment Station)

Julie Kikkert, Extension Vegetable Specialist, (New York State Agricultural Experiment Station)

Art Agnell, Professor, Dept of Entomology, (New York State Agricultural Experiment Station)

Olga Padilla Zakour, Associate Professor, Food Science and Technology, (New York State Agricultural Experiment Station)

次項では現在 10 項目ある CCE の活動分野の中から、今回、インタビューから得られた情報と現地で入手した資料をもとに、「Agriculture and Food Systems」「Environment and Natural Resources」「4-H Youth Development」「Emergency Preparedness」「Gardening」について整理した。

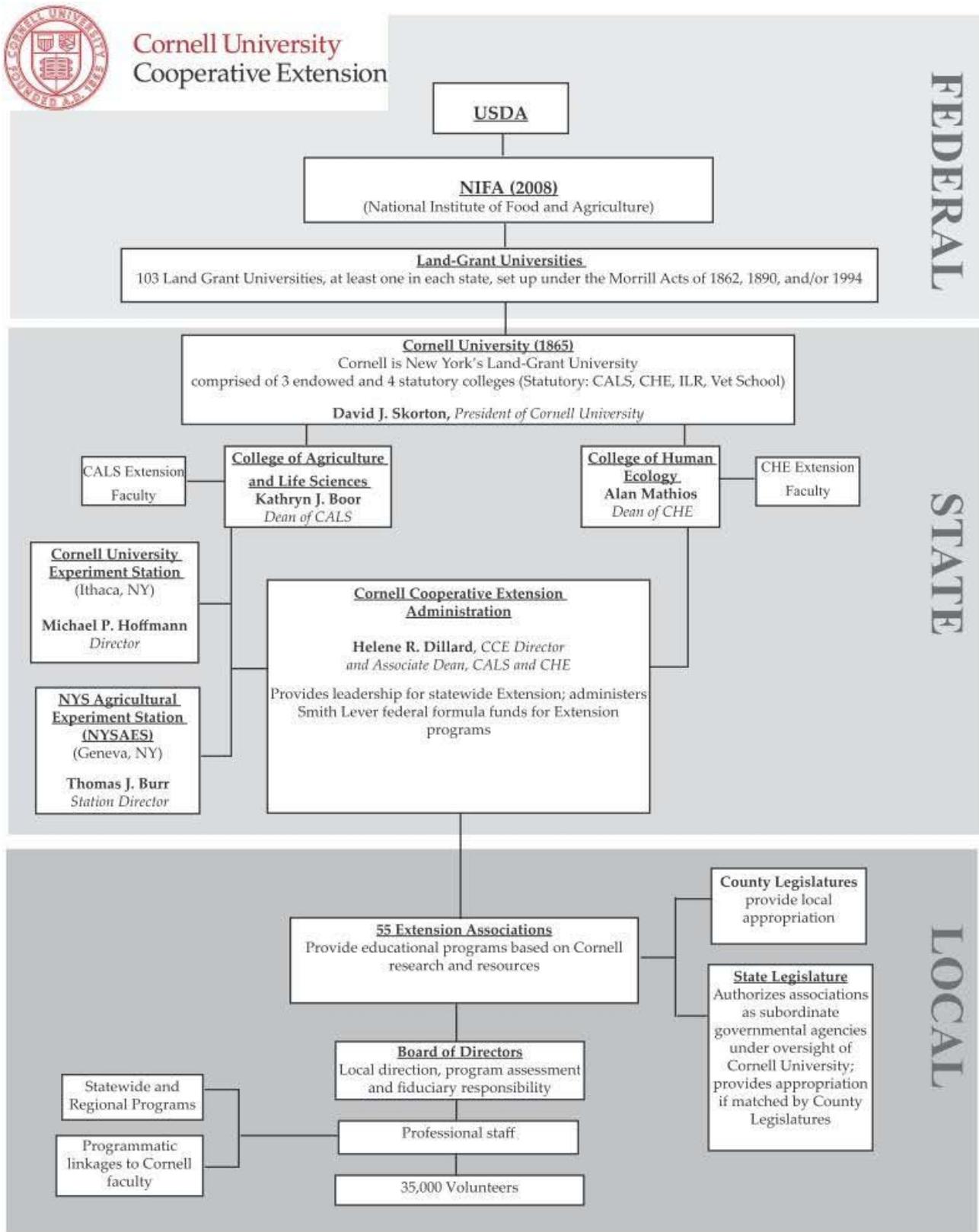


図 コーネル大学 CCE 組織チャート³

2.2 CCE の活動分野

CCE は農業改良試験場をコーネル大学の Agricultural Experiment Station とニューヨーク州の Agricultural Experiment Station の 2 つ持つ。「Agriculture and Food Systems」に関連する活動内容には、Ag Economics and Policy (土地利用の問題、農業従事者、マーケティング等の農業経済と政策)、Environmental Management (土壌改良や農薬等の環境管理)、Food Safety and Agrosecurity, Horticulture (フルーツ、野菜、ブドウ栽培、ワイン技術、ガーデニング)、Local Foods, Production Agriculture (乳牛、農作物、家畜生産)、Sustainable Agriculture (有機生産、小規模農家)がある⁴。大学研究者の実際の関わり方について、Applied Economics & Management を専門とする研究者のアウトリーチ活動の例では、仕事の配分は 50%を自身の研究、50%がエクステンションに関連する活動に割く。一方、契約上 50%ずつであっても最初に雇用された年は 70%位エクステンションに時間を費やし、その多くはネットワーク作りだという。学生の研究活動では農家を訪ね協力を得てデータもとることが多い。カンファレンスの開催もステークホルダーに集まってもらうことで、地域課題について共有し、カンファレンス以降のワークショップによる教育活動を意図として行う。

「Environment and Natural Resources」に関連する活動内容には、Environmental Land Use, Invasive Species, Water Quality, Waste Management, Wildlife Management & Forestry, Heating with Wood as an Alternative Fuel がある⁵。Natural Resources を専門とする研究者の例では、仕事の配分は 30%を自身の研究、70%がエクステンションに関連する活動に割く。シカ被害の現状分析と対策を中心に、州の野生生物局と共同で研究を行うことが多い。開発した教育ツールにはシカ(White-Tailed Deer)管理のためのテクニカルガイドブックや DVD 等がある。

「4-H Youth Development」に関連する活動は、青少年を対象に科学教育を主とする After School Program (学外活動)である。現在、Cooking Up Fun, Fiber Science & Apparel Design Programs for Youth, Early Childhood, Thinking Like a Scientist, ACT for Youth Center of Excellence, ACT Youth Network, ACT Youth Network, Risky Decision Making in Adolescents, Adolescents and Risk: Helping Young People Make Better Choices, Self-Injurious Behavior, Children, Youth and Families at Risk (CYFAR), Children, Youth, and Families Education and Research Network (CYFERnet)の 12 のプログラムが実施されている⁶。今回、インタビューを行った研究者のうち、7 名が青年期に 4-H クラブに参加していた経験を持っていた。なかには祖父がエクステンション・エデュケーターだった経験をもつ研究者もいた。

「Emergency Preparedness」に関連する活動内容は、CCE としての災害時の対応である⁷。ハリケーンによる洪水によって被害がもたらされた農家に対応すべく、CCE は WEB で情報を提供するため Reducing the impact of disasters through education (教育を通じて災害被害を最小限に)を合言葉に「York Extension Disaster Education Network (NY EDEN)」⁸を設置、WEB 以外では地域のエクステンション・エデュケーターが中心となって、訪問活動を行った。

「Gardening」に関連する活動内容には、Master Gardener Volunteer Program, Garden-based learning for youth, Community gardening があり⁹、Horticulture を専門とする研究者の例では、仕事の配分は 20%を自身の研究、20%がエクステンション、10%講義及び指導、50%大学運営に関連する活動に割く。開発したツールには WEB でのベリーフルーツの病害虫診断¹⁰、園芸愛好家に対する Q&A 等がある。「Gardening」に関連する大学施設には Cornell Plantation がある¹¹。Cornell Plantation は Master Gardeners (ボランティア)と Cornell Cooperative Extension county horticulture educators と協働したアウトリーチプログラムを展開している¹²。また、1911 年頃、Cornell Plantation では Liberty Hyde Bailey が Anna Botsford Comstock と共に「Nature Study (自然学習)」のハンドブックを作成、小学校教員とともに Nature Study Movement を展開しており、いわば米国における理科教育分野における自然教育の発祥の地でもある。Cornell Plantation は独自にフルタイムのプログラムコーディネーターを 2 名雇用し、児童・青少年を対象とした科学教育プログラムを運営されている。現在、Cornell Plantation は未就学児童～小学 5 年生までを対象にした Kid's discover the trail!の科学教育プログラムを地域の小学校とともに実践している。

2.3 教育を通じた科学と地域社会との連携

コーネル大学では科学教育を通じた科学と地域の連携がかなり進んでおり、その教育の対象となる範囲も広い。Morrill Act の下、大学の研究を地域とつなげることが約束されていることもあるが、すべての Land-Grant University においてコーネル大学と同規模の共同普及事業が実施されているわけではない。今回の調査で強く感じたのは科学をバックグラウンドに持つ研究者と地域コミュニティとの間を結ぶ連携体制がしっかりしているということである。CCE のディレクター以下、実務を遂行する CCE の運営組織がよく機能していて、それぞれの分野の専門家と地域との連携がスムーズになされている。今回、インタビューを行った研究者の多くが、「地域の課題を吸い上げて自分の研究とつなげる」

ことに強い使命感を持っていることであった。また、その積極的な姿勢が、省庁や大学からの研究資金だけではなく、個人や産業界からの資金の獲得につながっている点も見逃せない。それは **Cornell Plantation** の科学教育プログラムの一つは個人レベルの寄付を集めて運営されていることからもうかがえた。

3. おわりに

筆者が女子大学に在籍していることをディレクターより事前に知らされていた女性研究者の一人、Kao-Kniffin 博士の計らいにより、氏とのインタビュー終了後、プレジデントハウスで予定されていた Nan Keohane 博士のレクチャー「Re-Envisioning the Academy for Women (and Men)」に参加する機会を得た。Keohane 博士は Wellesley College (1981-1993) と Duke University (1993-2004) で学長を務めた人物である。レクチャーは、大学がもっと女性研究者のキャリアパスが明確になるように努力をしなければならない使命があり、それは女性のみならず、男性にとっても研究しやすい、より良いアカデミック界での倫理とリーダーシップが育つための環境を整えることになるという趣旨であった。米国では女性科学研究者の比率は我が国よりも高く、その環境も整備されていると筆者が予測していたのに反し、米国では、科学が好きな女子を「珍しい、変わっている」という言葉がまだ多く聞かれ、女子学生の科学分野への進学への伸び悩みが憂慮される状況にあるという。特に、アメリカ人女性である博士がどこに行っても「女性なのになぜデューク大学の学長になれたのですか。なにか特別なことをしたのですか」という質問を受けることが多かったというエピソードには少なからず驚いた。博士はその都度、「なぜなれたのかとは考えたことはありません。特別なこともありません。なぜなら、私はできると思ってやってきただけです」と答えてきたという。わたしは博士のこの言葉に、女性リーダーが創出される背景には、リーダーとなる個人のモチベーションが強く影響をしていることを肌で感じる事ができた。博士の現在の関心および努力目標は科学分野の次世代女子の育成だという。

米国では 1970 年代にはじまった社会の科学への不信から、科学と社会の相互関係についての研究が盛んになっている。日本でも近年は研究者と市民の対話、研究者による小学校中学校への出前授業などが活発に行われており、大学が中心となって地域で求められる研究課題を抽出し、アウトリーチ活動のプログラムを開発・実践することは今後ますます進展が期待される分野である。博士後期課程では科学教育支援を通じた大学の地域連携の在り方を確立することを目的に、「現職教員および教員養成における効果的な科学教育の在り方」をテーマに、その評価方法の研究に取り組み、現在も論文執筆を行っている。今回の海外調査によって得た知識を活かし、米国で成熟しつつこの分野の研究報告をもう一度体系的によく理解することが必要である。本調査の内容は博士論文執筆にあたり、「海外における当該研究分野の動向」(仮題)として独立した一章に含まれる予定である。今回、「女性リーダーの育成に関わる調査研究」プロジェクトの学生海外支援を受け、海外の研究発表の場で行動することにより得た経験は今後の自信となることは間違いないだろう。また、自分の研究を見直すとてもよい機会を得ることでできた。このような機会を与えてくださった方々に心から感謝したい。

注

1. Cornell Cooperative Extension - About Extension. <http://www.cce.cornell.edu/learnAbout/Pages/About.aspx>
2. New York State (Cornell Cooperative Extension). <http://www.aplu.org/document.doc?id=2294>
3. Cornell Cooperative Extension. <http://www.cce.cornell.edu/learnAbout/Documents/Organizational%20Structure%20FINAL.pdf>
4. Agriculture and Food Systems. <http://www.cce.cornell.edu/Ag/Pages/default.aspx>
5. Environment and Natural Resources. <http://www.cce.cornell.edu/Environment/Pages/EnvironmentandNaturalResources.aspx>
6. 4-H Youth Development. <http://www.cce.cornell.edu/Youth/Pages/4-HYouthDevelopment.aspx>
7. Emergency Preparedness. <http://www.cce.cornell.edu/eden/Pages/default.aspx>
8. Extension Disaster Education Network. <http://emergencypreparedness.cce.cornell.edu/Pages/default.aspx>
9. Gardening. <http://www.cce.cornell.edu/Gardening/Pages/default.aspx>
10. The Berry Diagnostic Tool. <http://www.fruit.cornell.edu/berrytool/index.html>
11. Cornell Plantation. <http://www.cornellplantations.org/>
12. Outreach: Cornell Plantation. http://www.cornell.edu/outreach/programs/program_view.cfm?ProgramID=721

参考文献

Comstock, A. (1967) *Handbook of nature Study*, Ithaca: Cornell University Press.

Rhodes, F. (2001) *The creation of the future*, Ithaca: Cornell University Press.

ほった のぞみ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 ライフサイエンス専攻

指導教員によるコメント

コーネル大学はノーベル賞受賞のバーバラ・マクリントック女史の出身校であり、科学分野の優秀な研究者が多数集まっている。このような環境において、研究者と地域社会を連携する部門が有意義に運営されていることは、我が国にとっても学ぶことが多い。今回、堀田さんは、コーネル大学において 21 名もの第一線の研究者と面会を行い、科学と社会学が連携する「アウトリーチ活動」の出発点ともなったコーネル大学における地域連携の歴史と、現在の状況を学ぶことができた。この分野は、我が国においては、まだ系統的に研究されておらず、堀田さんの博士課程の研究にとって、非常に有意義な海外調査となった。さらに、堀田さんが今後、本分野において研究を発展させるためには、専門家からの聞き取り調査の能力と専門家とのネットワーク作りも欠かせない要件のひとつとなる。今回のインタビュー調査は、それらの修得の手がかりになるものでもある。以上のことから、堀田さんの海外調査研究は、大きな成果につながるものであると高く評価できる。

このような博士課程の学生の研究支援を、インパクトある形で行っているお茶の水女子大学「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」委員会と、コーネル大学共同普及事業部のご支援・ご協力に深く感謝申し上げます。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (自然・応用科学系)・千葉和義)

学生海外調査研究	
ロンドン大学学会 Spectres of World Literature と世界文学の現状	
	松浦 恵美
	比較社会文化学専攻
期間	2011年9月6日～2011年9月17日
場所	イギリス（ロンドン）
施設	ロンドン大学、School of Advanced Study

内容報告

1. 本調査研究の必要性と目的

現在世界各国における文学研究のあり方は大きな変化を迎えている。19世紀以降の文学研究では、ヨーロッパ・北米を中心とする西洋の文学テキストに特権的な地位が与えられていた。しかし現在では、アジア、アフリカ、オセアニア、ラテンアメリカなど世界各地域から発信される文学テキストに注意が払われ、研究対象としても批評の生産の場としても重要な位置を占めるようになってきている。21世紀に入りますますます加速するグローバリゼーションと相まって、「西洋文学」から「世界文学」への変化は現在の決定的な潮流となっている。それに伴い、従来の西洋中心の文学研究を脱して、「世界」で起こっている文学を取り巻く現象を論じるための批評理論および実践が求められるようになってきている。

日本における英米文学研究は、これまで主に本国の研究をなぞる形で進められてきたといえる。現在に至るまで、日本における文学研究には西洋の理論を輸入しそれを正確に使って西洋のテキストを読むという基本的傾向があったことは否定できない。このような姿勢は、これまでも問題視されてきたものであるが、今後さらに厳しく問い直されるべきものである。西洋以外の地域からの文学研究では、ガヤトリ・スピヴァクやホミ・K・バーバ、レイ・チョウなど、アジア出身の文学者が顕著な成果を表している。今後日本から文学研究を行うに当たって、どのような姿勢が取られるべきか、そして何がなされるのかを考えるのは必要なことである。

報告者は、19世紀から20世紀初頭のアメリカの小説家ヘンリー・ジェームズの研究を行っている。今後の世界文学において、ジェームズについての研究は相反する二つの側面を同時に示すであろうと考えられる。第一に、ジェームズは近代におけるコスモポリタンな作家の代表的人物である。彼は創作活動を始めた1870年代にヨーロッパにわたり、主にイギリスに滞在して大西洋の両岸の文化と人物を描いた。アメリカとヨーロッパの両方の文化を比較しながら描き、そしてどちらかに絶対視するのではなく根なし草の立場をとり続けた。この点において、ジェームズは比較文学の先達をつけた作家だと言える。また、常に二つの文化の邂逅から生まれるものを描くと言う意味でも、ジェームズは従来の国民文学では捉えきれない、トランスナショナルな作家である。一方で、ジェームズの受容のされ方には西洋中心主義の影響が付きまとっている。ジェームズは西洋文学のキャンソンの一人とされる作家である。そのため、西洋以外の地域からジェームズ研究を行うことには、必然的に西洋中心主義の問題と向かい合うことが伴われる。これまでの日本におけるジェームズ研究を見ると、日本という視点を生かしたジェームズ研究は稀であり、また日本と西洋との間の非対称性という問題は透明なままにされてきた。今後のジェームズ研究には、むしろ非西洋からの視点を生かしたこれまでとは異なるアプローチが積極的に求められるところである。

今回の海外調査研究では、ロンドン大学の School of Advanced Study で行われた学会 Spectres of World Literature に参加した。今回の学会では、イギリスを中心としつつ、UAE、バングラデシュ、日本、ポルトガル、ルーマニア、スロバキア、フランス、ドイツ、イスラエル、アメリカ、カナダなど、アジア、ヨーロッパおよび北米地域からの発表者が、現在起こっている新しい「世界文学」という現象について発表を行った。いずれも現在進行中の文学をめぐる新しい状況について、そしてそこに内在する可能性と危険性について深く切り込んだ内容であり、今後の文学研究において求められる姿勢を考える上で示唆に富むものであった。

2. 調査内容

今回の学会の発表内容は、大きく二つの傾向に分けることができる。一つは現在進行している「世界文学」という現象を理論的に分析するものである。もう一つは、欧米に限らずアジア、アフリカやラテンアメリカなど非英語圏の地域の文学を個別に分析したものである。以下それぞれの内容について紹介したい。

2.1 「世界文学」—マルクス主義、ポスト植民地主義、ポスト冷戦とグローバリゼーション

まずは、「世界文学」そのものについて、その言葉により表わされる現在の文学をめぐる状況がどのようなものなのかを理論的に考察する発表について紹介する。「世界文学」とはそもそも1827年にゲーテが作り出した概念である。国民国家の成立とともに確立されていった国民文学と対比して、ゲーテのいう「世界文学」は、一国家を超えたより広い射程範囲を持ち、異文化との交流とそれにより生じるテキストの流通を介する文学のあり方を予期するものであった。しかしその後の19世紀の「世界文学」は、実際にはヨーロッパの帝国主義と植民地主義を背景として、ヨーロッパの文学を中心とした「西洋文学」に留まるものであった。しかし、20世紀中盤以降、ラテンアメリカやアジア、アフリカなどヨーロッパ以外の地域における文学が注目を集め、さらにグローバル化が進む現代においては、ついに世界全体を舞台とする「世界文学」が実現しつつあるように見える。しかし、「世界文学」の名で呼ばれる現在の文学的現象は、様々な政治的、経済的そして歴史的要因により決定されている。この新しい状況を精緻に読み解き言説化することが、世界文学の研究においてまず求められることである。そのためのキー概念として本学会で言及されていたのが、マルクス主義、ポスト植民地主義、そしてポスト冷戦期のグローバリゼーションについての歴史的思考である。

世界文学の分析においてマルクス主義的分析は中心となる手法であり、本学会でも多くの発表者がこれを軸として発表を行った。Warwick大学の4人の研究者によるラウンドテーブルWorld Literature: Combined and Uneven Developmentは、世界文学が成立する基盤に注目する内容の発表であった。現在の文学的状況は、19世紀以降の西洋文学の覇権の状態からは脱したように一見は思われる。しかし実際には世界文学は「結合した不均衡な発展 (Combined and Uneven Development) の上にこそ成立している。現在世界文学を成立されているのは、世界各地域において産出される文学およびそれを取り巻く状況の質的等価性ではなく、むしろその不均衡さであるというのが彼らの基本的な見方である。この不均衡な状態は、近代の生んだ政治的経済的不平等のから直接派生したものであり、その意味において世界文学の現状は近代のプロジェクトの延長線上にあるものであると彼らは考える。発表者の一人Graeme Macdonald氏は、現在の「資本主義世界システム」が近代ヨーロッパの生んだ体制であることを確認しつつも、ヨーロッパを単一均質なものとみなすことに異議を唱え、むしろヨーロッパをより小さな単位からなる複合体と捉えなおし、それを資本主義世界システムへの抵抗に繋げるべきであると主張する。また、Nick Lawrence氏は、世界文学の主要な論客であるフランコ・モレッティとパスカル・カザノヴァを参照し、世界文学の成立に経済／文化資本の不均質さが不可欠であることを述べた上で、それがRoberto Bolañoの小説2666にどう反映されているかを論じた。また、Pablo Mukherjee氏は、アフリカに出現している大都市、いわゆる「アプロポリス」に注目し、グローバリゼーションが根本的な蓄積の不均等さによるものであることを論じた上で、資本として扱われる文学と西洋の普遍化という危険について論じた。これらの発表においては、近代において形成された資本主義を中心とする社会システムがいかに現在の世界文学を決定しているかが論じられ、近代及びヨーロッパ中心主義が一見見えないところで現在も進行していることが指摘された。これらの主張に対しフロアからは、それでは彼らは「近代」という非常に広い範囲を指し示し未だ曖昧な概念をどういう意味において捉えているのかについて問う質問が挙がった。世界文学の理論化においては、現在から逆照射する形で近代を再考することが要求されるのである。

マルクス主義と並んで重要となるのが、ポストコロニアルな状況についての考察である。世界文学の活況がポストコロニアルな世界において実現したのは事実である。しかしポスト＝植民地とは、植民地主義が完全に断ち切られたのではなく、それがより不可視で根深いところで存在し続けている状況である。それは当然現在の世界文学の状況とも深く関係している。基調講演を行ったBenita Parry氏は、グローバリゼーションをポストコロニアリズムとポストマルクス主義の立場から論じた。彼女の関心は、グローバリゼーションのもとに支配を強めるヘゲモニックな世界秩序に対し新しい抵抗の政治は可能かということにある。フレドリック・ジェイムソンを参照しつつ、彼の思考にある楽観的な傾向を危険視し、より根本的な認識論的マッピングの調整が必要であることを主張した。Ben Etherington氏によるRethinking Materialism and Postcolonial Literary Studiesもまた、ポストコロニアリズムとマルクス主義を関連させながら世界文学の内実を考察する試みである。世界文学における「唯物主義的ポストコロニアル的遠近法」はどのように構成されるかが氏の発表の主題である。彼の発表は、テオドール・アドルノにならって、「物質」にかかずらうのではなく、「真実内容」に注目し、

それにより「現在のグローバルな社会・経済秩序に潜む構造的矛盾」を解明することを目指すものであった。

グローバル化について、それが冷戦以降の世界秩序であることに留意し、そこにおける資本主義の覇権と共産主義のその後について考察する発表もあった。Neil Lazarus 氏の発表 *Spectres Haunting: Postcommunism and Postcolonialism* は、冷戦以降の世界秩序について再考を行うものであった。ソビエト連邦崩壊以降、共産主義は完全に無効になったのだろうか。ポストコロニアリズムの世界においてかつてのヨーロッパ中心主義が形を変えて生き残っているように、氏は現在の世界において共産主義の残滓もまた存在することに着目する。また、Nicholas Brown 氏の *The Identity of Identity and Difference: Modernism and African Literature* は、ヘーゲルの弁証法的思考がマルクスを経て冷戦期まで受け継がれてきたことに注意を払いつつ、ポスト冷戦期のポストモダンの世界を比較する。またユートピアは提示可能かという問題について、政治的主体が不在となっている現代においてむしろ詩的なものに政治的可能性を見出そうと試みるものであった。

2.2 各地域の文学および批評実践

以上のような理論的側面に重点を置いた発表の他に、世界各地域で生産されるテキストとその受容についての個別の分析の発表があった。ここではその対象となるテキストの多様性が目立ったのとともに、その受容が必然的に資本主義に支配された世界市場においてなされていることが確認された。

発表の中で最も盛んに扱われたのはアフリカ出身の作家によるテキストである。現在アフリカ各国の文学は、特にヨーロッパの読者に広く受け入れられ、それに伴って文学研究においても盛んに取り上げられている。一方で、この隆盛の背後にある支配的システムに対する批判と分析も活発に行われている。Ranka Primorac 氏はザンビアにおける文学の状況について発表を行った。1980年代の経済危機によりザンビアの文学の発展は停滞を迎えたが、しかし結果的にはこの停滞により英語圏文学に取り込まれることを免れ、若い作家を中心にザンビア独自の文学が形成されたという。Madhu Krishnan 氏の発表では、Chris Abani の *Graceland* と Chimamanda Ngozi Adichie の *Half of a Yellow Sun* という二つのテキストが取り上げられた。これらの作品は西洋メディアにおいて高く評価されると同時に、国内からは西洋の読者層に対して書かれた作品であるという批判も受けた。しかしまた、これらのテキストにはナイジェリアの土着の文化も色濃く反映されている。氏はこのテキストを、フランツ・ファノンの言う「伝統的理想主義とも西洋帝国主義とも異なる第三の、自由主義的国家文化」を予期するものとみなす。また Anna Bernard 氏は、エドワード・サイードをはじめとするパレスチナ知識人たちによる英語で書かれたメモワールについて論じた。これらのテキストはパレスチナの人々の生きた経験を大都市の読者に届ける役割を果たしたが、それは同時にパレスチナで起こった危機を普遍化するのではなく、それをグローバル化の一部として取り込まれるものとしてしまっている。しかしまた、この現象を市場化や悪しき読みの実践としてではなく、戦略的な書記のモードと解釈することも可能である。アフリカから西洋に向けて書かれたこれらのテキストについては、常に双方向の解釈が可能であり、そのどちらの効果も丹念に分析することが求められているということを感じた。

また、これら非西洋地域から出発し西洋において消費されるテキストを、市場の働きに焦点を当てて分析する発表も目立った。Kate Haines 氏もまた Adichie の *Half of a Yellow Sun* を取り上げ、このテキストがどのように市場に紹介され、どのような反応を引き起こし、そして主にインターネット上においてどのような新しい場を生じさせたかを紹介した。その上で、現代アフリカ文学の生産と受容を、市場を介した相互的な作用として分析した。Pavithra Narayan 氏はインドの出版事情について紹介した。Salman Rushdie のような国際的に顕著な活躍をする作家がいる一方で、あるいはまさにそのために、インド国内の出版社はトランスナショナルな巨大出版社に依存する形を脱出できていない現状が存在する。この状況を氏は「グローバルな資本構造に取り込まれた社会—経済的乖離」として批判的に分析する。また、Walter Göbel 氏は、18世紀から19世紀にかけて成立したイギリス小説に内在する西洋個人主義、帝国主義、資本主義の根本的な影響が、ポストコロニアルの現在西洋以外の地域において生産される小説の中にいまだ機能し続けていることを、Chinua Achebe の小説 *Things Fall Apart* の主人公 Okwonkwo の分析を通じて論じた。

また、アフリカ文学の流通を特に西洋における受容に焦点を当てて論じた発表もあった。Ruth Bush 氏は、英語で書かれたアフリカ系作家の小説がフランス語に訳されフランスで流通する過程を取り上げ、カザノヴァが著書「文学の世界共和国(邦題：世界文学空間—文学資本と文学革命)」で論じた「ポスト／コロニアル作家のパリでの『悲劇的』立場」の再考を試みた。また、Sarah Burnautzki 氏も同じくカザノヴァの論を参照しつつ、アフリカ文学のフランスにおける受容に際して働く社会的政治的な構造的拘束について論じた。

最後に、アフリカに限らず世界各地域の特定の文学をめぐる現象に関しての発表があった。それぞ

れの地域において固有の現象が出現しており、世界文学の名称のもとでそれらを単一の大きな言説に還元することなく分析することの必要性が求められることが感じられた。Kerstin Oloff氏は1970年代世界に大きな印象を与えたラテンアメリカ文学について、特に「ブーム・ノベルの最後の一人」ともいわれるCarlos Fuentesの小説 *Terra Nostra* を取り上げ、このテキストを当時のメキシコの政治状況を包摂したメタ小説として読む。Yael Maurer氏はRushdieの描くボンベイを、「ローカルを超えたローカル」、「コスモポリタンな場」として再読する。また小林英里氏は、2007年より河出書房から出版された池澤夏樹編集による世界文学全集を取り上げ、現在の日本における世界文学のあり方とその受容を紹介した。

3. 本調査から得られた結果と今後の研究課題

本学会のほとんどの発表に共通していたのが、世界文学とは各地域の文学テキストが、等価に扱われるのではなく、政治的経済的コンテクストを反映して不均質な形で生産され流通しているという認識である。Warwick大学の研究者たちが示した「結合した不均衡な発展」という概念は、現在の世界文学を考える上で常に意識しておくべき概念であろう。同時にまた、この不均衡な世界における文学の流通は、決してヒエラルキカルに上流から下流へと一方的に進行しているのではない。現代においてもヨーロッパ中心主義は形を変えて根強く残っているし、言語においては英語の覇権的な状況がますます強固なものとなっている。しかし、アフリカやアジアなど非西洋地域からの文学が流通する際、それは、言語あるいは表象のレベルで覇権的権力による圧力が加えられているとはいえ、従来聞かれることのなかった声を伝える働きを伴う。このような新しい流通経路を戦略的に有効に活用していくことは、ヘゲモニックな世界システムに少しずつでも変化を与えることを意味する。「世界文学」が持つこうした多方向的な性格をどう活用していくかが、今後の文学研究者が考えるべき課題の一つであろう。

このように、政治的経済的要因に決定づけられたものとしての世界文学を捉えた上で、今後の日本の文学および文学研究においては、まず日本の政治的、経済的および歴史的立ち位置を認識し、それと関連させて世界の文学テキストを捉える事が必要となるだろう。ポストコロニアリズムの時代において、日本はほかのアフリカやアジアの諸国とは異なる立場にあるように思われるかもしれない。しかし、西洋の植民地主義を内面化しそれを積極的に実践したことからいえば、現在の日本も、そして日本における文学批評も、いまだ西洋中心主義の、そして植民地主義の影響下にある。レイ・チョウが中国および東アジアにおける文学研究について述べているように、今後の文学研究を行うに当たってはまず「文化帝国主義の遺産—その遺産を無視するのではなく—の内部における自己耽溺的な価値生産」(チョウ、23)という問題を検討することが必要となる。そうすることで、第一に世界の質的に不均質な文学的状况の中における日本の立場を同定することができるし、そこからほかの地域の文学に対する有効な読みを産出するための戦略を作り出すことができるのである。

今回の学会参加を通して、現在の世界文学の状況について、そして現在文学研究を行うに当たって必要な姿勢について考察する機会を得た。今後の博士論文執筆にあたり、自分の研究を行う立ち位置を明確にし、そこからこそ得られる考えを表わすことが必要であるということ再認識できた。また、今回参加したロンドン大学のSchool of Advanced Studyでは毎年様々な学会を開催しており、近いうちに発表者として参加したいと考えている。今後国際的に研究を発表していくことがあらゆる研究者にとって不可欠のこととなっていくが、その準備としても今回の学会参加は有意義なものであった。今回得た問題意識と世界文学という新しい枠組みの中でどのように研究を行うかという課題を、今後の研究の土台としていきたい。

参考文献

Chow, Ray. (1993) *Writing Diaspora: Tactics of Intervention in Contemporary Cultural Studies*, Oxford: Indiana UP. (本橋哲也(訳) 1998『ディアスポラの知識人』青土社)

まつうら めぐみ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

報告者がこれまで考え、了解していたディシプリンとしての「文学」についてのさまざまな考察や見解が、実際に多くの多様な研究者たちによって議論され、検証され、報告者がそれらを共有したという実感をもてたということがわかり、海外調査は有意義であったと考える。報告者が述べるように、

国民文学に対置する世界文学への接近の方法はしかし、やはりマルクス主義、ポスト植民地主義、そしてポスト冷戦期のグローバリゼーションについての歴史的思考を抜きには議論できないし、世界文学とは各地域の文学テキストが、等価に扱われるのではなく、政治的経済的コンテクストを反映して不均質な形で生産され流通しているという認識も的確である。報告者の学会の討論や発表に関する全体的な報告自体は、やや淡々と単調に中立的に紹介されている感があるが、その上で、最後に今後の日本の文学および文学研究に対する意見（まず日本の政治的、経済的および歴史的立ち位置を認識し、それと関連させて世界の文学テキストを捉える事が必要となるだろう。）を述べていることが印象に残った。というのも、しばしば海外（特に欧米）の学会で日本人研究者が感じる異文化とは、外国の研究者らの強固なポジショナリティ（立場性）の表明であると常々思うからであり、なによりも、それが実感として感じ取れたのがいちばんの収穫だったのではないだろうか。

（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科（文化学系）・戸谷陽子）

学生海外調査研究	
A Research on Plagiarism Practices in English Writing	
姚 馨	比較社会文化学専攻
期間	2011年9月15日～2011年10月6日
場所	北京・瀋陽（中国）
施設	中国石油大学（北京校）・瀋陽工業大学

内容報告

1. Purpose of the research

My area of research is the teaching of English writing. I am especially interested in the phenomenon of plagiarism in English writing among Chinese college students. The frequent occurrences of Chinese students' plagiarizing practices in intercultural contexts have attracted the attention of many educators and researchers for a long time. Nowadays in the field of English education, it is common sense that the concept of authorship and the rules of quotation/citation are Western-originated. For example, Currie (1998) summarizes Pennycook and Scollon pointing out that "...the traditional view of plagiarism is ideological: it unjustifiably elevates a Western concept to the status of norm (Pennycook, 1994, 1996; Scollon, 1995) and privileges a 'concept of the person established within the European Enlightenment' (Scollon, 1995)". Currie also suggests that college educators should be "aware of the different cultural attitudes toward textual ownership and textual borrowing" in order to deal with cases of plagiarism "from a perspective of inter-cultural understanding" (Currie, 1998). There is a mainstream opinion that Chinese students have a weaker consciousness about this, and thus are more likely to plagiarize during the English writing process.

The focus of my study is on students' attitude toward plagiarism in Chinese universities. The purpose of my study is to find out whether Chinese college students have the notion of authorship and how they define "plagiarism", and to what extent that they know the rules of text borrowing in real writing practices. The study is being conducted in phases. Currently I am collecting Chinese college students' writing samples in order to reveal the writing habits of my target students and analyze to what extent they understand and are able to apply the rules of text borrowing. Overseas research becomes extremely important at this point since these data can only be collected in China.

Financially supported by the Student Overseas Research Program, I was given the chance of conducting my research at the China University of Petroleum (Beijing) and the Shenyang University of Technology. I was able to collect 105 writing samples from these two universities. These writing samples will provide valuable data for my future study.

2. The Chinese context

Since how instructors teach English writing rules and techniques will have a big influence on their students' writing habits, I firstly had talks respectively with the three instructors who taught English classes at the two universities mentioned in Section 1. I also audited their English writing classes before collecting data. My purpose of doing this was to uncover typical teaching styles in the Chinese context. As Pennycook emphasizes in his well-known research on the issue of Chinese students' plagiarism practices, the aim is not to construct an "exotic Other" but to explore "ways of understanding learning in a Chinese context" (Pennycook, 1996).

By interviewing the three instructors and auditing their classes, a summary can be made as follows:

2.1 Current situation of English teaching in Chinese universities

Except for students who major in other languages such as Japanese, basically English is a

required course for all college students.

For English majors, there is a variety of relevant peripheral classes (for example, History of American Literature, English Poetry, and Western Civilization) to choose besides compulsory courses. Compulsory courses are usually those relating to the four basic English skills, like Reading, Writing, Listening, Speaking, Comprehensive English, Advanced English, and so on. For third and fourth-year students, more extended courses such as Translation, Linguistics are offered. The course schedule is usually fixed. For instance, Translation course is only offered in the third year (courses and time schedules vary from university to university though the system is true of most universities in China). Students cannot choose when to take them, and students of different years cannot take the same optional course together.

For students of other majors, English course (usually called "College English") is compulsory in the first and second years. After that, students can also take some elective English courses that are offered especially for non-English majors. Usually College English is offered twice a week in most universities, and other elective courses once a week. The four basic English skills, say, Reading, Writing, Listening and Speaking are woven into the same College English course, rather than being taught separately.

2.2 Textbooks

Unlike in Japan or many Western countries, textbooks and teaching materials of compulsory English courses cannot be decided by instructors in Chinese universities. In most cases, textbooks are designated by the university and will be used continuously for a period. However, instructors are allowed to introduce some extra teaching materials into their classes provided the teaching of the textbook contents will not be influenced. Instructors of English majors have more freedom in using other teaching materials. On the other hand, instructors are usually allowed to choose their preferred textbooks and/or teaching materials for elective peripheral courses. Nowadays many textbooks have CDs attached.

2.3 Writing classes

2.3.1 Non-English majors

As mentioned in (1), for non-English majors--the majority of college students--the four basic English skills of Reading, Writing, Listening and Speaking are usually contained in one textbook. There is no separate English Writing course. A typical textbook structure is as follows:

Lesson 1: United States of Play: The Entertainment Economy
Text
Exercises
Key
Translation of the Text¹

Writing is usually dealt with in the Exercises section. Rather than being taught systematically, writing skills are learned by reading, studying and imitating the model text. Then in the Exercises, students are asked to write a composition concerning some relevant topics. The unit design varies from textbook to textbook. However, the basic frames are very similar. For example,

Unit 1
Part One Vocabulary and Structure
Part Two Translation
Part Three Reading Comprehension
Part Four Writing²

Although the sections of every unit are different from the first example, there are no significant differences in that students also need to learn vocabulary (which will appear in the model text), reading skills, and then writing skills by studying and imitating the text.

Some universities use two textbooks in the same College English course. One concentrates on the skills of reading and writing, and the other on listening and speaking. There are also other kinds of textbooks and corresponding curriculum designs. However, for non-English majors, writing is usually

not a separate course in most universities. What instructors can do with writing in a very limited time is only to teach some basic writing skills. Academic Writing is not available.

2.3.2 English majors

Throughout the four years, English major students are required to take Basic English Writing or Advanced English Writing classes (the course titles can vary in different universities) according to their academic years. Writing classes are offered twice a week. The classes are more textbook-centered in the first two years, while in the last two years instructors have much more freedom in introducing other complementary materials and various kinds of training methods. The three instructors I interviewed summarized most of the major teaching styles used not only in their own classes, but also in other universities in China:

- Teaching skills of different types of English writing (for example, narration, description, exposition, and argumentation) by asking students to read, analyze and imitate model texts.
- Teaching writing skills for practical use (for example, resume, invitation letter, application letter and so on).
- Analyzing students' writing (usually very good ones and those containing typical problems and structure errors).
- Teaching students how to write drafts and make self-correction.
- Peer reading. This is a method that was introduced not very long ago. Students are asked to read, correct, and give advice on each other's drafts.
- Asking students to write journals and make portfolios. According to my three interviewees, writing journals is not new at all but applying portfolios to teaching and assessing English writing is quite new in Chinese universities.
- Teaching how to write a literature review. This is for advanced learners only.
- Academic writing. Recently there are also some universities that offer an Academic Writing course to undergraduate students once a week. But it is usually included in the Advanced English Writing course in most universities. This means the section of Academic Writing can only be taught in one to two weeks every semester. According to my interviewees, when they teach academic writing skills, more emphasis is put on thesis, theme and structure. References or Bibliography are introduced as a necessary part of the thesis structure. However, citation/quotation rules, how to borrow from other texts, and how to credit sources correctly are seldom taught.

2.4 Language Proficiency Tests in China

The College English Test (abbreviated as CET) is a language proficiency test system for Chinese college students. It is similar to the EIKEN Test in Practical English Proficiency in Japan. However, CET is only available and has special meanings to college students in China. For non-English majors, there are two kinds of CET tests--CET-4 and CET-6. CET-6 is of a higher difficulty level and optional, while CET-4 is in effect compulsory in that students cannot obtain their Bachelor's degree without passing the test first. In addition, most companies will also require the CET-4 certificate when recruiting college graduates. If students can pass the CET-6, they are considered to have more chances in job-hunting. As for English majors, there is a similar system called the Test for English Majors (TEM). And similarly, TEM-4 is necessary for obtaining the Bachelor's degree.

The CET-4 and TEM-4 scores, then, become extremely important for all the college students in China. Moreover, students' average CET-4 test scores also have an influence on the evaluation of the instructors. Thus, this system also brings with it some negative influence on the English teaching and learning process. I will only examine the writing part below.

On the CET-4 test, writing is the last part and contributes 15% of the total score. Students have thirty minutes to write a composition on an assigned topic. Word count is limited to around 120 words. In most cases students will be required to comment on the given topics or to write a practical composition such as an announcement or a campaign speech. On the TEM-4 test for English majors, the writing part includes an argumentation of 200 words and a short practical piece (for example, an invitation card) of 50-60 words. The argumentation constitutes 20% of the total score, and the short writing 5%. Time limit is 45 minutes.

As the CET-4 or the TEM-4 test score is a requirement for graduation, it is easy to imagine that

the instructors concentrate on the skills of how to deal with the test more than on writing itself. Non-English major students are especially influenced by this system. They are encouraged to read and imitate sample compositions, practice again and again writing 120 words in thirty minutes, and memorize some fixed writing structures. For English majors, on the other hand, things are better since after passing the TEM-4 test (usually in the second year), there is still time for them to learn English writing for their own sake.

When we talk about Chinese students' attitudes and writing habits, and the process of teaching and learning English writing in Chinese universities, its unique features as summarized above should also be taken into consideration.

3. The significance of my overseas study

By interviewing the three instructors who teach English at Chinese universities and observing their classes, I was able to become acquainted with the Chinese context of teaching and learning English writing. For most undergraduate students, there is a high possibility that they have not received any academic training in writing English. Criticizing them for improper citation might be unfair if writing rules were not taught clearly beforehand. Even if they know that plagiarism is bad, they may have no idea to what extent using sources can become plagiarism. This may have important implications for teaching English writing in intercultural contexts.

This overseas study also gave me a valuable chance to collect some actual compositions of Chinese college students. Through this, I have obtained a basic knowledge of the current situation and some detailed cases of plagiarism in English writing classes in China.

As mentioned in Section 1, the main topic of my doctoral project is about Chinese students' plagiarizing practices in university contexts. In the last three years, I have conducted a survey in order to investigate whether there are so-called "cultural differences" that are big enough to contribute to the frequent occurrences of Chinese students' plagiarizing practices in English writing classes. A questionnaire consisting of ten multiple-choice and free answer questions was used to research Chinese students' experiences of, attitudes toward, and knowledge of plagiarism. More than 500 responses were collected. This overseas study serves as a link between my past effort and further research on the same topic. It grants a positive prospect to show some down-to-earth cases of plagiarism in Chinese universities and the possibility of revealing some of the pedagogical origins of plagiarism. The interviews, class observations, and the writing samples I collected will no doubt be very meaningful in that these data can answer the question of whether there any deviations between the students' beliefs and the their actual performance and why. My primary aim in the coming academic year is to finish analyzing the writing samples and organize them into my dissertation. The data will be summarized and analyzed in a statistical way in order to obtain scientific and significant results. In summary, this overseas study helped me greatly in advancing my doctoral research.

Notes

1. Xie, Y. (2009). *College English, Vol.4*. University of International Business and Economics Press. This series of English textbooks are used in many Chinese universities.
2. Zheng, S. (2008). *New Horizon College English, Vol 3*. Foreign Language Teaching and Research Press. A widely used series of English textbooks for non-English major students.

References

- Currie, P. (1998). Out of Trouble: Apparent Plagiarism and Academic Survival. *Journal of Second Language Writing*, 7 (1), 1-18.
- Pennycook, A. (1996). Borrowing Other's Words: Text, Ownership, Memory, and Plagiarism. *TESOL Quarterly*, Vol 30. No. 2, 201-230

指導教員によるコメント

This report describes the author's recent overseas study trip to China to collect data towards her doctoral dissertation. Her area of research is Chinese university students' plagiarism in their EFL (English as a Foreign Language) compositions. This has become a compelling topic in recent years, as there have been numerous reported cases of plagiarism by Chinese students. Although, as Yao notes, the very concept of plagiarism has been challenged by poststructuralist researchers such as Pennycook as a "Western" construct, it is still considered ethically unacceptable in most academic contexts. Several years ago, ETS even ceased allowing students in China to take the computer adaptive TOEFL test. Yao's research, therefore, promises to shed light on a very important topic.

After describing the purpose of her study, Yao's report then gives an account of the current state of English education at Chinese universities. This provides edifying background information necessary for the understanding of the potential causes of Chinese plagiarism practices. We learn of the constraints imposed on English instructors by the university curriculum, and also of the flexibility given instructors within those constraints. We also learn that even for English majors, who receive a much more thorough course of writing instruction than non-English majors, the skills of citation and quotation, and crediting sources, are not taught. One of the techniques of writing instruction in China also involves having students imitate models of good writing. The above factors all could potentially contribute to inadvertent plagiarism.

Yao's overseas trip also gave her the opportunity to collect the data necessary to complete her dissertation. Based on this data, she is now in a position to conduct her analysis on Chinese students' attitudes towards plagiarism, which should provide deep insights into the nature of this phenomenon, and hopefully suggest ways of dealing with it. China sends large numbers of students to study overseas, and this number is likely to increase in the future. Studies such as this one are necessary towards both intercultural understanding and pedagogical improvements in English writing instruction.

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・Edward Schaefer)

学生海外調査研究	
グリーグ・アカデミー音楽療法研究センターにおける臨床研究 -文化中心音楽療法を基盤として-	
生野（山本） 里花	比較社会文化学専攻
期間	2011年11月27日～2011年12月9日
場所	ノルウェイ、ベルゲン
施設	ベルゲン大学グリーグ・アカデミー・音楽療法研究センター

内容報告

1. 今回の海外調査研究の必要性と目的

筆者が現在取り組んでいる博士論文は、音楽療法臨床プロセスのキーワードを「関係」と「意味」と仮定し、ひとつの事例を深く解釈することで論じようとするものである。日本の音楽療法現場は、コンテキストに特定のプロセスを重視するなど、質的研究や構築主義的視点に適すると思われる形態が大半を占めるのにもかかわらず、それについての研究方法が確立しているとは言えない。そこで今回、こうした音楽療法臨床や研究方法を「文化中心音楽療法」という概念の下に育ててきたスティエーグ博士(Stige, Brynjulf) とベルゲン大学(University of Bergen)グリーグ・アカデミー・音楽療法研究センター(Grieg Academy Music Therapy Research Center, GAMUT)を訪れた。

スティエーグ博士は、もともとソグン・フィヨルダネ大学(Sogn og Fjordane University College)でコミュニティ音楽療法を中心とした研究と教育を始め、その後ベルゲン大学に音楽療法学部とGAMUTを設立した。GAMUTは、世界の音楽療法論文誌の中でもレベルの高さと柔軟なアカデミズムで知られるNordic Journal of Music Therapyと、文化中心音楽療法の視点に立ったインターネット・ジャーナルVoices, A World Forum for Music Therapyの発行元でもあるが、両者とも、ノルウェイという地盤を大切にしながらも英語を主言語とし、インターネットを活用して世界に向けた対話的研究姿勢をとっている。また、伝統的には質的な立場に立ちつつも、量的視点も含めた包括的な視点から音楽療法を概観した積極的な展開が見られる。

さらにGAMUTは1年半前から、「学際的音楽研究のためのグリーグ・リサーチ・スクール」(Grieg Research School for Interdisciplinary Music Studies, GRS)と称する新しい試みを始めた。これは、ノルウェイ西部及び国外の大学から音楽演奏、音楽教育、音楽学、音楽療法の各分野の博士課程学生が集って研究を発表し合い、また教授陣の基調講義を聞くセミナーで、ここでも、そのレベルと指向において国際的な質をめざすことが謳われている⁶⁾。2010年12月にオープニング・セミナーが「音楽の意味-音楽の効果」("Meaning of music -Effect of Music")というテーマで、2011年6月に第2回が「美的及び創造的学びのプロセス、すべての人に?どこでも?」("Aesthetic and Creative Learning Process, For All? Anywhere?")のテーマで行われたのに続き、今回が第3回、テーマは「感情と音、自己と社会を演ずること」("Performing Sentiment and Sound, Self and Society")であった。

筆者は、今回、GRSの発表者の一人として参加するとともに、セミナー後、GAMUTの教授らと博士論文プロジェクトについて意見を交わすこと、またノルウェイの今日の音楽療法臨床を見学することを目的として、ベルゲンに12日間滞在した。なお、この調査研究は、本学「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「海外学生派遣プログラム」によって可能となったことに、深く感謝の意を表したい。

2. 調査研究の日程

11月28日～12月1日

- ・ GRS 第1～第4日

12月2日

- ・ ベルゲン・サイエンス・センター(Bergen Science Center VilVite)における音楽療法カンファレンス

12月5日

- ・ベルゲン大学病院小児科病棟の音楽療法臨床見学
- ・米国ドレクセル大学 (Drexel University) 大学、ブラット博士 (Brad, Joke) の講義「近年のkokラン・レビューにおける音楽療法」

12月6日

- ・GAMUTにて研究に関するコンサルテーション
□□ ギルバートソン博士 (Gilbertson, Simon)
- ロブソルド博士 (Rolvjord, Randi)

12月7日

- ・ファガトゥン幼稚園(Fagertun Kindergarten)における障害児の音楽療法臨床見学
- ・GAMUTにて研究に関するコンサルテーション
□□ シュミット博士(Schmid, Wolfgang)

3. 執筆中の博士論文について

筆者の博士論文プロジェクトは、これまで以下のように進行してきた。

- ・第10回日本音楽療法学会発表
「重度発達障害児との個人音楽療法における関係の発展-セラピストとクライアントの両方に焦点を当てて-」¹⁾
この発表では、臨床者としての「関係」への視点を、「治療する者」としてのものから、「その場に(巻き込まれて)居る者」としてのものに転換し、「関係」の多層的あり方を探った。
- ・第42回日本芸術療法学会発表
「関係性と意味性-重度発達障害児との個人音楽療法の一場面の解釈の試み-」³⁾
この発表では、「関係」に焦点を当てて、約1分間の音楽療法臨床場面を解釈する方法を試案した。

今回は、この解釈方法の試案をさらに進めるための予備研究「ある重度知的障害児との音楽療法における『意味』の位置づけ-その多層性と研究方法の可能性-」をGRSで発表し、またGAMUTの教授陣に意見を求めた。

4. 筆者のプロジェクトに深く関連するいくつかの概念について

GRS, GAMUT という環境においては、音楽療法を「関係」と「意味」から研究するという筆者のテーマ設定は、異論なく受け入れられた。その中でさらに、以下のような関連する概念が論じられていることに興味を抱いたので、これからの研究に含めていきたいと考えている。

4.1 医療における「意味」と音楽療法

ノルウェイの音楽療法の第一世代とも言えるルード(Ruud, Even)は、1970年代の著書で音楽療法臨床を医学モデル、精神分析的モデル、行動療法的モデル、人間性心理学的モデルの4つの視点から論じた。その中でルードは、音楽の「生理学的・心理学的反応」にのみ存在価値を置く初期の医学モデルを批判しており、その先に「コミュニケーション」や「コミュニティ」といった音楽療法の新しい概念を想定していたことが読み取れる¹⁰⁾。

1980年代に入ると、イスラエルの医療社会学者アントノフスキー(Antonovsky, Aalon)が、従来の医療を「疾病生成モデル」と名付け、それに対する視点を「健康生成モデル」として提唱した。前者が「何が人を病に追いやり、どのようにその原因を取り除き、健康な人をいかにその原因から隔離するか」を問うのに対し、後者は「健康な人が健康を生成するための営みとは何なのか」「何が人の健康を作っているのか」を問うもので、そのキーワードとなるのが「首尾一貫感覚」(sense of coherence)とされる⁴⁾。音楽療法領域では、アメリカの研究者ブルシア(Bruscia, Kenneth)が「音楽療法を定義する」の第二版(1998)の中で重要な概念として取り上げ、音楽療法のプロセスの画期的な理解体系を作った⁵⁾。

上記のような、音楽療法研究の焦点を「結果」から「プロセス」に動かそうとする考え方の流れは、今回、ブラット博士の発表や講義の中に、強く現われていた。ブラット博士は、kokラン・レビューで医療における音楽療法のEBMの結果を調査した際、EBMの論文のベースになっている音楽療法臨床の技法がCD聴取などに限定されており、実際に医療現場で行われている、はるかにインターアクティブな技法との落差が大きいことのジレンマに触れた。そして音楽療法が最も力を発揮するのは、このインターアクティブなやりとりによる「意味」(meaningfulness)の感受であるとの考え方を強く示唆した。

筆者の論文で扱う症例は医療における音楽療法ではないが、「音楽の何がクライアントに変化をもた

らすのか」という共通した議論が拡がりつつあることに関心をひかれた。

4.2 リソース指向の音楽療法

ベルゲン・サイエンス・センターにおける音楽療法カンファレンスで GAMUT のロブソルド博士が取り上げた「リソース指向の音楽療法」(resource oriented music therapy) も、この近隣に位置づけられると思われる。氏の講義は大半がノルウェー語でなされたため、後日、個人的に話を聞いたにとどまったが、氏の著書「リソース指向の音楽療法」によると、このアプローチは「エンパワメント哲学、ポジティブ心理学、及び最新の音楽学といった広く学際的な景観をなしており、協同と参加に重点を置いたコンテクスト的、関係的なもの」とされる⁹⁾。ノルウェーの音楽療法を代表するひとつの概念として、今後調べてみたい。

4.3 「育てること」

今回の GRS では、とくに音楽教育など周辺分野の発表者から、ノルウェー語、ドイツ語に共通する 'bildung,' という言葉と、それを補足する概念として英語の 'upbringing,' 'pedagogy' といった言葉が 'education' とは区別する形で聞かれ、これがノルウェーの教育哲学において重要な概念であることが感じられた。直訳すればドイツ語の 'bildung' は「育成、教育、教養、文化」、英語の 'upbringing' は「教育、しつけ」、'pedagogy' は「教授法」といった訳語になるが、前後の文脈から、知識を与えるのではなく、「人間として育てる」といった概念が含まれているように思われた。これは筆者の考える「療法」の本質のひとつと遠からず重なるものであり、今後追求してみたいと思った。

4.4 現象としての障害

GRS での発表の中に、博士課程のヘレ・バレ氏 (Helle-Valle, Anna) の注意欠陥・多動性障害児に関する発表「落ち着きのない子供たち：その最善の捉え方とはどのようなものか、また音楽療法の貢献できることは何か」(Restless children: who are they, how can they best be met and what could be the contribution of music therapy?) というものがあつた。この研究はまだ計画の段階ではあるが、GAMUT のプロジェクトのひとつとも位置づけられている⁷⁾。心理学者である氏は、「落ち着きのなさ」(医学用語では ADHD: 注意欠陥・多動性障害とされる) が、障害名や医学モデルによる診断基準だけでくくることでかえって本質が捉えにくくなることに注目し、「ひとつの現象」として捉え直そうとしている。氏によれば、この「障害」を、関連専門職によるチェックリスト採点によってだけでなく、「音楽療法の関係的かつリソースフルな環境」のコンテクストで見るともっと違った、つまり「標準的であることから病的であることまで広がったひとつの現象として」捉えることができるのではないかと考えられ、地元の幼稚園の音楽療法臨床に心理職として関わりながら研究を進めるとのことであつた。

この見方は、筆者の「関係」に重点をおいた臨床の視点に類似すると思われ、興味深かつた。

5. 症例の解釈方法について

3.でも述べたように、現在筆者が直面している最も重要な問題は、症例の解釈方法にある。これについて GAMUT の教授らとのコンサルテーションで話し合われたトピックスからいくつかを記す。

5.1 臨床者が研究者／解釈者となることと、内的妥当性について

本研究は、セラピストとクライアントの「関係」に注目している。しかし言語のない重度知的障害の子供を扱っており、質的研究の常道であるインタビューをとることができない。よって、得られる記述データは、「関係」の一端を担っている臨床者(筆者)の書いたものとなり、また解釈も同者によって行われることになる。これについて筆者は、「関係」に関する両者の内的経験に最も近いところにいる筆者自身の記述データを使うことのメリットを論じてきたが、研究としていささか閉塞感も感じる部分であつた。

今回のコンサルテーションでは、こうした設定自体について難色は示す意見はなく、質的研究としては成立するという感触を持ったが、内的妥当性 (internal validity) を確立する方法として、第三者のチェックを入れる方法が複数示された。実際の研究段階のどこで、どのような立場の人から、何についてチェックを受けるのかについてもいくつかの具体的アドバイスがあり、参考になった。

5.2 内的経験の捉え方の深さについて

筆者がこの研究の重要な追跡テーマと考えていることのひとつに、「巻き込まれること」「互い変化していくこと」「セラピストの個人的な内的経験が、臨床に作用するとともに臨床によって変えられてもいくこと」がある。5-2の内的妥当性の考え方は理論的に整合性がある反面、「個人的な内的経験」に対してどう活かされるかについての議論はまだ深める余地があるため、これからさらに教授らとコミュニケーションをとっていきたいと考えている。

5.3 「現象の切り取り方」について

セラピストとクライアントの臨床的関係を解釈する際、データとなるセッション記録(及び映像)

をどう切り取るかについて、さまざまなアドバイスがあった。まず、5年半、100時間にわたる臨床記録（ビデオと書き起こし）から、実際に解釈の対象とする場面をどう切り出すのか、という問題がある。これに対しては、リアリスティック・サンプリング、目的的サンプリング、臨床者としての暗黙知によるサンプリングなどが選択肢として示された。次に、抽出された場面のどの要素をどう分け、どのような視点から解釈するのか、についても様々な考え方が示された。

いうまでもなく、この「現象の切り取り方」も、内的妥当性の点で説得力が問われる部分である。この点についてギルバートソン博士から、印象深いコメントがあった。それは、「正しいか、間違っているか」ではなく、「なぜこのような方法をとったのか」に視点を転換するべきであるという意見である。つまり、技法の形にこだわるのではなく、臨床で起きていたことの実感を最優先し、それを説明しながら、合う技法を確立することが重要だとのアドバイスで、論文全体の論調にも広く応用できるメッセージであると感じた。

5.4 「プレゼンテーション＝提示」と「アーカイブ＝記録」について

ギルバートソン博士とのコンサルテーションでもう一つ印象深かったのが、「プレゼンテーション＝提示」と「アーカイブ＝記録」についてのコメントだった。博士によれば、臨床や研究の中で生まれた表現媒体（比喩、イメージ映像、描画楽譜など）は、それ自身として生命と独立性を宿しており、何かの「代わり」や「表面的な提示媒体」ではないという。つまりそれは、もともとの現象を違う角度から見たもうひとつのオリジナル記録、アーカイブであり、よって、解釈を深めるほどに新しい側面を見せてくると言えよう。「表現による臨床」というものを考えるとき、大変興味深い見方であると感じた。

6. 音楽療法の研究方法の位置づけについて

6.1 研究の方法の概観

スティーゲ博士は、「ベルゲン大学の音楽療法は、ノルウェー政府から『コミュニティ音楽療法』と『研究』とを至上命題とされている」と語ったが、GAMUTはその「研究」の部門の体現と言えよう。そもそも音楽療法の臨床方法は極めて多岐にわたり、それぞれの直接関連領域も「医学」「教育」「リハビリテーション」「心理学」など全く異なるため、得てして関連領域の趨勢や社会経済的背景によって音楽療法手法の優劣を決定づけるような無用な議論が繰り返されてきた。今回 GAMUT を訪問し、今や音楽療法研究は、多様な視点や方法を包括的に捉え、補強し合いながら領域としての力を高め、そうすることで社会における市民権や基金を得る時代に入りつつあると強く感じた。そして、次のような関係図が洞察された。

6.2 「そぎ落とす」研究と「含める」研究

音楽が人間の身体や感情にどう影響を与えるのかについて、とくに医学モデルの研究者たちが行なってきた量的実証的研究は、基礎研究として音楽療法の発展に寄与してきた。しかしこうした研究では、純粋な結果を出すために変数を制御する必要があり、多くの臨床活動において前提となる「人間と人間のインターアクション」が取り除かれた形での音楽療法手法に限定されることが多い。このジレンマについては、ブラット博士の報告としてすでに述べた通りである。

一方、現在行われているような量的研究を、自然な設定の臨床現場のいわゆる「症例研究」に適用すると、なにがしかの結果が示されたとしても、そこに至るプロセス、すなわち音楽療法士の臨床技術で暗黙のうちに行われた療法の核の部分（演奏の微細な調整、タイミング、即興の内容、会話の語調など）が含まれにくいことになる。にもかかわらずそれが臨床研究の中心的存在となるのなら、音楽療法臨床者の無力感と失望感を引き起こさざるを得ない。

量的研究が、いわば還元主義 (reductionism) =そぎ落とす方向性にあるのに対し、質的研究は involve =含める方向性、それも単なる臨床的設定を超えて、対象者を取り巻く社会や文化まで広がっている図式が見てとれるが、この対立は音楽療法においてどのように解決できるのだろうか。

6.3 効果とプロセスの両方を取り入れようとする研究

今年の音楽療法世界会議（2011年7月、韓国）で発表された、スティーゲ博士とデンマークのリダー博士 (Ridder, Hanne-Mette) との共同研究では、「音楽療法の実践を既存の無作為対照化試験に合わせるのではなく、音楽療法士が日常の実践の一コマとしてデータを収集できるよう、試験の方法を実践に合わせる」手法を提案している⁸⁾。このほかにも、今回の GAMUT で、質的研究と量的研究を組み合わせた研究をいくつか紹介された。

6.4 音楽療法のプロセスの独自性を精査し、「効果」そのものの意味を問い直す研究

ギルバートソン博士は自らの8年にわたる脳損傷患者への臨床の研究と筆者の研究の共通点についてコメントした際、「これは、即時的効果の出る臨床でなければ基金を出さない傾向のある社会への政治的提言 (political statement) とも言える」と語った。つまり、そもそも「医療」とは何か、「療法」

とは何か、「健康」とは何かという問いにまで踏み込んで、「効果」にとどまらない「物語」を敢えて示そうとする研究が生まれてきており、その方法が模索されているということである。しかし、数字をふりかざさずに、領域外の人びとに説得力のある研究を示すのは容易なことではない。目下、ひとつひとつの研究が、いわゆる質的研究の既存の方法を参照しながら、それぞれオリジナルな技法を創りだしているのだと感じた。今回、スティーゲ博士の「芸術におけるリサーチ」(artistic research)についてのシンポジウムにおける「リサーチ方法とは、在るものではなく、生まれてくるものだ」という発言は象徴的であった。

6.5 自らの研究姿勢の位置づけの明示と対話的研究

GAMUTがインターネット上で出版しているInternational Forum for Music Therapy, Voicesは、その投稿者への執筆ガイドラインのひとつとして「対話を推進する」(Encourage dialogue)ことを挙げているが、その説明は以下のようなものである。

Voicesの目的は、国際的な対話をすすめることであるから、投稿は国際的なやりとりにも貢献するような考えを提供しなければならない。私達の考え方や実践はどのように似ていて、どのように異なっているのか？読者の反芻を促すような問いかけをしていくことができよう¹¹⁾。

筆者の前述の過去のプロジェクトの中で、「これは療法課題の達成の検証ではなく、関係性そのものを振り返るTh.の内省的プロセスである」という前提を述べている部分²⁾に対して、ギルバートソン博士は、「ある概念を提言するだけでなく、それに対立する概念を明示することは、論旨の展開に重要である」とした上で、「さらに、自分の用いる概念と対立する概念との『関係』まで示す」ことを示唆した。これは、研究というものが、その属する研究世界の全体を見渡すこと、現状を理解した上で自らの立ち位置を決めること、その立ち位置を用いる理由や理論づけを反対の立場との「関係性」の中で明らかにすることで、「対立的」ではなく「対話的」な研究となることができると理解され、有意義であった。

7. 本海外調査研究の成果の今後の公表の予定

以上のような成果は、博士論文の中の全体的方向性及び、症例研究部分の具体的手順に活かされる。また、GRSで発表した内容を改訂し、第43回日本芸術療法学会（2011年12月23-24日、東京芸術大学）で発表した。さらに、ベルゲン大学の音楽療法の動向について日本音楽療法学会の学会誌に投稿したいと考えている。

参考文献

- 1)生野里花(2010)「ある個人音楽療法セッションのプロセスにおける関係性の展開～重度知的障碍児と音楽療法士の双方に焦点を当てて～」『日本音楽療法学会第10回大会資料』38 - 39.
- 2)Ibid.
- 3)生野里花(2010)「関係性と意味性-重度発達障碍児との個人音楽療法の一場面の解釈の試み」『第42回日本芸術療法学会』資料
- 4)Antonovsky, A.(1987) *Unraveling the mystery of health: How people manage stress and stay well*, Jossey-Bass Publishers. (山崎喜比古, 吉井清子 (監訳) 2001 健康の謎を解く-ストレス対処と健康のメカニズム- 有信堂高文社)
- 5)Bruscia, K. (1998) *Defining music therapy second edition*, Barcelona Publishers. (生野里花 (訳) 2008『音楽療法を定義する』 東海大学出版会)
- 6)*Grieg Research School in Interdisciplinary Music Studies*. <https://www.uib.no/rs/grieg> 2011年12月16日閲覧
- 7)Helle-Valle, A. *Restless children: who are they, how can they best be met, and what could be the contribution of music therapy*. <http://helse.uni.no/Projects.aspx?site=4&description=0&project=2603> 2011年12月16日閲覧
- 8)Ridder, H., Stige, B. (2011) *A joint research protocol for music therapy in dementia care*, *Music Therapy Today* vol.9, No.1, 90-91.
- 9)Rolvsjord, R. (2010) *Resource-oriented music therapy in mental health care*, Barcelona Publishers.
- 10) Ruud, E. (1980) *Music therapy and its relationship to current treatment theories*, Magnamusic-Baton. (村井靖児 (訳) 1993『音楽療法』ユリシス・出版部)
- 11) *Voices, A world forum for music therapy*. <https://normt.uib.no/index.php/voices/about/submissions#authorGuidelines> 2011年12月16日閲覧

いくの (やまもと) りか／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

生野（山本）里花さんの今回の「学生海外調査研究」では、世界的に新たな音楽療法の方向性で研究する、ノルウェイ、ベルゲン大学のスティーゲ博士等とのディスカッション、および博士によって設立されたベルゲン大学グリーグ・アカデミー・音楽療法研究センター（GAMUT）での様々な研修を行なってきた。今回の大きな収穫は、生野さんがテーマとしている、音楽療法を「関係」と「意味」から研究する、ということがまったく異論なく受け入れられたことであろう。今回の渡航によって、音楽療法におけるこれまでの量的研究が **reductionism**、そぎ落とす方向性にあることに対して、質的研究が **involve**、すなわち含める、巻き込む、関わるという方向性にあるという、本質的な研究基盤が獲得できたことは、博士論文並びに今後の研究のために大きなことである。世界の最先端での研究に参加する足がかりができたことは重要であり、高く評価できる。今後を大いに期待したい。

（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科（文化科学系）・永原恵三）

学生海外調査研究	
遺伝性疾患の子どもの家族を対象としたスティグマに関する研究についての調査	
	渡辺 基子
	ライフサイエンス専攻
期間	2011年10月26日～2011年11月2日
場所	アメリカ合衆国 カリフォルニア州 サン・ディエゴ (San Diego)
施設	(1) San Diego Marriott (National Society of Genetic Counselors 30 th Annual Education Conference) (2) San Diego Perinatal Center

内容報告

1. 調査の背景

遺伝カウンセリングとは、疾患に遺伝学的事象が関与することの医学的、心理社会的、また家系に及ぼす意味を人々が理解し、それらに適応することを助けるプロセスであると定義される (Uhlmann, 2009)。スティグマは、信頼を失っている属性と定義され (Goffman, 1963)、その属性のある人は他者から不当な扱いを受け、完全な人間として扱われない。遺伝性疾患は、Goffman の提唱したスティグマとなる属性の種類 (外見上の特徴、身体上の障害、行動上の特性、家系を通して伝わるもの：調査者により意識) を含むため、スティグマは遺伝カウンセリングにおける心理社会的な影響の一つに相当することが示唆される。実際に、これまでに遺伝性疾患とスティグマとの関連は少なからず報告されてきた (James et al., 2006; Peters et al., 2005; 渡辺, 2010)。一方、遺伝性疾患の子どもの家族のスティグマはコーテシー・スティグマ (縁者のスティグマのためにスティグマ付与された個人のスティグマ) とみなされ、スティグマのある個人のスティグマとは異なる特徴があることが推測される (Goffman, 1963)。遺伝性疾患の母親のスティグマは、子どもや同胞の発達に否定的な影響を与えることが示唆されてきたものの (Weil, 2000)、これまで遺伝性疾患の子どもの家族についてのスティグマの研究はほとんど行われてこなかった。しかしながら、子どもの両親のスティグマ経験や対処法をインタビュー調査により明らかにした興味深い研究発表が米国の研究者らにより行われている (Green, 2003; Turner et al., 2007)。スティグマは否定的な属性であるものの、スティグマのある人はそれに対処しスティグマが問題とはならない適応を遂げた段階に行き着くことができることが示唆されてきたため (Goffman, 1963; Turner et al., 2007)、遺伝性疾患の子どもの家族のスティグマについて明らかにし、スティグマの対処法やその発達過程等を明らかにすることは、子どもの発達や家族の適応への支援にとって重要であると考えられる。

本邦においては、スティグマに関する研究は一部の領域を除いてはほとんど行われておらず、遺伝カウンセリング領域においては、これまで全く研究は行われてこなかった。スティグマ経験は文化により異なることが報告されていることから (Rozario, 2007; Gaff & Clarke, 2007)、本邦において研究することは重要である。前述したように、スティグマは否定的なイメージと密接に関連しているため、患者家族を対象としたスティグマの研究を行うにあたっては倫理的配慮が特に必要になることが推測される。例えば、研究を行うことで、患者家族の新たなスティグマ付与やスティグマの認知を引き起こす可能性が考えられる。遺伝カウンセリング領域における国内初となる患者家族を対象としたスティグマの研究を行うに先立ち、スティグマに関する研究の現状と課題を明らかにしておくことは重要である。

2. 調査の目的

そこで本調査は、遺伝カウンセリング領域のスティグマに関する研究について以下の 4 つを明らかにすることを目的とした。(1) 遺伝カウンセリング学における研究の位置付け (2) 患者家族への研究参加依頼や説明の具体的方法 (3) 研究にあたり、倫理的に配慮した点、倫理的課題 (4) 研究後のフォローアップ、生じた問題、またその解決法

3. 調査の方法

本調査は、以下の3つの方法で行った。(1) 遺伝カウンセリング学の国際学会である National Society of Genetic Counselors (NSGC) Conference における調査 (2) 遺伝性疾患の子どもの両親のスティグマを含む研究を報告した研究者3名へのインタビュー調査 (3) 産科クリニックにおける調査

研究者へのインタビュー調査では、以下の二点について質問した。

(i) How should we explain the content, purpose and terms (including “stigma”) of the research to the people who have agreed to participate, in order to avoid their feelings of being stigmatized? What kind of considerations should we have in conducting research in this field? (日本語訳：研究参加者（患者や家族）がスティグマ付与を感じるのを避けるために、研究参加者に対し、研究内容や目的、またスティグマのような言葉をどのように説明するべきでしょうか。また、遺伝カウンセリング領域におけるスティグマの研究を行うにあたり、研究参加者に対してどのような配慮をすべきでしょうか。)

(ii) Have you had any troubles with participants in the process of research on stigma? If you have, how did you resolve the trouble? (日本語訳：スティグマに関する研究を行った際に、何か問題は生じたでしょうか。もし生じたとすれば、どのように解決しましたか。)

4. 調査の結果と考察

4.1 患者家族を対象としたスティグマに関する研究を行うにあたっての研究参加者への配慮

4.1.1 「スティグマ」の言葉の使用

研究者達は、インフォームドコンセントやインタビュープロセスにおいて、「スティグマ」という言葉を使用していなかった。「スティグマ」という言葉を使用しないことは、患者家族への新たなスティグマ付与を避けることにつながるだけでなく、研究バイアスを避けるためにも重要であった。研究参加者である患者家族への質問として、(1) (疾患名) の子どもをもつことについてのあなたの感情(feeling)について質問に答えてください。(2) 医学的見地から、あなたにとって最も困難なことは何ですか？社会的見地から、最も困難なことは何ですか？それらの状況に対して、どのように反応しましたか？という二点が挙げた。このように、研究参加者に語ってもらう内容はスティグマに制限されてはいなかった。

遺伝性疾患の患者や家族のスティグマについてのインタビュー調査を報告した論文の中で、「スティグマ」の言葉の使用の有無について述べたものはほとんどないが、一報だけ、「スティグマ」の言葉を使用しなかったと明言した論文がある (Sanker et al., 2006)。その論文は患者を対象として疾患を遺伝性と認識することがスティグマの認知にどのような影響を及ぼすかを研究した論文であるが、方法の中で、研究参加者へのスティグマ付与を避けるためと、スティグマというなじみがない言葉を使用しないため、また自発的でない応答を避けるために、インタビューにおいて「スティグマ」という言葉を使用しなかったことが述べられていた。上記論文を発表した研究者達の中に本調査のインタビュー対象者となった研究者はいなかった。これらの結果から、少なくとも遺伝カウンセリング学における患者や家族を対象としたスティグマに関する研究を行う際は、「スティグマ」という言葉をインタビューにおいて使用しないということが重要であることが示唆される。

4.1.2 インタビュー時の態度

インタビューは、半構造化インタビューガイドに沿って行われた。インタビューはテープに録音し、ノートはインタビュー時にとらず、インタビュー後にとっていた。ノートをその場でとらないことは、研究参加者が語りに集中できる環境、語りやすい環境をつくることになると考えられる。

4.1.3 スティグマの研究を行うことの研究参加者への倫理的配慮について

研究参加者は自分のことを語りたいと思っており、インタビューによるスティグマ付与や研究後に起こり得る問題を懸念することは考え過ぎであるという意見があった。インタビューにおいて「スティグマ」という言葉を使用せずに質問をスティグマに制限しなかった場合、特にスティグマの研究であるということで、インタビューによるスティグマ付与を懸念する必要はなくなると考えられる。研究参加者が語りたいという状況、つまり研究参加が自由意志によって行われていることが重要であると考えられる。

一方で、「スティグマ」という言葉を用いないで研究調査を行った場合に、研究成果発表を研究参加者が見たり聞いたりした際、自分が語った内容がスティグマという概念でまとめられていることに対して否定的な感情を抱く可能性があることが懸念される。実際には、スティグマの研究を行ったことにより特にこれまで問題が生じたことはなかった。しかしながら、その対策を考慮することは重要であると考えられる。対策としては、研究発表の前置きとして、語られた内容はスティグマが全てでないことを述べるのが考えられる。また、研究発表を研究参加者に渡す際は、スティグマについて分かりやすく説明した文書を添付することが考慮される。

4.2 遺伝カウンセリング学におけるスティグマ研究の現状

4.2.1 遺伝カウンセリング学研究の現状と課題

学会で発表されていた遺伝カウンセリング学研究は、臨床実践に即した調査が多く、理論構築のような博士研究に相当する発表は、調査者が参加したものの中には見られなかった。米国では遺伝カウンセラーは修士レベルの職業であることが要因の一つと考えられる。本学会の口演の中では、どのように遺伝カウンセラーの専門性を確保するかということが話題になっていた(Valverde, 2011; Stuenkel, 2011)。特に、博士号が必要と感じているかどうかを遺伝カウンセラーとコースディレクターを対象に調査を行った研究発表は、通路にも立ち見が出るほどの盛況であり、遺伝カウンセラーが博士号に興味を抱いている事が推測された。研究発表の中では、調査に参加した61%の遺伝カウンセラーが博士号(クリニカルドクターとPh.D.)を取得することに賛成であるとの結果が得られていた(賛成でない人は8%)。そのような中、米国のように30年以上の歴史があるコースに新たなアドバンスコースを設置することが費用や人材、場所等の問題から難しいことがディレクター側から報告されており、遺伝カウンセリング領域における博士研究に相当する研究は、本大学のようにもともと博士号とともに設置されたコースが中心となって進展することが期待できると考えられた。遺伝カウンセリング領域において理論構築を目指した研究を行うことは、国際的にもまだ確立されておらず、それを目指すために行った本調査は、国際的な女性リーダーの育成に関わる調査研究であるといえる。

4.2.2 発表されたスティグマに関する研究

ポスター発表において、2つのスティグマを主にした研究テーマの発表があった。一つは、(1) The impact of genetic information about obesity on weight-related stigma (肥満についての遺伝学的情報の体重に関連するスティグマへの影響)であり、もう1つは(2) Relationships between causal attributions for serious mental illness, internalized stigma, and perceived control among those personally affected (重篤な精神疾患の罹患者における精神疾患の原因についての考えと内在化されたスティグマ、コントロールの感覚との関係)であった(Lippa, 2011; Hippman, 2011)。

(1)の発表では特にスティグマを定義したり、スティグマの尺度を用いたりはしておらず、否定的な態度をスティグマとして報告していた。(2)については、要旨の中でもスティグマについて詳細に述べており、内在化されたスティグマ(internalized stigma)の尺度を用いた研究を行っていた(Winnie et al., 2010)。どちらの発表も、遺伝的要因と環境要因の相互作用により発症する多因子疾患についての研究であり、疾患を遺伝的要因と認識することのスティグマへの影響を調べた研究報告であった。また、インタビュー調査ではなく質問紙調査であった。

2005年以降、遺伝性疾患とスティグマとの関連について調査した論文は劇的に増えているが、その中でも疾患の原因が遺伝性であると認識することとスティグマとの関連を質問紙やインタビューにより調べた論文は多く発表されている。特に精神疾患の報告は多く見られる(Bennett et al., 2008; Meiser et al., 2005; Spriggs et al., 2008)。精神疾患はスティグマとの関連が深く、スティグマの研究が発展しており専用の尺度も存在することが理由の一つであると考えられる。遺伝カウンセリング領域の精神疾患を専門としている(2)の発表者から、スティグマを測定する尺度に関する論文14報を個人的に紹介してもらった。

現在多因子疾患の遺伝的要因の解明が勢力的に行われており、遺伝カウンセリングの新しい領域として注目されている。遺伝カウンセリング学におけるスティグマの理論構築を行う上で、多因子疾患にも応用できる理論を構築する必要があることが示唆される。

4.2.3 今後発展する遺伝カウンセリングにおけるスティグマの研究の展望

学会発表の口演では、次世代シーケンサー¹を用いて個人の全ゲノムを解読することで、個人のゲノム情報を医療に利用するパーソナルゲノム医療に関連した遺伝カウンセラーの役割や課題についての発表が目立った。その中で、ゲノム医療がもたらすスティグマ付与の可能性と、事実上、全ての研究参加者がスティグマ付与を含む様々なオプションを掲げた時でさえ、全ての結果を得ることを望んだことが報告されていた(Facio, 2011)。次世代シーケンサーを用いて全ての個人のゲノムが解読されていく社会となる時代は既に近づいており、実際には米国で既に全ゲノム配列解読が医療として行われている(Brendan, 2011)。そのような今後発展する遺伝カウンセリングにおいても、スティグマの問題が存在することは重要である。誰もが何かしらの遺伝子変異をもち、それらが同定されるため、遺伝子変異がスティグマ付与になるというよりはむしろ、遺伝子変異の種類によってスティグマ付与があるかないか、また認知が高いか低いかなという新しい状況が生まれることも推測される。今後の発展が期待される新しい遺伝医療においても、スティグマの研究は重要であることが示唆される。

4.2.4 遺伝性疾患の子どもの家族のスティグマの研究の位置づけと展望

米国の研究者より、遺伝性疾患の子どもの家族のスティグマの研究は重要な研究テーマであり、期待しているとの意見があった。また、遺伝カウンセリングコース教授である研究者から、遺伝性疾患

に関連するスティグマに関する研究は、既に報告されているものもあるが、日本という文化において明らかにすることは重要であるし、また調査者の計画しているような包括的な解明により、理論構築を行うことは重要であり賛成であるとの意見があった。これまでスティグマに関する研究を報告した研究者は、遺伝性疾患の子どもの家族のスティグマに関する研究を行うことは重要な研究であるという意見であった。さらに、研究の際は対象のスティグマのタイプを考慮しつつ焦点を絞った方が良く、その結果は幅広く応用することができるものであるとの意見があった。調査者は既に文献調査により遺伝性疾患に関連するスティグマをカテゴリーに分類しており（渡辺, 2010）、そのカテゴリーが対象のスティグマのタイプを明確にするために利用できると考えられる。研究対象のスティグマのタイプを明確にしておくことで、今後発展する遺伝カウンセリングにも有用な理論となることが期待できる。

4.3 産科における遺伝カウンセリングとスティグマ

産科クリニックの遺伝カウンセラーに遺伝カウンセリングの中でスティグマを同定することがあるか、またスティグマをどのように扱うかを尋ねたところ、鎌状赤血球症のように、人種に関連した疾患²はスティグマと深く関係しており、スティグマを遺伝カウンセリングにおいて話題にすることがあるとの返答が得られた。調査者の博士研究は子どもの家族を対象としているが、子どもの家族のスティグマは出生前診断とも密接に関連しており、産科とも深い関わりがある。実際に出生前診断が発展している米国の産科クリニックでもスティグマを捉えることは重要であった。子どもの両親のスティグマを明らかにすることは、産科領域においても情報提供や支援のためのツールを提示できることが示唆される。

本産科クリニックの遺伝カウンセラーのうち1名は、骨系統の遺伝性疾患を有するAmerican Board of Genetic Counseling (ABGC)認定遺伝カウンセラーであった。そのカウンセラーが出生前診断について遺伝カウンセリングを行っており、日本のように科学技術が進んだ国で羊水検査や絨毛検査のような出生前診断³を受ける妊婦が少ないのが信じられないと語っていた。遺伝性疾患を有する人が出生前診断の遺伝カウンセリングを行うことは、自分（調査者）の常識を覆す事実であり、それは、自分の中のスティグマ付与である可能性があった。人は、生まれた文化の中で、家族や成長する中で出会う人々とともに生きるうちに、自分の価値観や常識、スティグマ付与ができあがっていく。研究や遺伝カウンセリングを行う上で、それを否定せずに、自分の中にある常識や価値観、スティグマ付与に気づきながら、向き合いながら行うこと、そしてそれが認識できているということが重要であると考えられた。

5. まとめ

調査者は、これまで遺伝カウンセリング領域におけるスティグマの研究が、遺伝性疾患の患者や家族の支援にとって有用であることを示してきた（渡辺, 2010）。認定（日本遺伝カウンセリング学会・日本人類遺伝学会）遺伝カウンセラー資格取得者でもある調査者は、特にスティグマに関する研究が患者や家族へ与える可能性のある害や影響に配慮し、倫理的側面に着目したことが本調査の特色であった。

遺伝性疾患の子どもの家族を対象としたスティグマに関する研究を行うにあたり、研究の意義と研究にあたり研究参加者である患者家族に配慮すべき点を調査するべく、遺伝カウンセリング領域において既にスティグマの研究が行われた米国において、学会参加と研究者へのインタビュー調査を行った。調査者の博士研究の意義については、全ての研究者がその重要性を唱え、包括的なスティグマ研究の重要性が確認できた。一方、現在の米国における遺伝カウンセリングの現状の中では、遺伝性疾患の子どもの家族のスティグマについての研究は古典的な研究に位置し、今後発展する遺伝医療においても利用できるスティグマの理論を構築することが必要であると考えられた。

遺伝カウンセリング領域におけるスティグマの研究における倫理的配慮として、インタビューにおいて「スティグマ」という言葉を用いないことが重要であった。インタビューをスティグマに絞る必要はなく、また参加者の語る言葉をインタビューの中であえてスティグマという言葉に変える必要はない。それが対象者への配慮につながるとともに、対象者が語る内容をゆがめることを避けることにもつながる。今回の研究者へのインタビュー調査により明らかになった患者家族への配慮に関しては、全ての研究者の間で共通した内容が多く、研究参加者への配慮は大きく「言葉の使用」と「インタビュー時の態度」に分けられた。これらは、患者家族を対象とした研究を行う上での基本的配慮として考えられるものであった。今回、結果や考察には加えなかったものの、米国の研究者へのインタビュー調査に先だって、本邦の他領域のスティグマ研究者に同様の質問を尋ねた。米国のスティグマ研究者とかなりの共通点が見られ、今回明らかになった研究を行う上での配慮は、スティグマに関する研究を行うことの一般的な配慮とも考えられた。

6. 調査の博士研究における位置付けと今後への示唆

調査者は、これまで文献調査により、遺伝カウンセリングに関連するスティグマを体系的に記す試みを行ってきた。その中で、遺伝カウンセリング学の構築に向けて、ゴフマンのスティグマ理論 (Goffman, 1963) からカテゴリーを抽出、患者家族の支援や今後の研究にとって有用な分類を作成した (渡辺, 2010)。結果については、遺伝カウンセリング学会誌 (予定) 投稿に向けて現在論文執筆中である。

文献調査の結果から、遺伝性疾患の子どもの両親はコーテシー・スティグマ (縁者のスティグマのためにスティグマ付与された個人のスティグマ) を経験、認知することに着目した。両親のスティグマは疾患を有する子どもや同胞の発達に負の影響を与えるため、両親のスティグマについて明らかにすることは遺伝性疾患を有する患者や家族の支援にとって重要であることが示唆される。そこで調査者は、以下の研究テーマで、現在具体的なフィールドを含めた詳細な研究計画を作成中である。

【研究テーマ】 遺伝性疾患、あるいは遺伝子検査により遺伝子変異が同定された子どもの両親や同胞のスティグマに関する研究

本調査により、博士課程研究におけるインタビュー調査を行うに先立って、研究計画を立てるための重要な見解が得られた。また、本調査の結果は、スティグマ研究の現状を博士課程研究論文の章背景に、スティグマ研究の課題を方法の中の倫理的配慮に加える予定である。

インタビューをおこなった研究者一覧

1. Barbara B. Biesecker; Director, JHU/NHGRI Genetic Counseling Training Program
2. Joyce T. Turner; Genetic Counselor, Children's National Medical Center, Washington, DC
3. Kathryn F. Peters; Penn State Institute for Diabetes and Obesity, University Park, Pennsylvania

注

1. 次世代シーケンサー (第二世代) は従来の Sanger 法による塩基配列決定とは異なり、短い断片の塩基配列を並列的に決定することで高速解読を可能にしたものである。Sanger 法に比べて精度が低く解読の回数を重ねる必要がありデータ量が多いこと、リファレンスとなる配列が必要である等いくつかの課題はあるものの、低コスト化も進んでおり高速・低コストによる全ゲノム・全エクソン配列決定を可能にし、今後の医療で幅広く用いられることが期待されている。
2. 羊水検査、絨毛検査ともに侵襲的な出生前診断であり、胎児の染色体核型を同定するための検査である。羊水検査は妊娠 16~18 週くらいの妊婦に対して、絨毛検査は妊娠 11~13 週くらいの妊婦に対して行われる。
3. 鎌状赤血球症は常染色体劣性遺伝性疾患であり、黒人に多く見られる疾患である。一方、白人に多く見られる常染色体劣性遺伝性疾患として嚢胞性腺腫症が知られている。

参考文献

- 渡辺 基子 (2010) 「スティグマと遺伝カウンセリング」お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科修士論文
- Goffman, E. (1963) *Notes on the management of spoiled identity*, Shimon and Schuster Inc: New York. (石黒 毅 (訳) 2001 『スティグマの社会学』せりか書房)
- Bennett, L., Thirlaway, K., Murray, A.J. (2008) The stigmatising implications of presenting schizophrenia as a genetic disease, *J. Genet. Couns.*, 17(6), 550-559.
- Brendan, M. (2011) Genomes on prescription, *Nature*, 478, 22-24.
- Facio, F. M. (2011) Challenges of extracting clinically relevant data from whole genome and exome sequencing, *NSGC pre-conference Symposia*
- Gaff, CL. & Clarke, A. (2007) Stigmatization, culture and counseling a commentary on growing up and living with NF1: a UK-Bangladeshi case study - by Santi Rozario, *J. Genet. Couns.*, 16(5), 561-565.
- Green, SE. (2003) "What do you mean 'what's wrong with her?': stigma and the lives of families of children with disabilities, *Soc. Sci. Med.*, 57(8), 1361-1374.
- Hippman, C. (2011) Relationships between causal attributions for serious mental illness, internalized stigma, and perceived control among those personally affected, *NSGC 30th Annual Education Conference*
- James, CA., Hadley, DW., Holtzman, NA. et al. (2006) How does the mode of inheritance of a genetic condition influence families? A study of guilt, blame, stigma, and understanding of inheritance and reproductive risks in families with X-linked and autosomal recessive diseases, *Genet. Med*, 8(4), 234-242.
- Lippa, N. C. (2011) The impact of genetic information about obesity on weight-related stigma, *NSGC 30th Annual*

Education Conference

- Meiser, B., Mitchell, P.B., McGirr, H. et al. (2005) Implications of genetic risk information in families with a high density of bipolar disorder: an exploratory study, *Soc. Sci. Med.*, 60(1), 109-118.
- Peters, K., Apse, K., Blackford, A. et al. (2005) Living with Marfan syndrome: coping with stigma, *Clin. Genet.*, 68(1), 6-14.
- Rozario, S. (2007) Growing up and living with neurofibromatosis1 (NF1): a British Bangladeshi case-study, *J. Genet. Couns.*, 16(5), 551-559.
- Sankar, P., Cho, M.K., Wolpe, P.R. et al. (2006) What is in a cause? Exploring the relationship between genetic cause and felt stigma, *Genet. Med.*, 8(1), 33-42.
- Spriggs, M., Olsson, C.A., Hall, W. (2008) How will information about the genetic risk of mental disorders impact on stigma?, *Aust. N Z J. Psychiatry*, 42(3), 214-220.
- Stuenkel, A. (2011) Transition to the clinical doctorate: attitudes of the genetic counseling training program directors, *NSGC 30th Annual Education Conference*
- Turner, J., Biesecker, B., Leib, J. et al. (2007) Parenting children with Proteus syndrome: experiences with, and adaptation to, courtesy stigma, *Am. J. Med. Genet. A*, 143A(18), 2089-2097.
- Uhlmann, W.R., Schuette, J.L., Yashar, B.M. (2009) *A guide to genetic counseling*. 2nd ed. Wiley-Blackwell: America.
- Valverde, K. (2011) The development of a doctorate degree in genetic counseling: a national survey of the opinions and concerns of genetic counselors, *NSGC 30th Annual Education Conference*
- Weil, J. (2000) *Psychosocial genetic counseling*. Oxford: New York.
- Winnie, W.S.M. & Yvonne, T.Y.K. (2010) Internalization of stigma for parents of children with autism spectrum disorder in Hong Kong. *Social Science & Medicine*, 1-7.

わたなべ もとこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 ライフサイエンス専攻

指導教官によるコメント

今回、北米の遺伝カウンセラーの職能団体である NSGC(National Society of Genetic Counselors) の学術集会に合わせて、研究テーマである遺伝カウンセリングにおけるスティグマに関連しての調査をおこなうことができた。遺伝カウンセリング領域におけるスティグマをテーマにした研究論文を発表している3名の遺伝カウンセラーより、上記にまとめたような有用な情報を得ることができた。さらに遺伝カウンセリングの先駆的な北米における本学術集会に初めて参加し、さまざまなシンポジウムや演題等を聴くことによって、遺伝カウンセリング領域におけるスティグマに関連する研究の位置づけについて考察ができたと思われる。北米とは文化が異なる我が国における文化、社会、遺伝カウンセリングの状況のなかでのスティグマに関連する研究が展開できることを期待する。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (自然・応用科学系)・川目裕)

The function and the potential of the Off-Off-Broadway

LEE Honglee

The purpose of this research trip was to investigate the alternative functions and possibilities of so called the little theatre movements by the comparative studies of those movements in the US, Japan and Korea. Taehangno, a theatre town in Korea, has flourished as an incubator to young artists and has housed over one hundred small theatres in the theatre district in Seoul. In recent years, however, the Taehangno theatres have pursued popularity and commercial success. The fact that the idea of alternative theatre as being experimental and therefore non-commercial has shifted and started to lose validity was my main concern. How does the alternative theatre function in this postmodern consumer ridden world of capitalism? To find an answer to this question I conducted a research on the Off-Off-Broadway theatres of Manhattan found some interesting factors: the emergence of Asian American theatre to be appreciated by the general public, the problem of translation, and disconnection among the theatres. I also found a good model case to answer this question: New York Musical Theatre Festival, a festival of little theatres, which supports emerging artists from various countries. It offers the possibilities of a new function of little theatres today.

Participation of the 10th International Semantic Web Conference

Kanako ONISHI

I attended the 10th International Semantic Web Conference (ISWC) held at Bonn, Germany from 23th to 27th October. The conference is the most prestigious conference related to Semantic Web technology. I have been doing research on developing a Semantic Web framework based technology, so it was so nice for me to have been able to attend the conference to study the recent trends of the technology and to learn new technologies in that area. Besides, I met many active researchers and could discuss a lot of issues with them. Everything related to the conference motivated me to further elaborate my research.

Structural analysis of ‘Invitation’ discourse: Focusing on the comparison of the language behavior of Chinese and Japanese native speakers in ‘negotiation units’

Huang Mingshu

This reporter received funding from the “International Research Program for the Advancement of Women in Leadership” program’s “Student Overseas Visits Project” and has participated in the International Congress of the “East Asian Research Society for Japanese Language Education and Japanese Culture” which was held from 2nd till 8th of November 2011 in Paris, France. The results of this research are as follows:

First, Chinese native speakers utilize the ‘negotiation unit’ regardless of the degree of burden. On the other side, Japanese native speakers do not use ‘negotiation units’ in low-burden situations, as is the case in scene/situation 1 , but do use it in scene/ situation 2.

Second, the findings suggest that, whereas Chinese native speakers in most cases build the ‘negotiation unit’ through a series of exchanges, the Japanese native speakers build the ‘negotiation unit’ in invitations through mostly only one exchange.

A Survey on the sustainable impact of JOCV program for physiotherapists at Fiji

Nozomi Kobiyama

JOCV program of physiotherapists started at 1990 and continued in Fiji was surveyed. 5 hospitals where JOCV dispatched physiotherapists from 1990 to 2011, as well as the Fiji National University where a senior volunteer is dispatched were surveyed. The main three results of the survey were as follows. First, JOCV physiotherapists were often treated as “one of staffs” at the hospitals, and this type of treatment often negatively affected skill transfers. Second, I found that donated equipment were well used for a decade in some of the cases, but at the same time, mobile equipment, like wheel chairs, were easy to be lost. Third, a new project was developed after JOCV dispatch, in addition senior volunteer started working as a clinical educator. The last two points show that the projects have positive effect as to the sustainability of a skill transfer.

Presentation and Research about Fathers' Use of Internet, and Child Care Involvement and Marital Relationship

Takayo SASAKI

I presented about the effects of Japanese fathers' IT use on marital relationship and child rearing using quantitative data at the 73rd NCFR Conference. I found that the Japanese fathers' IT usage concerning child care significantly increases their communication hours with their spouses and these hours promote their marital relationship. Furthermore, I found that the fathers' higher perception of their marital relationship enhances indirectly their involvement with their children. These results show that fathers' Internet use plays a direct and indirect role in positively affecting marital relationship and participation in child care. My presentation resulted in lively Q&A session. Moreover, I collected much significant information about the technology use in families and couples.

A research on Circus Amok: its performance and reception

Rino Sato

The purpose of this research is to examine the performance of Circus Amok, a New York City based experimental circus company. Established by Jennifer Miller, Circus Amok is now offering free performance throughout the city parks and streets. Based on the archival research at New York Public Library, this research project has analyzed the troupe's historical development and political commitment, as well as its position in the downtown avant-garde venues. All of these analyses serve to gain the better understanding of the troupe's present situation, especially with its unique engagement with its audience.

How do intermediate learners of Japanese perceive recasts and meta-linguistic feedbacks that are provided to inappropriate utterances of particles? -- An analysis of stimulated recall interview --

Sugo, Sachie

The current research has been conducted to investigate the learners' perception of recasts and meta-linguistic feedbacks, on the errors of particles. Their meta-linguistic knowledge of the particles was also investigated. In dyadic conditions with a researcher in which 11 learners participated, two oral story narration tasks were conducted. The first task elicited learners' protocols on the meta-linguistic knowledge. During the second task learners received recasts and meta-linguistic feedbacks on their errors of particles. The "stimulated recall" interview was conducted in addition to the second task. As a result, it can be hypothesized that meta-linguistic feedbacks are better to lead the reaffirmation of the rules using particles than recasts.

A Research of Historical Documents related to the Early-Fourteenth Century English Court

Sayaka Tsuneki

My overseas research concerns the reign of King Edward II (1284-1327) and his court in England. The depictions of the relationships of the King first with his wife, Queen Isabella, and second with his favourites in political discourse are considered from a gender and sexuality studies perspective. The association between the treatment of these depictions and the normative and dominant culture of heterosexuality at that time is explored. This analysis provides new insights into the political culture of the time. I visited the Bodleian Library in Oxford and The National Archives in London to collect manuscript sources such as royal charters and printed sources such as calendars and transcripts.

The Fieldwork in China Focused on the Area of City and the Emperors' Graves for the Research on *the Yu-Guan Statutes* in Tang dynasty

Mizue Nagai

The Yu Statutes is the law which institutes rules about the discussion and the punishment for the crimes in ancient Japan. The government of ancient Japan enacted this law referring to Tang *the Yu-Guan Statutes*. I am studying the *Yu Statutes* through the comparison with *the Yu-Guan Statutes*, and analyzing the particular system of the sanction against crimes in ancient Japan. Therefore in this time, I have visited history museums and relics related to the city and the emperors' graves of Tang dynasty in Xi'an, Luoyang and Beijing. From this fieldwork in China, I have collected a lot of important information concerning the region of my research.

Research of Les Ballets des Champs -Élysées

Natsumi FUKASAWA

The purpose of this research was gathering and checking informations about Les Ballets des Champs-Élysées.

I've visited the Bibliothèque-Musée de l'Opéra National de Paris to research various reviews and critiques on Les Ballets des Champs-Élysées in newspapers, magazines and books. Moreover, I've checked many programs and house programs of that company and some recitals.

I've also researched various films such as Roland Petit's *Les Forains* and Jean Babilée's films and Les Ballets des Champs-Élysées's documentary at the Cinémathèque de la Danse in Paris.

It will become clear the individuality and meaning in the context of the French post-war dance scene through these research.

The Field Study on the Tang Chang'an City

Eriko Furuuchi

In this foreign research and study, I made an observational investigation in the remains such as the temples and the Damming Palace etc. which were dotted with the ruins of Tang Chang'an City at Xi'an in Shaanxi province of China in order to clarify the scale and structure of the Chang'an City. Furthermore, visiting the Historical Study Institute of the Academy of Social Sciences and Beijing University which are engaging in the advanced historical study, the National Museum of China, the National Palace Museum, I made a collection of historical materials over the Chang'an City which were not available in Japan

Report of Study on Public Outreach Activities of Science Education at Cornell Cooperative Extension

Nozomi Hotta

The author has been investigating university outreach activities involved in science education outside Japan. Since their establishment, Land-Grant colleges and universities have developed a unique system for providing higher education to regional farmers in the United States. To study their practices, the author visited Cornell University for five days. The mission of Land-Grant institutions for teaching practical agriculture, science, and engineering is based on the Morrill Acts (1862 and 1890). A literature review and the results of interviews concerning the activities of outreach administrators, educators, and researchers are included in this report.

“Spectres of World Literature” and Today’s World Literature

Megumi Matsuura

In this research I attended the conference “Spectres of World Literature” held in the University of London. World literature, originally declared by Goethe in 1827, has at last been emerging as the new mapping of literary system. However, the euro-centric structure which has long dominated both social and literary fields still remains to be powerful underneath. In this conference the presenters were deeply concerned with the new situation and problems emerging in today’s world literature and tried to explore its condition from Marxist, postcolonialist and historical viewpoints. Meanwhile, it is required for researchers of English literature in Japan to rethink their own standpoint in this uneven constellation of power in today’s world and relate to literary texts in original and effective ways.

英語ライティングにおける盗用行為：その実例に関する研究

Xin Yao

2011年9月、「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクトの補助金を受け、中国にて調査研究を実施した。中国の二つの大学で英語教師に対するインタビューと英作文授業の見学を行い、英作文の教授法、盗用や引用規則についての教育現状を調査すると同時に、中国人大学生の英作文実例の収集も行った。本調査を通じて、中国の大学の一般的な英語教育現状、カリキュラム及び英作文授業の組み立て、教科書の内容や試験システムが英作文の教授法に及ぼす影響を明らかにした。現在執筆中の博士論文は英語ライティングにおける中国人大学生の盗用行為をテーマとしているが、今回の調査結果を分析し、論文に反映させたいと考えている。

Clinical Studies in Grieg Academy Music Therapy Research Center —Based on the Tradition of Culture-centered Music Therapy—

Rika (Ikuno) Yamamoto

From November 28th to December 8th, 2011, the author participated in the Grieg Research School for Interdisciplinary Music Studies in Bergen University, Norway. The purposes of the visit were, 1) to present a part of the doctoral research on “relationship and meaning on music therapy clinical process,” 2) to consult with the researchers at Grieg Academy Music Therapy Research Center, and 3) to observe the clinical sites for children. It was greatly influential for the author's project, to experience the Center's new integrative actions for the process-oriented research, based on the traditions of culture-centered music therapy and the qualitative research.

Investigation for research on stigma of families of children with genetic conditions

Motoko Watanabe

Stigma is defined as an attribute that is deeply discrediting. It has been reported that parents of children with genetic conditions perceived stigmatization, which affects the development of their children. It is important to know their experiences and coping strategies against stigma for support of the families in genetic counseling. In Japan, however, there is no report of research on stigma associated with genetic conditions. The present investigation was conducted to elucidate the current trend and issues of stigma study in the genetic counseling field. This was achieved by attending the conference of the National Society of Genetic Counselors and interviewing researchers involved in studies of stigma associated with genetic conditions.

書 名 文部科学省特別経費「女性リーダーを創出する国際
拠点の形成」(平成 22 年度—平成 27 年度)
平成 23 年度「学生海外派遣」プログラム報告集

発 行 日 平成 24 年 3 月 31 日

編集・発行 国立大学法人 お茶の水女子大学
リーダーシップ養成教育研究センター
〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
T E L 03-5978-5520
E-mail info-leader@cc.ocha.ac.jp
U R L <http://www.cf.ocha.ac.jp/leader/>

編集事務 国立大学法人 お茶の水女子大学
リーダーシップ養成教育研究センター
アカデミック・アシスタント 小濱 聖子

編集協力 国立大学法人 お茶の水女子大学
文教育学部
アカデミック・アシスタント 浦川 修子
